



新宿発
318号

あごら35年に想う

澤地 久枝
戸田 順子
浅野美和子
福島みずほ
斎藤美栄子
得田 紀子
野村三枝子
栗山 満子
登石 知子
飯島 愛子
平野 俊子
滝島 典子

福田 光子
小松ともみ
井上 輝子
野々村恵子
高木 栄子
倉田 侃司
土屋 隆司
濱名 育代
田畑みどり
押見 操子
桑田喜美子
斎藤 千代

山村 ふさ
西田冬至子
小谷 訓子
岸本 美鈴
山本 紀子
河野 信子
菅野 真治
山下智恵子
森崎 民子
富永 ルリ
中村 道子

沖縄から 国際的連帯で、「軍隊の駐留」を問い続ける
新潟から いま、そこにある支援金、義捐金
星野弥生 「志」ある医療をキューバに見た！
台所の科学力2「ラップ」は、何でできているのかご存じですか

虫

しま・ようこ

よわ虫

なき虫

おこり虫

いばり虫

しりまくり虫

虫がいい

虫のいどころ

虫がすかない

虫がおさまらない

虫のしらせ

予感ばかりふくらむ 虫のせい

はぐれ虫

わたしの中の おびたらしい虫たち

夜半 どこからしのび込んだか

てんとう虫の 水玉に乗って

背の黒まるより小さい 地球へ

男たちが いばり虫を追い出すと

透明な黒まるが 飛び出す

ホップ ステップ 宙に消えて

いつのまにか35年に

いつのまにか〈あごら〉が三十五年になっていた。

正確には去年の二月十七日が満三十五年。この特集は、昨年出すはずだった。

三十六年目に入った今年になって、「三十五年号」を出すのは、非常識なことだが、この非常識も、古くからの会員の方がたは、「それも〈あごらの〉と、多分、笑って受け止めてくださるだろうと、三十六年前を思い出した。

六〇年代の終わりから七〇年代の初め、多くの女性グループが次つぎに生まれ、私たちが把握していただけても、一二〇を超えたが、それぞれから送られて来る機関誌は、ほとんど「ザラ紙にガリ版刷りのペラ一枚」。読みにくい一字一字を、深夜、読みながら、私は何度も涙を流した。

一人ひとりの深い思いを、雑誌というかたちにして伝えられないものかと、しだいに思うようになって、最初『BOC』の名で発行する予定だった小さな雑誌は、「市民の広場」を意味する『あごら』として誕生した。一応、主な新聞社に贈ったが、毎日新聞の雑事の記事に、十五字で紹介されたほかは、恐らく朝日の記者と推測される「朝日夕子」氏から、「おそろしい雑誌が出ましたね」というハガキが一枚届いただけで、完全に無視された。

友人・知人と、各界でご活躍の方がたには、合計一二〇〇部を贈ったが、いちばん喜んでくださったのは、山川菊栄先生。そして、当時はまだ大学院生の、井上輝子さんだった。そして、思いがけず多くの名の知れた方がたが、固定的な読者となってくださったのは、私たち以上に、「女性であること」によってご苦勞をなさっておられたから、と思う。

三十五年。その方がたは、ほとんど鬼籍に入られた。いま女性の情況は、当時とは一変しただけに、あらためて先達のご苦勞とお心づかいが、深く心に沁み入る。（斎藤千代）

2



| | |
|------------------------------------|-----|
| 我が罪責 | 49 |
| 「あごろ」三十五年おめでとつ。そして私の三十五年は | 50 |
| 「平和への想い」と「やさしい視点」に共感 | 54 |
| 自治体労働者として思う | 55 |
| 三十五年間の「かけがえのない友」として | 56 |
| 「私と「あごろ」の出会い」——そして今 | 59 |
| あごろ三十五年に想う——挫折感からの回復と旅立ち | 60 |
| 「あごろ」と関わり続けて | 62 |
| 「あごろ」のおかげで…… | 64 |
| 師を得、友を得、志を得た | 66 |
| 「あごろメイト」に励まされ続けて | 67 |
| 「普通の人」に出会ったよろこび | 70 |
| 最近の「あごろ」から印象に残ったこと | 72 |
| 生きていく力 | 74 |
| 「あごろ」に導かれて読んだカストロに関する二冊の本 | 77 |
| 「あごろ」と出会う | 78 |
| 「あごろ」と出会う | 80 |
| 瀕死の「あごろ」を、なぜ続ける | 83 |
| 沖縄から 国際的連帯で、「軍隊の駐留」を問い続ける | 88 |
| 新潟から いま、そこにある支援金、義捐金 | 90 |
| 「怒」「志」ある医療をキューバに見た！ | 95 |
| 「台所の科学力」 第二話「ラップ」は、何でできているのかご存じですか | 108 |
| TOPICS | 109 |
| 会と催し | 117 |
| あごろのあごろ | 127 |

| | |
|-------|-----|
| 河野 信子 | 49 |
| 野村三枝子 | 50 |
| 土屋 隆司 | 54 |
| 菅野 真治 | 55 |
| 栗山 満子 | 56 |
| 濱名 育代 | 59 |
| 山下智恵子 | 60 |
| 登石 知子 | 62 |
| 田畑みどり | 64 |
| 森崎 民子 | 66 |
| 飯島 愛子 | 67 |
| 押見 操子 | 70 |
| 富永 ルリ | 72 |
| 平野 俊子 | 74 |
| 桑田喜美子 | 77 |
| 中村 道子 | 78 |
| 滝島 典子 | 80 |
| 斎藤 千代 | 83 |
| 桑江テル子 | 88 |
| 押見 操子 | 90 |
| 星野 弥生 | 95 |
| 松崎 早苗 | 108 |

臆せず to 眞実を語ろう

澤地 久枝

「あごろ三十五年」に、まずお祝いを申しあげます。長くつづけることは困難ですが、確かな力をもたらしめるものでもあります。

友人に熱心な読者がいて、すすめられて読むようになりました。

勇気とは、行動の勇ましさだけをいうのではなく、事実を語り、意思をつらぬくとき、ひるまない強さをいうのだと思います。

この国の全体が、なにか腰がひけてきて、明確な意見の表明、結論をきっちり言うことを回避する風潮があります。

このままでゆけば、平和も、女の「まったくき解放」も、あやうくなると思います。臆せず to 眞実を語ってください。

国境をこえて、志をつないでゆきたいと思います。

二〇〇八年二月

(東京都・作家)

基層から聞こえる複数の声

福田 光子

雑誌『あごら』の創刊の頃、まだ私は東京に住んでいて、少しの間、「読書室」に書評などを送ったりして〈あごら〉に多少のかかわりを持っていた。九州に移り住むことになり、退職して止まり木を失い、羽根を落としてバタバタと市井に暮らす身になっていた或る日、見知らぬ人からの電話で博多駅近くのホテルのロビーに午後八時集合。知らぬ顔で集まった。

これが〈あごら九州〉の旗上げとなった。

集まった七人は、すでに雑誌『あごら』の読者で、それぞれ思い入れを持つ「心やさしい七人の侍」であり、その日が長いつきあいの始まりだった。一見の客が、まるで十年の知己であつたかのように、月二回の例会が始まった。

次から次と発刊の『あごら』が例会のテキストだったが、号を追って特集号の内容は、「女と教育」「女と法」「女と生涯学習」そして「女と戦争」と、重量感を増し、一回の例会では歯が立たずに散漫になりがちだったが、列車で熊本から参加する人もあつて、気合いの入る日もあつた。

が、綺麗ごとでは済まない。ある夕、講師を招いて、いよいよ卓話が始まろうとしたとき、突然「こんなテーマは無意味だからやめよう」と叛乱が起こった。すでに数回参加していた人たちと、その日新顔の数人。せっかく夜の時間にわざわざ出向いてくださった講師には、全く失礼なこととなり、企画した当事者の私は、その場の処理に窮していた。

「柵のない広場（あごら）」に期待を寄せる人びとの置かれている立場は多種多様で、温度差も異なっていた。当時も、離婚の危機、家庭内暴力、いわれなき差別の重圧に、やり場のない苛立ちをぶつきたい。その悩みの受け皿とはほど遠い「お勉、強」に対する腹立ちまぎれの叛乱。私は頭をかかえた。筋書き通りにはいかぬ。最後の着地点に降下するまでの想像力と時間に気づいていなかったのだ。

さて、当時は運営会議が東京で頻繁に開かれた。

情報や出版の東京一局集中に一石を投ずる趣旨から、北は北海道から南は九州まで、全国に散在したグループ（あごら）の各拠点から運営委員が出席する運営会議は、新宿の事務局で開かれ、（あごら九州）からわたしも上京。全国から集まった運営委員と運営方針をめぐって始まった議論は、真夜中になっても終わらない。編集方針というよりは、多くは資金の問題で、要は会員の年会費の枠内におさまりきれない出版費、事務所経費を、どうするかであった。

女の情報誌「あごら」を売り、販路を拡げるには、内容で勝負すること。年間の特集号のテーマをあらかじめ決定しても、当時の激しい時流に生起する女性の情報を的確に、そして早く、読者に手渡すことは、雑誌の使命であり厳命でもある。

さて資金は。創造力の銀行（BOC）と（あごら）を車の両輪とする事務局の収支案の説明は、運営委員には必ずしも「わかりやすく全員納得」というわけにはいかない。長い髪をうしろにかき上げながら（あごら）の在り方、リブの雑誌の方向性などを論じ、事務局の説明不足を衝く激しいやりとりは、茶碗や皿が飛ばないまでも息を呑む場面もあって、当時の（あごら）運営会議を思い出す原風景でもあった。

旗あげした〈あごら九州〉は、福岡市内笹丘の小島さんのおたくに窓口を開いた。

ためこんだ悩みを電話で相談する声を包みこむ小島サカエさんの博多弁の対応で、「聞いてもらうだけで気持ちが鎮まる」ケースから、かなり深刻な問題まで。ある時は夜勤の看護師さんの赤ちゃんを預かったり、女性の人権にかかわる様ざまな相談、そして、きわめつけは日本初のセクハラ裁判に発展したA子さんの駆け込み訴え。女性センターの相談窓口などなかったころの重い役割を、けっこう〈あごら九州〉がになっていたことは、知る人ぞ知ることだった。

高台に在る小島さんのおたくの、玄関までの石段を上がりながら、私は「笹岡の東慶寺」と呟いた。

いま熟年を迎えている〈あごら九州〉のメンバーは、その頃、皆若く元気だった。学習会だけに満足せず、映画の上映会も企画した。デンマーク映画「女ならやってみな」のポスターを夜中の街の電柱に貼りまわり、上映は成功した。

その頃、全国の拠点持ち回り運営会議では、遠来の会員のもてなしに妙意をこらし、会議の終わったあとの懇親会ではエンターティナーに変身して、身の程知らずにも「白鳥の湖」を演じて抱腹絶倒。「運動は楽しくなければ」などと嘯いたものだ。

若かった彼女たちも親になり、子連れで続けた例会に保育はつきもの。自転車の前と後ろに一人ずつ乗せて参加した元気印も、いま大学の準教授。しかし転機は静かに訪れたのだ。

国際婦人年に続く十年は、見えない仕掛け人たちによって、基層から聞こえる複数の声を天の声に仕立て上げ、地球規模のイベントにしたエネルギーは、何だったのだろう。

第二次世界大戦後、世界を一度ならず二度にわたって巻きこんだ戦争の惨禍に対する深い反省は、その根源に在った女性差別に目を注ぎ、その撤廃を政策課題としたことは、紛れもないフェミニズムの果実であった。

斎藤千代さんが、三〇人で飛んだメキシコ。第一回の世界婦人会議の詳細な見聞の記録（『あごら十二号』）は、不思議な感動をよび、まだ見ぬ世界の知らない国の女性のおかれている状況に胸を衝かれた。

第二回のコペンハーゲンへ。〈あごら九州〉からは小島サカエさんが参加した。そのいわばひとり旅を案じていた私の目に、帰国してからのサカエさんは、「めざめた人」であった。「母国には戻れない」と退路を断って世界の人びとに訴えたいと参加した途上国の一人の女性のことを印象深く語っていた。スローガンにある「平等」も「発展」も、「平和」なくしては成り立たない。わが住む博多の街が空襲によって焼け野原となった昭和二十年六月十九日を朴して「平和の集い」を女性団体に呼びかけ、非戦を誓うとともに、子どもたちに残す平和な世界を願い、以来二十二回。空襲体験を語り継ぐ運動は、戦争資料館の建設へと広がりつつある。信じる宗教の違い、主義主張の違いを超えて賛同し、福岡市女性団体交流会の年中行事に定着したのは、小島さんの発想とエネルギーであり、それは〈あごら九州〉も支えつづけた。

コペンハーゲンから五年。ナイロビで開かれた第三回のNGOフォーラムへ小島さんに背中を押されて〈あごら九州〉から七人が参加することになった。ナイロビの十日間については『あごら』一〇四号「ナイロビが語りかけるもの」として編集。

ケニヤッタ国際会議場でのオープニングは、アフリカの音楽に合わせて大地をゆるがすように大き

な体をゆらしてゆつくりとリズムにのせる独特の踊りに始まった。突き抜けるように青い七月の空。ナイロビ大学の構内を彩る国際色豊かな女性たちの集会の熱気。芝生に円陣を組んで瞑想するグループ。木陰での辻説法はベティ・フリーダン。非日常の世界を見たナイロビであった。

〈あごろ〉が開いたワークショップのひとつ「戦争と差別」で戦争体験を語り終えたとき、ヨーロッパ系の女性が駆け寄って私の肩を抱いて感動を伝えてくれたことも、印象深かった。

帰国して、この体験は、大なり小なり、それぞれの飛翔を広げたかに思われる。

起業を志した人。地方自治体の女性政策に関わりを持つチャンスを得た人、新しいグループを立ちあげた人、政治家への道、留学などなど。〈あごろ九州〉も、その例に洩れず、淋しくなった実家を守るメンバーは減ることになった。しかし、灯を消せない。小島サカエさんという大きな存在を失った今、その喪失感の中で、月づきの例会は、欠かすことなく細ぼそと長期持続。

三十五年。例会は五百回をこえる。

*

時の流れは小さな反転を繰り返し、流れを横切る変化の実相を見えにくくしてしまう。会員も、昔からの「あごろ」の読者も、高齢化し、販路の拡張は易しくはない。出版界が活字離れに悩み、メディアの変化も見逃せない。

「〈あごろ〉の役割は終わった」とする評論家もいる反面、「この時代にこそ必要とされる」という反論もある。

フェミニズムの流れは女性学の盛行を促し、ジェンダー論の発展を進めた。男女共同参画は行政の力なしに政策課題とはなり得なかった。条例や参画都市宣言によって一元化の歩みは進む。行政にコ

ミットして進む単線化の道は、いつか来た道の危うさをも伴う。複眼で見る認識が必要とされる時代でもある。

いま、雑誌『あごら』は、三一八号に達し、三十五年に亘り基層からの声を聞きながら、記録にとどめた。人にとつて、過去はうすれてゆく記憶の中に、鮮明な事実の輪郭を失う。記録によつて記憶は修正されるしかない。一九七〇年代から三十五年、唯一生き残ったリブ系の雑誌として、いつの日か必ずこの集積は、記録の装置としての意味を果たすと思う。

(福岡市中央区)

「私は何ができるか」を見出した

山村 ふさ

一九八〇年、コペンハーゲンで開かれた国際婦人年中間年の集まりに参加した。その時、名古屋から参加の高橋ますみさんに「あごら」を紹介され、ずっと読者を続けてきました。

「あごら」のねがいをそのままに守り続け三十五年。他の婦人の刊行物にあきあきしていた私は、むさぼるように読みつづけている。編集者のたゆまぬ努力に敬意を表するとともに、「私をひきつけてやまない〈あごら〉の魅力は何だろうか」と思いつづけている。

ただ、欠陥は、財政力が弱いことと、経理の不十分さにある。それを克服して、この貴重な「女性の発言のとりで」を存続していったほしい。

私が発行した個人誌「カサビアンカ」は、好評をえたのだが、四二号で止まってしまつて、惜しいことをしたと思つてゐる。地方のひとりの読者として、なにができるのか、それを見出すことが、三十五周年記念への賛辞になるのではないだろうか。

(伊勢市 三重県退女教会長／三重県日中友好協会副会長)

〈あごろ〉に出会う

戸田 順子

人と人が出会う広場——それが〈あごろ〉ということを知る。もう十余年前のことになろうか。

〈あごろ〉を通して出会つた人たちの思い出は尽きることなく、あたたかい記憶がよみがえつてくる。点と線が縦横に動きまわり、あの日、あの時の出会いが交叉して、また新しい出会いが生まれてくるという不思議な繋がり。対話する喜び、何かを知る、教えられる、憩う、日本のどこかでいつも出会える〈あごろ〉の仲間がいることを痛感する。

細い糸か太い糸か、時には切れそうな糸になつたり、しっかりと結ばれている太い木綿糸になつたりしながら、〈あごろ〉の心は、どこか強い絆で結ばれ息づいている。

澤田和子さんに出会う

その広場で出会えたお一人が澤田和子さんであった。

北京での女性会議に参加するため、大阪の空港で待ち合わせをしていた時、初めて声をかけてくださった方が澤田和子さん。

お互いに「よろしく」の挨拶のあと、すぐに、ハートフルなお人柄が私の心をゆさぶった。気さくな「あごろメイト」と一緒にできると思っていたのに、澤田さん是不参加とのこと。空港までわざわざ「あごろ」のメンバーを見送りに来てくださった。心のやさしさが伝わってきた。さりげない会話、人なつっこい身近なお方と拝見した。「見つけた！ この人！」と、ほくそ笑んだ私だった。

澤田さんと、その後、電話で話す機会があったが、名古屋での再会を果たすこともなく終わってしまった。

突然の訃報を知ったとき、あの時の空港での出会いの「コマが私の目の前を走った。そんなことがあつてなるものか！……と。

「あごろ大阪」をしょって立つすばらしい希望の星——澤田和子さんが、不思議な終焉を告げるなんて……。あの星がすーっと西の天空に消え去って行ってしまったのだ。何という無情なこと。大事なお方が、また一人旅立ってしまった。ショックな出来事が私の胸を痛め続けた。

辛く悲しいことだけれど、澤田さんの残された「あごろの心」は、繋がっているよね。出会いに感謝！ 心より「ありがとう」と。

今は静かに遠い天空、西の空を仰ぎ見て、和子さんに「あごろを見守っていてください」と祈る。

母との別れ

九六歳の母を昨秋見送った。

介護看護の日々。妹と二人三脚で母を背負ったあの日々の毎日が思い出されてくる。

「誰でも通る道、行く道」と心得ていても、実には大変であった。体験した人の、み知る苦勞かもしれない。車イスの母を「車」に乗せるには、三人の介護者が要するということも、わかった。体の不自由さを除けば、しつかり会話はできた。しゃべることを楽しんだ母。「もう、私なんか死んだほうがいいでしょう!」と棄てゼリフを放つ親や姑がいる、と聞くけど、「それは嘘、本心じゃないよ」と私は思う。生命の鼓動があるかぎり「死ぬ」という罪な言葉を言つてはならぬ。かぎりある命を全うするのが最高であり、自然の摂理であると思う。人間として、この世に出会ったあらゆる物への感謝。人との出会いは、まさに〈あ、こら〉の精神と同じではなからうか。

戦争という大きな試練を乗り越え、六人の娘をしつかり育てあげた母の苦勞の大きさを顧みれば、「やっぱり母は〈すげえおつ母さんだった〉なあー」。――涙しながら母の偉大さ、強さを思うと、〈すばらしいお母さん〉と言い直してみる。

母はとにかく、いつも明るい性格の人だった。どんなに難儀なこと、ややこしいことに会つても「何とかなる」と言つて、万事を納めていった。母の暗い顔、打ちひしがれた顔を見たことがない。

「ああ、あの調子なんだ、あれでいいのだ!」と子どもらは自然に母の生き方を学んでいたかもしれない。

口達者な母の言葉に翻弄されながら、介護を続けてきた日々。

母を看ることで、私たち子どもは、大きな責任と義務を背負いながら、母の存在を宝に支えてきた。生きる信念をしつかり持っていた母だから、最後の日がやって来るとは思っていなかった。否、「母は絶対死なない（死ぬことはない）」と、子どもたちは強い期待と神がかり的な異常な思いを持ち続けた。……が、百歳の日を迎える目標も遠のき、静かに別れの朝を迎えた。

音楽をこよなく愛し、子どもたちに音楽を自然に指導してくれた父は、五九歳で突然の他界。そして末っ子の六女は五一歳の若さで、母より早く五人の姉たちに別れを告げて遠い空へと旅立ってしまった。今、母は、父と末娘のすみち、ちゃんに出会っているのであらうか。

毎朝、母の笑っている遺影に向かって挨拶する私。「母さん、生きているって、辛いこともあるヨ。お願いだから、これからは私たちのこと見守っていてね」と、この頃では、おねだりの言葉をかけるようになった。

長く生きてきた人生の中では、長生きゆえに悲しみも苦勞も加算されたに違いない。「でも母さんは日常のことを素直に受け入れてくれたよね。食事のとき、デザートを食べるとき、大好きなコーヒを呑むときの貴女の顔は、いつもすてきだったよ。この世の美しい花を愛でるように、『あつ、美味いねえ!』と目を輝かせ喜んでくれたその笑顔は、私の心に深くやきついてるよ。」

人生航路の終着駅に母を送り届けた五人の娘たち。また、斯くの如く、今度は自らの人生の道のりを進めて行くことであらう。

一家の太陽となる母の笑顔。何事にも挫けない生き方をお手本にして私たち、子どもらは、生きて行くよ!

仕切りなおしの人生を考える

母の介護でいろいろな計画を断念することもあった。今ではもう少し幅広く自分の歩みを進めても良いのではないかと思いはじめた。

あと何年、私のいのちが残されているかわからないが、今から、今春から、私の人生を、もう一度あらためて仕切りなおしてみたいと、母を送ってからの一区切りを考え始めた。

いま眠っているDNAの開発に気づいているか、気づくころを持っているが、これからの日々にもう一度咲かせたい花があるのか否か……。もう一人の自分に自問自答する。「人生五〇年」の時と違うのだから……。まだまだこれからの人生を考えなくっちゃね。

我が道を我がところで培って行くエネルギーはまだあるよネ!? と言ひ聞かせる。二〇〇八年は、もう始まっている。動いている。

知る、気づく、そして動く

姑の介護、使用人の世話、八人の他人と同居して、三度三度の食事づくりをしたあの日々のこと、みんなみんな私を大きく成長させてくれた。ご褒美も、もらった。いや、獲得した。

義父母の介護に燃えた残り火を、社会に向ける。社会でお役に立てることが、きつとある。その思いの中で獲得したものが〈シルバーライフアドバイザー〉の資格であった。

実体験が私を動かし、ライフスタイルを確立する方向に動き始めた。

日夜姑の世話で明け暮れる日々。これもまた大変であつたが、〈介護されるより介護できる自分の立場を良しとして、姑の身のまわりを気持ちよくすることに心こめて努めた。

明治生まれのキャリア・ウーマン。教育熱心な、夫の母親は、知的な生き方を常に求め、実践していた。多くの弟子を育てた和裁の師。姑は、まさに私の目ざす生き方でもあつた。

「姑は私」「病人は私」と、立場の逆転を考え、母の面倒をみた、否、見させてもらった。

いま私は、胸を張って、この時の話を、講座、講演の席でお伝えしている。

実体験を通して語ること、感じたことは、嘘がない。虚構でもない。教科書から引用したものでもない。体験を通して語れる教材に勝るものはない、と自負したい心境が、チョッピリ顔を出す。経験よありがとう！ 夫の両親が、今の私の指針をつくってくれたのかもしれない。

動いて、学んで、気づく。介護が私を導き、前に進ませてくれた。夫の両親の無言の計らいによって、今の私は生かされているのかもしれない。

「戸田さんの講演に歌を入れたら？」の助言をいただく。「歌つき講演会」の始まりとなる。

女性の視点で社会を覗いてみると、いろいろな現象が見えてくる。身近な話題の中に、女性の位置づけ、男女間の軋轢^{あつれき}、偏見、不平等なこと、山積みする事柄を、やさしい言葉と表現で、集まってきた女性のみなさんに語る。

歌は幼少の頃より父の熱心な教えを受け、音の中で楽しく育った私だったが、音楽の道へ進む思いは実現できなかった。それでも、歌うことは、いつも私の感覚の中に、今も生き続けている。

歌うチャンスは、いろいろと恵まれていたが、講演を通して更なるチャンスに恵まれた。

歌について語る、メッセージを入れる、作詞、作曲者の心、時代の流れを語る、というプログラムを編み出す。そのうえ、歌を通して元氣起こしを提唱する。——私独自のライフを作りあげて久しい。この頃は、集まってくださる皆さんとご一緒に、若い、若いの日々を楽しみながら、笑い合い、歌い合っている。講演、コンサート、童謡の会を通して、中高年世代の皆様からのエールをいただく幸せにつつまれた私のライフスタイルに、自ら感謝しています。誰でも、いつでも、どこでも歌える日本の歌を作ってくださった先人の方がたにも、「ありがとうございます」です。

そして今、私は！

体験のすべてが私を生かしてくれる。

苦勞も、悲しみも、喜びも、皆、私の良き友、良き指針となって、私を動かしてくれる日々。

気づきと実行で得た私のライフスタイル。

「シンクアンドトーク」の形で、皆さまの前で歌って語っています。

長寿社会としてののんと過ごすことができなくなっている現代の実情を考え、お互いにいろいろな矛盾点を一つずつ解きほぐしていくことも。また問題のテーマを投げかけ、女性の視点で身近に考えられるよう提案することもある。先人の作られた童謡・唱歌・日本歌曲・叙情歌の詩の内容の中にも、共通の思いはたくさんありますね。アンテナを張って、知る、気づく、そして動く。

「好奇の心と努力で自分をふるい立たせることが必要」と思い、実行している。

これからも、決断と勇氣、喜びを友として、具体的に動いていきたい。花を咲かせる日々を念じな

がら、〈あごろ〉の心を大切に生きていきたいと思っています。

(名古屋市長 シルバーライフアドバイザー、童謡の会代表)

「あごろ」との三〇年

小松 ともみ

一九七八年初夏、札幌の旭屋書店に設けられた「婦人問題コーナー」で、脚立に座って本を読んでいた細木昌子さん(現 高石さん)と出会ったのが、「あごろ」と私との、長いつきあいの始まりでした。

「あら、あなたも、婦人問題に興味があるの? だったら私、司法修習生の細木っていいですけど、私の下宿にこない? うちの大家さんが婦人問題に詳しくて、こういうコーナーにも置いてない婦人問題の本がたくさんあるから。また貸しは出来ないけど、読むのはいいと思うから、どう?」と細木さんは、初対面の私に声をかけたのでした。「えっ、もつと面白そうな婦人問題の本があるんですか?」とノコノコとついていった私。いま、考えると、細木さんが善人だったから良かったけれど、これが「統一協会」やら「自己啓発セミナー」の勧誘だったら、どうなっていたか……。まあ、統一協会の勧誘のために、婦人問題のコーナーで脚立に座って「網」を張ることはないだろうけれどネ。(ああ、そうそう、「婦人問題」と記載しているのは、当時は「女性問題」というのは、「男が法的パートナー

以外の女性と不適切な性的関係をもつこと」の意味で使われることが多かったためです。）

ともかく、九州の田舎から札幌に脱出してきた、はやはやの女子医学生の私にとって、細木さんが見せてくれた「あごろ」のバックナンバーは、本当に光り輝いていました。当時の「あごろ」は、まさに資料誌でした。読み応えのある論考と手記、そして「おおっ」と思う内容の、入手が難しい（当時のフツウの女子学生にとって）資料の数かず……。むさぼるように読みました。

今でも傑作だと思う「あごろ22号 男女平等と母性保障」の内容をざっと紹介しましょう。

・いま女の働く場は手記…（全部で14編 以下は抜粋）

パート労働者の立場から

差別的退職勧奨との闘い

新聞記者の立場から

四十九歳の再就職 など

・論文…男女間の賃金格差をどうするか

・政党は私たちを守りうるか（アンケート 当時のすべての政党が回答）

・「保護派」と「平等派」との接点を求めて（インタビュー）

・共通認識をひろげて連帯を（アピール）

・男女賃金差別の判決を聞く（ルポ）

・いま、私たちがしなければならないこと（ティーチイン）

・〈グループ紹介〉労働基準法改悪反対！ 麻の会

有効な男女雇用平等法を成立させる会

・あごら読書室

・あごらのあごら

・新聞切り抜き帖

〔資料〕

・女性に対するあらゆる形態の差別撤廃に関する国際条約

・女子労働に関する法律（国内）（続）

・ILO及び各国の女子（保護）規定の概要

・各政党の雇用平等法案

・家庭基盤の充実に関する対策要綱（自由民主党）

・乳幼児の保育に関する基本法（仮称）の制定（自由民主党）

一九八〇年代、この内容の資料誌が年二回手に入るなら、年会費四、五〇〇円〜六、〇〇〇円（ほかに月刊『あごらミニ』も加えて入手できて しかも送料込み！）は、金銭的には貧乏学生には厳しかったけれども、決して高いとは思えなかったものです。

『あごら』が静かに語りかける事実と主張は、私の生き方を変えました。

『女は手に職！』と言い続けていた父方祖母（開業医の妻）の「呪文」に、影響を受け、いったんフルタイムの職を離れてしまったら、パート職にしかつせず、家庭内の父との関係も劇的に変化して

しまった母（高校の英語教員）の「もがき」をつぶさに見て育った私は、「どこにいても働き続けられる最強の資格が欲しい――」「私が不登校になったわけ、回復できたわけ、が分かれば、同じような子どもの役に立つかもしれない」と考えて、精神科医を志しました。

典型的文系人間の私が、一浪後に共通一次試験（数少ない？若い読者は、センター試験しか知らないだろうな……）施行直前の試験で「九回逆転満塁ホームラン」のような医学部合格をはたしたとき、私は「医者の世界だって、専業主婦の妻をバックにした男たちをスタンダードとして組み立てた（母性保障抜き平等）の世界であることには変わりがない」ことも知らず、「女だって努力すれば、なんとかやっていけるのよ。女性差別なんて泣き言をいうのは、努力が足りないのよ。女で、話して面白い相手なんて、あんまりいないわ」と不遜にも考えていたし、本当は「女である自分」が好きじゃなかった……。

そんな私が『あごろ』を読み、〈あごろ札幌〉で知り合った友人たちと触れ合うなかで、ゆるやかに、しかし着実に変化していきました。私は、本当に「女である自分」を肯定できるようになり、「シスターフッド」を生きるようになり、〈あごろ札幌〉の友人の多くとは、今でも親交を続けています。

私が仲間とともに大学五年のときに設立した〈全国女子医学生の手会〉は、二五年くらい活動を続けていましたが、その後休止していました。昨年初、久しぶりに設立母体となった「全国医学生ゼミナール」の実行委員にエール・メールを送ったら、『医療崩壊が危惧されている今こそ、若い世代では全医師の三〇%を占めるようになった女性医師が、子育てもしながら働き続けられるような（人間らしい労働ができる医療現場）を作っていくことが求められているし、だからこそ、もう一度、全国女

子医学生の会の活動が求められていると思うのです。再開に向けて少しずつ活動していこうと思います」というメールをもらいました。これって、ちょっと嬉しい話です。——以上が、「私と『あごろ』との　これまで」でした。

さて。「私と『あごろ』との　これから」について。

ちょっとネット検索すれば様ざまな情報が入手できる今、『あごろ』がどんな情報を発信していくのか、どんな雑誌であれば固定読者が増えるのか、いま一度、みんなで考える必要があると思います。ふと、思うのは、くしくも『あごろ』とほぼ同じ時期に出発して、現在でも「（アルコール・嗜癪医療業界）で、この雑誌を知らなければモグリ」というくらいに影響力を持ち続けている『Be-』（もとは『アルコール・シンドローム』という雑誌と、その出版母体の市民団体であるASKのことです。『Be-』は安い雑誌ではありません。直接購読で季刊四冊と増刊号との計五冊で年間購読料四、七七八円（税・送料込み）、書店からの定期購読であれば、本誌八四〇円（税込み）増刊号一、〇五〇円（税込み）です。でも、どの特集号も魅力的です。読者（アルコール依存症を中心とする嗜癪問題の当事者・家族・援助職のすべてを対象にしている）が欲しいなあと思う情報が、正確な内容で、かつわかりやすく噛み砕かれて表現されているので、読者層が広い。これまでの蓄積で取材対象のネットワークも幅広く形成されており、（業界）関係の最新情報を知りたいときに編集部に連絡すると『あ、それは*先生が#＃という研究・実践をしていますよ』『その関係は**というところ』に聞いてみたら？』と教えてもらえます。もちろん、私も取材対象になっており、互惠関係ですが。雑誌につい

でも、書籍・パンフ・通信教育などについても、「これだけの手間ひまかけて作られたものです。だから、これだけの対価をいただきます」「このオリジナルを作るのに、これだけの時間・費用がかかっています。コピーはお断りです」という姿勢が明確です。振り込みがちよつとでも遅れると、きつちりと請求がきます（汗）。ネットでの活動も活発です。ネットと連動して動いています。こういう話が「持続可能な『あごら』づくり」に少しでも参考になれば……と書きました。

（札幌市 勤医協メンタルクリニック東・所長）

豊かな感性と 偏りのない捉え方を忘れず 西田 冬至子

二〇年ほど前、息子が幼い頃に参加していた「女性問題研究会」の、当時七〇歳のメンバーから教えていただき、「あごら」を購読するように。

いろいろな立場や状況にあつたり、特別な経験をした女性の本音や考え方からは、学ぶところが多かったです。女性としての豊かな感性や偏りのない物事の捉え方がどんなに大切かも、教えてもらいました。多くの先輩たちの思い——涙、苦しみ、怒り、希望などを自分なりに反すうして、毎号「あごら」を、私の「かけねない生きた教科書」にしてみました。

私の感性や考え方、言動は、男性である息子にこれからも大きな影響を与えていくのだと思うと、

「あごろ」は私だけでなく、息子、家族にも大きな意味を持つ存在になってきたと言えます。「あごろ」に載った多くの皆さんとは、どこかでつながっているような気がします。

この時代、この日本に、女性として生まれてきたのですから、これからも心こころして、私なりに周りの人たちや地域社会とかかわっていききたいです。

いつも本当に知りたいこと、知るべきことを示してくれる「あごろ」にエールを送りつつ。

(兵庫県三田市 主婦・アルバイト)

「エイヤツ」と跳ぶための最初の基地 そしてスプリングボード〈あごろ〉 浅野 美和子

いま私の手もとにある『あごろ』誌のうち、もっとも古いのは創刊号、三号、次が四・五合併号で、おそらく一九七三年初夏のこのあたりから、私は〈あごろ〉に参加したように思う。主婦であることに悩んでいた私に、「何かをしたい主婦のために」という特集は新鮮だった。名古屋近辺の読者グループを作り、集まっては、いろいろな問題を話し合った。熱い思いをもつて集まる女たちは、毎回のよう顔ぶれが違っていて、そのたびに自分の抱える悩みを語ったので、「まるで自己紹介の会みたい」と、言い合ったものである。

やがて国際婦人年（メキシコ大会）が始まり、〈国際婦人年あいちの会〉も結成され、自分の問題がどこかで世界に繋がっていることがわかり、広く深く追究しようと、各種学習会や運動体もできていった。メンバーが増え、楽しい会合だったが、そのころの人びととは、数人を除くと最近会うことは希れである。皆、それぞれの道を歩んでいるということだろう。

忘れがたいのは一七号である。「女と生涯教育・生涯学習」のテーマに沿って、私は「女性史との旧交をあたためる」の一文を寄せた。

早くから「女性史の研究がしたい」と手探りしていたが、そのころ名古屋大学の研究生になろうと思いい立ち、面接を受けた。四〇代の入学志望に教授は驚かれたらしいが、許可された。翌日四月二二日は多賀大社のお祭りで、「お多賀さん」の宮司夫人であつた高橋ますみさんの母君からお誘いを受けて、数人の友だちと拝見に行った。そこで引いたおみくじに、「旧き事ふることの一度止ひとたびみて復またた始まるのきざしなれば、意こころに均ひとしき願望及相談事は皆成就す」とあつた。

あまりに私の状況と気持ちにぴたりしていて、神を信じない私も、大いに励まされた。

（後から聞くと、このおみくじは、ますみさんの母君が書かれた由）。

「女の問題は、横の広がりと同時に、時間の深みを掘り下げて考えるのが大切」と、かねがね思っていて、学生時代も歴史をほんのすこしかじった覚えがあり、その続きをやってみたかつた。喜き之のという、江戸時代の熱田旗屋（現名古屋市）に生きて、「如来教」という新しい宗教を創始した女性のことを研究し始めた。アルバイトの公文塾をしながら、一九七六年から二年間、名古屋大学の研究生として学問の徒になった。三年目に出身校の愛知教育大学に大学院ができたので受験して移り、二年

のところを三年かけて修了した。そのあとは、専門学校・高校・出身大学の講師をしたり、愛知・岐阜県内の生涯学習からお呼びがかかり、女性史や女性問題の話をして、少しは女の問題に目を見開くお手伝いができたかもしれない。好きなことで収入が得られ、多くの人びとと出会うことができた。大学院に入ったところから、門 玲子さん、高橋ますみさん・矢萩美也子さんらと日本の女性史を学習する会〈知る史の会〉を作り、ますみさん宅に毎月集まって、今も続けている。その仲間たちが、『あごら』編集の当番が回ってくると、苦勞して働いているが、私はすっかりご無沙汰してしまい、申しわけなく思っている。

在学中、それ以後に手がけた仕事は、エッセイや研究論文、さまざまな辞書の項目記述、共著三冊、著書『女教祖の誕生』（藤原書店）・『ジェンダーの形成と越境』（自費出版）・歌集『自流』（自費出版）。いま取り組んでいるのは、如来教の史料集『如来教・一尊教団関係史料集成』全四巻（清文堂）の作成で、四年目・四巻目である。どれも充実感のある仕事だが報酬がほとんど伴わず、経済的自立にはほど遠いのが残念中の残念。

思えば〈あごら〉を遠く離れてしまった感があるが、『あごら』が送られてくれば、その中身に共感し教えられるとともに、一所懸命に仕事をしている人たちに尊敬と共感の情を覚える。陳腐なたとえば、ジェンダー平等という山の頂上へ登る道はたくさんあり、私は山を割ったり掘ったりして進んでいるのかも知れない。

〈あごら〉は今の私にとつては、こんな場所へ「エイヤツ」と跳ぶための最初の基地であり、スプリングボードだったのかも知れない。

（愛知県一宮市 女性史研究者）

〈あごら〉三五年に想う

井上輝子

「あごら」が三五周年を迎えられたとのこと、創刊号以来の読者として、まずはお祝い申し上げます。私が「あごら」を知ったきっかけがなんであつたかは思い出せませんが、たぶん、婦人問題懇話会を通じて、斎藤千代さんと知り合つていたためだと思います。第三号の〈ティーチン・原点にたちかえつて女性解放を考える〉に参加させていただいたのははじめとして、「あごら」には何回か原稿を書かせていただきました。

「あごら」は、一九七〇年初頭に生まれた、フェミニストの手になるミニコミ（あごらは「ミディコミ」をめざしておいでですが）のなかで、いまだに続いている数少ない貴重な存在だと思います。ひと口に三五年と言っても、当然ながら紆余曲折があり、財政の窮乏を、何度か訴えられたこともあつたように記憶しますが、そのたびに危機を乗り越えて、今号発刊に至つた根底は、なんといつても斎藤さんのご努力の賜物だと想像されます。

斎藤さんの粘り強い意志の力に接する機会は、多々ありましたが、中でも一九九五年の中国怀柔で開催された第四回世界女性会議NGOフォーラムで主催されたPerformance for Peaceのイベントの折の、斎藤さんの鬼気迫るお姿は、忘れることができません。

「継続は力なり」です。今後とも、息長い、斎藤さんと「あごら」のご活躍をお祈りします。

（神奈川県川崎市 和光大学現代人間学部教授）

「あごろ」でつながった人たち

小谷 訓子

私が「あごろ」と出会ったのは、女性問題・女性学との出会いからです。二〇年ほど前、人生の後半の生き方を模索しているときでした。当時の婦人会館（現男女共同参画センター）の情報資料室で初めて「あごろ」を手にし、「探し求めているものを見つけた」という、衝撃に近い感動がありました。すぐに会員になりました。

当時の私には、「あごろ」は崇高なものであり（これは今もです）、遠い、高いところで輝いている手の届かないお星様のように感じていました。ところがある時、誌面で目にしていた〈あごろ大阪〉のお世話役の藤井里子さん、吉田悠子さんが共に近くにお住まいだと情報資料室のスタッフに教えてもらい、驚きと共に、少し「あごろ」を身近に感じるようになりました。お二人との出会いの機会があり、まったく見知らぬ人であった方なのに、「あごろメイト」だというだけで安心して親しくお話ができました。求めていた〈あごろ大阪〉とのつながりの第一歩でした。

ある時、大阪の会員のみなさんに、と澤田和子さんから「蓮月さんとの座談会」の連絡をいただきました。私がたまたま興味をもち、「資料を読んでみたい」とお声をかけたことから思いがけなく私たちの女性問題グループの〈いんぐす〉で、「蓮月さんのお話を聞く会」をお引き受けすることになりました。それをご縁に澤田さんや新しいお仲間との出会いがありました。

澤田さんは、それ以来いろんな情報を届けてくださり、毎年お年賀状をいただくようになりました。昨年御訃報に接し、積極的なかわりをしてこなかったことを、とても悔やんでいます。

澤田さんからのいただきものがあります。それは斎藤千代さんにつなげてくださったことです。

〈あごら〉の芯である斎藤さんは、私の憧れであり、尊敬する方。「来阪されるので、みんなで集まりませんか」と澤田さんにお声をかけていただきました。

初めて〈あごら大阪〉の集まりに参加させていただき、とても緊張していたのを、今もはっきり覚えています。その緊張を和らげてくださったのが斎藤さんの笑顔でした。寒い時期だったように思うのですが、あったか〜い集いだったなあと、いろいろと氣を使ってくくださり、お世話をしてくださっていた澤田さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

澤田さんには、普段はお目にかかることもなく〈あごら〉を支えてくださっていることを、遠くからながめていました。なので、突然の訃報に驚き、ただそつとご冥福を祈るしかできませんでした。314号の追悼号で、改めて澤田さんのやってこられたこと、遺されたことの大きさに心打たれました。澤田さんも「芯」のある人でした。

今、私は、人とかかわり、つながりを大切にしながら、子どもやおとなの気持ちに寄りそう活動をしています。斎藤さんのように、柔軟さをもちながら凛と生きたいなと、今もあこがれ続けています。灯であり続けてください。

「あごら」でつながった人たちに、心からの感謝をこめて。

（大阪府吹田市 〈子・己育ち相談リリーフ〉主宰）

国会と直結している「あごろ」

福島 みずほ

「あごろ」三十五周年、おめでとうございます。私も、大学生の頃から、「あごろ」を読んでいます。憲法、平和、人権の想いがつまった「あごろ」が、三十五年間の間、いろいろな想いをもつ市民をつなげ続けてきたこと、そのために多くのスタッフの皆さんが努力してこられたことに、心から敬意を表したいと思います。

大学生だった頃から、社民党党首となった今でも、私自身にも、いろいろな変化がありました。

それ以上に、私たちの暮らす社会のあり方も大きく変わっています。

この間に、雇用、教育など、社会の中での格差が広がり、医療においても、救急患者は、たらい回しにされ、いざという時に安心できるものではなくなりつつあります。また、自分の暮らす地域で出産できない。命の誕生の時点から格差が生まれています。

「慰安婦」問題や戦後補償問題も解決していない中で、自衛隊が海外に派兵され、イラク戦争を支援するようになりました。

特に、国会では、小泉政権以降、非常に強権的な国会運営となっています。教育基本法、防衛庁の省昇格、国民投票法をはじめ、多くの悪法が、安倍前首相によって強行採決されました。また、少数者の意見はどんどん切り捨てられています。いろいろな意見をもつ人がいて、それぞれが意見をぶつけ合う、議論を聞かせるといふ民主主義の基本が、数の力で押しつぶされている。それが、今の日本

の国会の姿です。

民主党が対テロ対策を提出し、参議院で可決され、衆議院では否決されましたが、継続審議となりました。この法律の目的の一つは、一年以内に、自衛隊を海外に派兵する際の基本法、つまり自衛隊海外派兵恒久法を整備することです。

私は、代表質問で、福田康夫総理に対して、自衛隊派兵恒久法案について質問しました。

総理は自衛隊派兵恒久法の必要性を言及しました。「大連立」の話が、自衛隊派兵恒久法案を巡って行なわれたことについて、私は大変危惧を感じています。

この法律は、「憲法」という言葉を一度も使わないで、憲法九条を実質的になし崩してしまうことであり、絶対に許すわけにはいきません。

だからこそ、ギリシャ語で「市民の広場」を意味する「アゴラ」の存在が、ひととき大切なのだと実感します。いろいろな運動に関わる方が、自分の思いを紹介し、互いに励ましあいながら、人権のこと、平和のこと、福祉のこと、語り合う場が必要です。「アゴラ」を読んでいると、憲法が、根本的という厳しい存在ではなく、人びとの実感とともにある身近なものに思えてくるのが不思議です。

「アゴラ」には、これからも、そんな人びとの暮らしの実感とともに、憲法や人権、平和といったものを互いに語り合い、わかち合う場として、さらに発展していくことを期待し、楽しみにしています。

私自身も、「アゴラ」に寄せられる多くの皆さんの、憲法を愛する気持ち、戦争を許さない強い思いを読みながら、エネルギーをもらい、この厳しい国会の中で、果敢に憲法を護るため、私たちの暮らしのために、頑張っていきたいと思います。

(参議院議員)

〈あごら〉に支えられた半生

野々村 恵子

終戦時、小学校（入学当時は国民学校といった）一年生だったから、戦後世代のハシリに属するのだろうか。小学校・中学校時代は、教育基本法（一昨年改正される前の教育基本法は、戦後六〇年間、教育の根本を支えた）のもと、民主主義教育をたっぷり受けることができた。都立高校では、へわだつみ会（日本戦没学生記念会）に所属し、受験勉強に悩まされながらも徴兵制復活反対などの平和運動を体験した。大学時代は、安保闘争に加わり、教官ともどもクラス討論を行い、国会デモ、街頭デモに参加。そのなかで樺美智子さんを失った。

卒業後、「男女平等の職場」と考え、自治体の地方公務員になり、仕事として社会教育を選んだ。以後三七年間、教育問題と女性問題に取り組み、国民主体の教育と女性差別撤廃をめざすことに、私なりに力を注いだ。

教育については、「教育権は国民にある」とした一九七〇年の第二次家永教科書裁判における東京地裁判決（杉本判决）に励まされ、PTAの学習や活動を通じて、父母たちの求める教育像を追求し続けたが、学習指導要領や検定教科書が立ちはだかり、また受験戦争に巻き込まれて、なんとも歯が立たず、悔しい思いをした。教育行政に身をおいたわけだが、住民コントロールを考えたはずの教育委員会制度は、早い時期に任命制に変更され、形骸化しきっていた。

女性問題については、高度経済成長とともに女性の生き方も変化し、また、国際婦人（女性）年（一

九七五年）や国連婦人（女性）の一〇年の世界的な動きにも押されて、女性自身の自立を求める学習要求は高まり、社会教育の役割は充実し、やりがいも大きかった。

女性の学習は、「婦人教育」から「婦人問題学習」へ、さらに「女性問題学習」へと変わっていった。部落差別の問題も取り組まれるようになり、あわせて障害者、高齢者、外国人の社会教育も「人権学習」として発展させていくことができた。

しかし、それも一九八〇年代後半からは「生涯学習」の考え方が、「教育は私的なもの」とする規制緩和政策に利用され、公的社会教育も崩壊の道をたどることになる。

そんななか、出あったのが「あごろ」である。九号が初めてであったと記憶するが、さっそく創刊号から取り寄せ、読者になった。

取り上げてくださるテーマは、いつも私の想いと一致しているか、または、私の考えよりも一歩先を行くもので、刺激的であった。問題のとらえ方にも、たくさんの示唆を与えられた。何よりも全国に、さまざまな問題にとりくむ「同志」がいることを知って力づけられた。また、マスコミでは得られない豊かな情報が掲載され、そのいずれもが知りたい情報であった。私が知らなかった、歴史や世界情勢、女性たちの活動にも教えられることが多かった。

退職後、少しばかりさまざまな家庭問題にかかわっているが、「豊か」といわれる日本社会のなかで、何十年にもわたる数千万円の住宅ローンばかりでなく、車ローン、教育ローンの借金漬けの生活は、ちよつと歯車が狂うとたちまち行き詰まり、生活破綻を呼び起こす危うい状況が蔓延している。いまだに性別役割分業論に基づいた核家族像は幻想にすぎない。日々の人びとの生活をないがしろにする戦争推進政策を、なんとしてでも阻止したい思いを強くしている。

（東京都清瀬市）

私と〈あぐら〉——35周年に思う

岸本 美鈴

〈あぐら〉と初めて会ったのは、第二子を産んでもまもなくの頃。前田享子さんが「あぐら」をひっさげて〈鳥取・本の会〉にやってきたのがきっかけでした。

その頃の私と言えば、「都会の空気や文化を知っている私」と、「田舎での子育てを夢中になって楽しんでる私」といて、どちらかと言えば、子育ては楽しいが、都会の香りに飢えていたのかもしれない。

もともと、婦人会活動に熱心だった母から「男に負けるな、女性議員を出せ・責任者に女性を」など、威勢のいい言葉を聞いて育っておりました。

しかし、保育所問題や、給食問題、食、差別、環境など……いろんな問題を学習する仲間たちや、勉強会で、〈あぐら〉の話をすると、「なんだいそりゃ? あぐらかい」とからかわれ、「男に子どもを産めつてか!」なあって極論を言つて揶揄される始末でした。

三三歳の時、地方選に出馬したのも、「あぐら」を読んで、仲間と学習してきていたからだと思います。もちろん、本だけでなく、斎藤千代さんに何度もおいで頂いて、講演会や講座を企画してきたことも関係あると思います。そして、何かのたびにに出会う全国の(あぐら)の仲間たちの小気味よさ。これが本当に「本だけで繋がっている仲間」でしょうか?

(あぐら)は、どこの政党にも属さないし、思想団体でもありませんが、フェミニズムという、ぶ

れない思想・理念を持ってやってきた確かな団体だと思います。

差別問題と闘っている友人たちは、アイヌや部落生まれを、「自分のアイデンティティだ」と誇りを持って運動をしています。その友人たちと学習したり、運動していると、ふっと、「自分の軸は何か」と考えさせられます。その時に〈あごろ〉が私の軸だと気づいたのです。もちろん、「子どもの時に死んで生き返っていること」「親教師に猫かわいがりされ、甘ちゃんに育って、いじめにあったこと」「教師によるセクハラにあったこと、そして不登校」「女にしておくのはもったいない」発言を、よくされたこと——それら、もろもろ、私に起こったことすべてが、私のオリジナリティであり、アイデンティティを形成した根幹です。しかし、自分に起こっていることにどんな意味があるのか、言語で考え、意味づけする際に、「〈あごろ〉で培われた何か」が、生きているのです。

〈あごろ〉に出会うまで、教師がしたことがセクハラであることさえ気づかずでした。私にセクハラをし、私の人生を変えた教師が目の前にきても、ふるえることなく、堂々と渡り合える自分でいられること、いえ、「私が頑張ることで、こいつに歯止めかけるぞ」くらいに自分を保てるのは、〈あごろ〉で培った力ゆえでしょう。

今、三〇年間の塾で誕生した寄宿塾部門が発展し、NPO法人〈十人十色〉が誕生しました。その中に、グループホーム・ケアホーム・小規模作業所などがあり、暮らすところ、働くところで、さまざまな障害や、フラジャイルな部分を抱えた人たちと共存しています。いくつになっても、人には可能性があり、どんな状況でもイキイキと楽しく暮らせることを身にしみて感じています。

会員の皆様、鳥取においでの際には、是非お立ち寄りください。もちろんそのまま住んでもOKよ。九〇歳までの八人が暮らしてま〜す。

(旧姓芦谷 さまざまな人たちと暮らすおかあさん)

「女子大生亡国論」からの解放

斎藤 美栄子

高度成長、東京オリンピック（一九六四年）、いざなぎ景気で、日本が沸きあがっていた頃、そして、クラスメイトの男子たちが、企業戦士、猛烈社員として社会に出ようとしていた頃、私たち女子学生は、大学紛争の看板の立つ校庭で、話し合っていた。「あの先生ったら、『女子大生亡国論』なんておっしゃるけど、どう思う？」と。

その頃増加し始めた女子大生。けれど、彼女らは卒業して、腰掛的に就職しても、結婚、出産、仕事をやめるのだから、世の中の戦力とはならない、との警告であったと思う。その考えに女子学生は反発はしたが、現状は否めないものがあつた。

友人の一人は言った。「母が言うの。『お父様が、『あなたが就職しても、会社にご迷惑かけるだけだから就職はしないように』とおっしゃったわ。お小遣いを下さるそうだから』って」

就職試験を受けて落ちた友人もいた。「その会社は、最初から女子は採らない予定だったそうだし」とのうわさが後で聞こえ、それは不思議ではないと思えた。

大学を卒業する女子に、就職の門戸は開かれていなかったし、社会通念も今とは違った。二四歳は〈クリスマスイヴ〉、二五歳過ぎたら〈売れ残りのクリスマスケーキ〉。

そんな中、私はいえ、卒論のことと、どの人と結婚しようかといったことで頭の中はいっぱいだった。多くの男性同様、私との結婚を望む誰もが、私の就職は望んでいなかった。けれど、お茶、

お花、料理と、花嫁修業をしつつも、私はこれからの人生の武器となるよう、教師や、英語検定、その他の資格を取り、何とか私が私でいられるよう、好きで勉強してきたことが生かせる道はないかと暗中模索していた。

そんな頃、目にしたのが、「BOC（バンクオブ クリエイティビティ）」。どこで目にしたか忘れたが、私は早速この能力銀行なるもののオフィスを訪れた。人材派遣会社やシルバーセンターなどというものもなかった一九六〇年に、しかも女性対象にこれが創立されたことを今思うと、創立者の先見の明に、感服させられる。そのオフィスで迎えてくださったのは、一人の女性。四〇年以上も前のことだが、その印象は今も変わらない斎藤千代さんだった。

彼女に最初に紹介していただいた仕事が医学文献の翻訳。私には難解なそれを手伝ってくれた男性と、私は結婚した。

張り切って研究職に没頭する夫を尻目に、一年目に出産した私は、姑、義弟を含む五人家族のための家事と育児に追いまくられる毎日。学生気分の抜けないまま、「こんなはずではなかった、私もやりたい勉強、仕事があるのに」と悶々とし、翻訳を少々したりして、中腰で育児。

しかし中腰は疲れる。年子で二人目が生まれると、本腰で育児をするしかなかった。

子どもはかわいいとはいえ、家事育児だけではストレスフル。結局、女性にはこの道しかないのか。男性は仕事も家庭も自分のものにできるのに、私の周りの女性も結婚退職や出産退職をしているし。こんな思いでいるのはわたしだけなのか？

私の周りに例外が二人いた。大学の親しい友人たちで、ひとりとは病める姑を夫の兄嫁に託し、夫を残して、アメリカに留学した。もう一人は、つれあいが仕事で長い海外生活を送ることになったにも

かわらず、自分の職場のポストがなくならないようにと、日本に留まった。彼女らとしても辛い決断だったであろうに、「うちは、あんな嫁でなくてよかった」と姑が嬉しそうに言うのを、複雑な思いで私は聞いた。彼女ならずとも、どの姑も、親でさえも、そう思う時代だった。

ちょうどその頃である、「あごら」が創刊されたのは。創刊号に、子育てをしながら必死に仕事する女性のことが書かれていた。思いを同じくする人たちがいる。わたしもいつか……。毎号「あごら」を手にしては、勇気をもらっていた。

一九七二年、しかし、夫の渡米が決まり、三人目の子供を宿して、わたしも同伴した。我が家のあるボストン郊外の女性たちも、専業主婦ばかりだった。だが当時の日本のそれとは少し違うことが、とても新鮮だった。サラリーマンは仕事が終わると家に直行し、男性同士で飲み歩くことはしない。買い物は週末に夫婦一緒が多い。よく開かれるホームパーティーは夫婦同伴で、招いたほうの夫は、かいがいしく飲み物を用意したり、バーベキューしたり、ターキーを切り分けたり。

幼稚園の父母会も、夕方なので、父親の参加も多かった。週末は男性が庭の芝を刈ったり、ペンキを塗ったりしている。男性の家事、育児参加が多い。

「夫がね、『冷蔵庫の上が汚いぞ』っていうの。『気がついた人がひと拭きすればいいでしょ、って』言ってるやつだ。私、一日中そんなことしてるんですもの」とお隣の女性。女性たちは、生き生きとして強かった。それもそのはず。一九七〇年前後のアメリカといえば、四〇年代の第二次大戦で、銃後を護って男性に代わって仕事をした女性が、アメリカ兵が帰還して職場を返した後も、そのときの思い忘れがたく、ウーマンリブを唱え出した頃だったのだ。

二年後、私たち家族が帰国した時、日本は高度経済成長のお陰で、カラーテレビ、車、クーラー、などが普及し、経済的には豊かになっていたが、女性を取り巻く環境は、戦後、大学入学権、参政権を獲得して以来、大きな変化はなかったように思う。女子大学生は増えてはいたが、卒業後の門戸も、給与体系も、男性に比べるとお粗末であった。ウーマンリブも上陸してはいたが、「ブラジャー焼却」、「おしゃもじおばさんのデモ」などが、異様な光景として報じられただけで、日本には根付かなかった。フェミニズムとしてやや緩やかに広まってきたのはその後。男女共同参画という名で形式的にも日本中に広まったのは二〇年後の北京会議の決議を採択してからだと思う。ウーマンリブの雑誌ができては消える中、「あごら」は静かに、「すべての人の権利の平等と世界の平和」を唱えて、世の中の動きを知らせてくれていた。面白おかしくトピックスを報道するのとは違う、地味だが、真実を伝えてくれる、私にとっての社会への窓であった。

その頃、〈BOC〉が専門学校の講師に紹介してくれたのは、嬉しかった。末の子が幼稚園に入った頃だ。翻訳の仕事も頂き、それらが経歴となって新しい仕事も入り、今日まで、家事、育児を優先しつつも、それらも私の生きがいとなってきた。

こうして時は流れ、子どもたちの手も離れ、ようやくほっとしてもいい状態になったとき、家庭のことで私は悩んでいた。そんな冬、友人が、ひとつの広告の切抜きを持ってきて「行ってみたら？」といってくれた。「一九九五年、北京女性会議のコミュニケーターを求む。JTB」。

テスト課題は英語と、女性問題についての小論。〈あごら〉で得た知識が役立った。合格してから、北京会議に向けて婦選会館で行われていた北京綱領草案を英語で学ぶ講習会に半年通って予備知識を仕入れ、赴いた北京女性会議でショックを受けた。世界中から集まった、政府関係、NGO関係の数

千人の女性の熱気、その内容の深刻さ。二週間にわたりいくつもの会場を渡り歩き、JTBを通して来ている日本人に、その内容を訳し、彼女らに代わって質問したりするのが私の役目。テーマは内戦、エイズ、文盲、飢餓、女兒売買、女兒労働、中国の女兒輕視、インドの花嫁虐待、DVなどなど。

「日本にDVはありますか？」ある日、日本女性が司会者に聞かれた。

「日本にはありません。日本の女性は従順だから、起こりません」とつさのことであわてた様子のその人は、そう訳してくださいと私に頼んだ。一応そのとおり訳した私だが、私見だが、と付け加えた。「日本にもあります。ただ表面に出すのは女性の恥とみなされる風潮があるので、おっぴばりにできないのだと思います」と。

DVが日本で公然と話題になるようになったのは、北京会議以後のことである。(二〇〇一年四月に日本で「DV防止法」が発付されたことを、「あごら」のトピック欄で知った)。私が教えている中学生にも、母親がDVを逃れて家を出、その後を追って出てきた中学生がいた。「あなた方だけの問題ではないのよ」と、母子に女性会議の写真を見せて説明した。親権をめぐる係争の中、彼女は今、世界で、しっかりものが言えるよう、私のところで英語の勉強に励んでいる。

きれいな英語でも完全に聞き取るのは難しいのに、アフリカ英語インド英語など、訛りの強い英語を聞き取るのは至難の業だった。「あごら」などによる予備知識があったればこそ、彼女らの言わんとしていることが、伝わってきて、大過なく役目が果たせたのだと思う。

一九七五年のメキシコにおける第一回世界女性会議から一度も欠かさず世界女性会議に参加している(あごら)のメンバーの活躍を、ここで拝見できたのも嬉しかった。五年ごとに開催されてきた世界女性会議の報告は、「あごら」誌に詳しい。

二年後、港区で、女性海外派遣の募集があり、その面接や小論文テストにも、「あごら」や北京会議で見聞したことが役立った。訪問したニュージーランドは、女性参政権世界第一号の国。合わせてオーストラリアも視察し、議事堂、女性市長、弁護士、オンブズマン、マオリ族の人権協会、メルボルン大学の女性学教室、女性に対する待遇の優秀な企業、女性再就職の訓練校などを訪問。優秀な通訳のもと、じっくり話し合ってくることができ、帰国後、報告会を開き、冊子も出した。このグループとの定期的会合は今も続いている。

このような経験のおかげか、二〇〇〇年には国連特別総会「女性二〇〇〇年会議」に「あごら」の斎藤千代さんに同伴という貴重な体験をさせて頂いた。その会の報告は「あごら」誌に詳しく書いた(267号)。その後も、ボルチモアでの女性会議や、毎年二週間にわたって国連で開催されるCSW(国連女性の地位委員会)の取材の機会を与えて頂き、「あごら」誌に拙文が掲載された。

これら一連の会議参加は、私の人生観を変えさせるほどのものとなった。ウガンダの紛争で、夫は殺され、自分は敵の兵士にレイプされたと、たどたどしい英語で訴えた黒人女性を思い出す。また、ロシア兵に侵攻されたチエチエンの話を聞いていて、たまらなくなつて泣き出した女性。聞けば彼女もチエチエンから逃れてきたのだという。命にかかわる悲しみがあつたのだらう。彼女の背中をなでた時の、その長い黒髪感触が今もよみがえってくる。それを思えば、私の悩みで、命をとられることはない。そう達観できるようになった。と同時に、また、「女性の悩みの多くは、ひとりだけの問題ではない、社会の問題だ」という考えに至り、物事を客観的に見られるようになった。

毎回のCSWの会議では、北京で採択された綱領に対する見直しが行われ、各国政府団代表は、自国での取り組みがほぼ順調に進んでいるかのようにスピーチすることが多い。だがNGOの行うセッ

シオンでは、悲惨な状態の訴えが毎回繰り返される。韓国の女性たちが「官民協力して女性省を作ることに成功した」と、意気揚々と、その過程を、映像を交えて発表したのは、例外といってもいい。

先に述べたアフリカやアジアの悲惨な問題がまだなくなっていないだけではない。先進国でさえ、いまだに企業内での男女差別や、セクハラ、DV、レイプ、エイズなどの悩みを語っているし、人種問題もなくなっていない。企業や政界における女性の扱いについて言えば、日本は「後進国より後進」である。アフリカのいくつかの国では女性省が誕生し、それに伴って女性の大臣や役人も大幅に増えたというのに、日本の女性大臣はチルドレン扱いなのだから。

ということ、斎藤さんにも、おどけてこんなことを言ったことがある。

「女性問題を何年やっけても、世の中、たいして変わらないのでは？」

「そんなことないわよ。私の若い頃と比べれば、ずいぶん変わったわよ」

たしかにそうだろう。私がこれと言ったのは十年以上前のことであるが、北京会議以後のこの十年余りで、女性を取り巻く環境や意識は、さらに大きく変化してきている。社会的に見てそう思うだけではない。なにしろ、昔かたぎのわが夫が「あなたを犠牲にして僕は好き勝手やってきたが、感謝してるよ」とか、娘たちを見て「あの子たちはあなたがやりたくて仕方なかったことをやっているんだな」などという言葉を私に漏らすようになったのだから。長男が子供のおむつ替え、保育園の送迎、皿洗いなどを結構楽しそうにやり、「気分転換になる」と言うのを見聞きし、娘の夫が料理して娘の帰宅を待つこともある、などの話を聞くようになったからだろう。この二組は同業同士の結婚なのだ。もう一人の息子は若いうちは夜昼ない記者職で、連れ合いは子育てに専念。それぞれ自分に合った連れ合いを、そして生き方を、選んでいる。「多様性を認めることが大事だ」とは、世界女性会議で女性

たちが繰り返し主張していることだ。人種の、宗教の、結婚形態の、多様性を認め、人権を尊重しよう。」「改善すべき問題も残っているとはいえ、よくなつてきている」と、子供たちを見て思う。自治体で、男女共同を推進するよりも、男の人の気持ちを変え、このほうは難しいと思っていたが、若い世代ほど、大きく変わつてきているようだ。男女平等を取り違え、男女同質と考えるなど、行き過ぎが懸念されるほどだ。ともかくわが家で「あごら」誌を開くことも憚られたかつてとは、状況が変化するとともに、私の悩みも薄らいでいった。

私は千代さんに、こんな意地悪も言った。「いいこと一杯書いても、「あごら」の発行部数は少なくて、ほんの少しの人にしか読まれていないんですもの……」「そのとおり。でも学校や図書館で読まれる機会が少しずつ増えているのよ」と穏やかに返されたが、それにしただけでむなしい、との思いを拭いきれなかった。

だが先日、庭の竹の棒に絡まっていた枯れた朝顔の蔓を捨てようとして、種がたくさんついているのに気がついた。春に、ピンク、白、紫、ほんの数粒ずつ蒔いたのが、双葉を出し、蔓が空中をまさぐつて棒に巻きつき、伸びていつて数個の花を咲かせた。その後、アメリカで、夫と息子家族と夏を過ごし、朝顔のことは忘れていた。かわいそうに誰にも愛でられることなく、暑いさなかでせとたくさんの花を咲かせていたのだろう。その種の数ときたら数え切れないほど。触るとからからに乾いた殻から零れ落ちる真っ黒な種をそつと受け止め、大事にしまった。春に蒔いたら、来年は何十倍にも咲くだろう。人にも分けてもあげられる。——このとき、原稿を書こうかな、と思っていた「あごら」のことがふとおもいだされ、いじらしい朝顔のイメージと重なった。「一粒の種落ちて……」

発行部数が少なくても、三百号過ぎているから、出された数は、数十万冊。読んだ人は、それ以上。その影響を受けた人、その人からまた影響を受ける人、数知れず……。『あごら』から育つて飛んでいった、多くの人たちも、別のところで花を咲かせ、種をつけていることだろう。そんな『あごら』を創設し、メンバーが代わっても黙々とその中で奮闘してこられた斎藤千代さんってすごいと改めて思った。そしてその地味な作業に関わっている編集協力者の方がたも……。

「『あごら』はフェミニズムだけを言ってるのではないでしょ、全ての人びとの平等な人権、そしてなによりも戦争のない世界を希い続けている……。そんなところが、今まで続いてきた原因かもしれないわね」と千代さんは言っていました。

筋の通った明治人のご両親のもと、ご兄妹にも恵まれて幸せなお嬢様として育ち、だが戦争の悲惨を目の当たりにし、価値観も変わった世の中を見て、女性に門戸を開いたばかりの東大に入って勉強された彼女の一途な思いは、ぶれることなく前進し続ける。

この正月、わが家に、環境問題のスピーチで県で二位になった高校生が、母親と挨拶にいらした。「国連でスピーチするチャンスも、誰にでもあるのよ」と、私は写真や「あごら」を見せ、女性の活動を語った。とても感動した彼女は、「世界の人の言葉を正確に訳し、後に残せるよう翻訳家になりたい」と、外語大に進学を決めた。

私が勤めている専門学校の、この学期末の感想文にも、「先生の授業が専門学校の科目の中で一番授業らしく楽しかった」とか、「雑談が面白かった」などの言葉が寄せられた。テロや、九条や、世界の女性をどう思う？　そしてあなたがたは？　などを、教材や、会話に織り込むからだろう。

三単元のSをつけようと忘れようと、かまわない。日本語を使おうと英語を使おうと、大事なのは、

人権・平和を尊重する気持ちがあるかどうかだ。これからも「あごろ」の精神の種まきを、教え子や周囲の人びととしていきたい。彼らが地球に美しい花を咲かせてくれることを願って。

(東京都港区 教師)

「考えること」を教えて頂けた教科書 高木 栄子

私が初めて「あごろ」を知ったのは、名古屋の高橋ますみさんが御講座で紹介された時からです。手もとにあります最初の号は、170号。一九九二年刊のものです。それ以来、ずっと手にとつてまいりましたが、高橋さんのお推めのとおり、私自身に「考える」ということをいつも教えて頂ける教科書となつて、今日に至つております。

あれは何年前でしたか、斎藤さんが富山へおいでになったとき、どういふいきさつであつたか忘れましたが、私もその場へ出させて頂いて、その感動、情景が、いまでも鮮明に、脳裏に焼き付いております。

昭和一桁生まれの私には、今の世の中、嘆かわしいことばかり。「あごろ」に関わつておいでの方がたにのみ、真実の追求のお姿あり」と、いつも思っているのです。

高齢の身には、いつ何時(なんどき)(肉体の)変化が訪れるやもわかりませんが、正常を保てる限り「あごろ」

を読ませて頂きたいと思つてゐる次第です。

何かと大変な状況であるとは思いますが、どうぞご奮闘をお祈り致します。ありがとうございます。

一月二十四日

(富山県上市町)

「あごら」に導かれて

山本 紀子

「あごら」はいつも私のかばんの中。乗り物の中が、私と「あごら」の時間でした。

「あごら」は私にとって道しるべ。いまは何が起こっているのか、起ころうとしているのか、問題意識をいつも投げかけてくれた。そして、ドリンク剤のように活力も与えてくれた。そんな「あごら」に、かんしゃの気持ちでいっぱいです。

「あごら」に出会つたのは、一九九五年の北京会議に行くことになり、事前学習を重ねたとき、仲間の一人に教えてもらった。当時の私は、平和についても人権についても問題意識をもたず、町づくりに関わり始めたばかりの時でした。

北京会議——。私にとつての驚きは、元気な女性があちでもこちでも、一所懸命、熱い思いで

しゃべっている。そして車座になって、さまざまな人種が話し合っている。その光景が珍しく、話の内容はわかりませんが、いっしんに思いを伝えようとしている女性たちに、感動しました。

私も「あごら」を読み始めて、初めて世の中が、霧が晴れていくように見えてきました。沖繩のこと、女性の議員を増やすこと、そして原子力発電の恐怖などなど。新聞では得られない情報を知ることができました。時には電車の中で涙が止まらず、困ったこともありました。

私は巻頭のメッセージが好きです。思いだしては、また読むこともあります。しなやかで、強い意志が感じられ、梓のように思われて、勇気づけられます。

二〇〇七年、広島で日本女性会議を開催しました。広島で開催することは長年の夢でした。いま、終えて、改めて「開催した目的は何だったのだろうか」と、自分自身に問いかけています。

「あごら」315号では、「連帯」の言葉が私には強く印象づけられました。日本女性会議開催地として連帯が築かれたことを願っています。

(広島市安佐南区)

私の知っている斎藤さん

得田 紀子

「斎藤さんとはだれか」と聞かれたら、「母が昔勤めていた会社(BOC・あごら)の社長さん」が、一番簡潔な答えですが、そんな一言では終われない人です。

小学生だった私が、母の職場を訪ねるたびに、やさしく迎えてくれ、封筒詰めなどの仕事をさせてもらいました。ご褒美にうな井をとってもらって、みんなで食べた、それは楽しい思い出です。

父の転勤で京都に移り、中・高・大学を終えるまで十年ほどご無沙汰をしてしまいました。社会人となり東京に帰ってきたとき、久しぶりにお会いしました。

そのときも昔と変わらずやさしく接してくださいました。再開は新宿の中華料理屋さんで、おいしいおこげをご馳走になりました。

女性が都会で働く厳しさ、楽しさを教えてくださった方だと思います。

そんな斎藤さんの後ろ姿を追いながら、私も日々がんばって働いていきたいと思っています。お元気で。

(旧姓 中山)

かけがえのない教材として

倉田 侃司

女子短大の教員になって気づいたことがある。

教員には高齢者が多かった。それも、圧倒的に男性の高齢者。年齢的には、自分の孫娘を教えているようなものだから、すべてに甘くなってしまう。学生もそれを歓迎する(少数ながら、そうでない学生もいた)。

これでもいいのか、という漠然とした疑問はあったが、何をどうすべきかは、わからなかった。女子短大の教員だから、女性の生き方に関する勉強を始めなければなるまい。〈あごろ〉の会員になったのも、そんなところからではないか、と思う。何しろ、三〇年前のことであるから、はつきりしない。以後、わたしにとって「あごろ」はかけがえのない自主教材でありつづけた。

しかし、広島的女子短大・女子大では、あごろ会員に出会わなかった。今も、不思議である。

(広島県 呉市)

我が罪責

河野 信子

③ あ 秋を呼ぶ

② こ 劫火もありや

① ら 羅刹天

小島サカエさんの葬儀の日に。

長い間、フェミニズムばかりに傾いて、中間の性の人びとを無視してきたことに、罪責の思いをつのらせています。

(福岡市中央区)

「あごろ」三十五年おめでとう。

そして私の三十五年は……

野村 三枝子

本屋の店頭に並んでいないので、「あごろ」の存在は、一九九四年まで全く知らなかった。

なにしろ入居当時の団地（千葉県松戸常磐平団地）は、子育てに必要な施設まで完備しているわけではなかったため、その都度、住民たちが当局に交渉し、獲得していくという仕儀であった。

住民の多くが農家の次男、三男で、地方から出てきているケースが多く、親からの資産を受けることができなかったため、企業を持ち家制度の恩恵で家は持てたが、子どもの学資と住宅ローンの返済で生計は苦しく、購読する余裕もなかった。

ようやく子どもが卒業し、ローンの返済も終わり、二度目の青春とばかり、晩学ながら大学に通いはじめて一〇年目、読売新聞紙上で、「あごろ」主催の第四回世界女性会議の事前講習会があるという記事を読み、初めて「あごろ」を知ったのである。

恐る恐る講習会に参加して、坂東真理子氏や松井やより氏の熱のこもった講義を聞いていくうちに、是非参加したいと思った。「あごろ」でツアーを組むというので、渡りに船とばかり、参加を決めたのである。そしてそのツアー顛末記を書いたところ、「あごろ」に掲載して頂き、ご縁ができた。

そこには「夜討ち朝駆けの夫に専業主婦」という高度経済成長政策を支えたシステムに疑いさえ持たずに生きてきた自分には、到底知り得なかった世界が広がっていた。

とくに〈あごら〉ツアーでは、今までの人間関係は絶対出会わなかった、まったくのタイプの違う人たちに出会うことができた。

斎藤千代さんは、小柄で柔和な外見に、強靱な意思と活力を秘め、汲めども尽きぬ知識の泉のような方だ。その泉のまわりには多彩な人脈が張りめぐらされている。もうダメ、もうダメ、とおっしゃるから心配していると、素晴らしい筆者による「あごら」が届くのだ。

故・白井博子さんは、フランス人形のように可愛らしかった。そして、斎藤さんの信頼が厚かった。しかも〈無報酬労働の計測と評価を考える会〉の創始者の一人であった。当初は何回か勉強会にご一緒したのだが、病を得られ闘病生活に入られた。残念ながら薬石効無く、程なくあの世に旅立たれてしまった。しかしその思いを伝えるべく、せめてものご供養に、東京都の助成で冊子が作られた時には、私が頂いた最後のお手紙を掲載させて頂いた。

北京会議以降〈あごら〉のスタッフとなられ、敏腕を振るわれた芦澤礼子さんは、いまやライターとして大活躍である。〈無報酬労働の計測と評価を考える会〉でも、ご一緒に勉強した。達者な中国語は誰しも敬服している。今後のご活躍が楽しみだ。

綿津靖子さんには、一九九七年から一〇年余り「おんなたちの祭り」の実行委員会で大変お世話になった。こちらは楽しく充実していたのだが、自己中で偏屈な私に振り回され、さぞお疲れになったことだと思う。しかし斎藤さんと長年お仕事を共にした方だから、こちらの思い過ごしかもしれない。「あごら」の名編集者であった方だけあって、問題意識が高く、集会やデモに参加されるフットワークのよさには感心させられている。

私事だが、放送大学で、「社会と経済」専攻の卒業研究論文『福島四郎と婦女新聞——明治のフェミニストたち』、「生活の探究」専攻では「働くということ——無償労働をめぐる」を自費出版することができた。しかし出版はプロセスに過ぎず、これを機に思わぬ所から情報を頂くことになり、学問の深淵さを覗いた思いがしている。

「発達と教育」専攻では「男女共修の新しい家庭科」の論文をまとめたが、学校教育の改革が、その何倍ものスピードで変化を遂げている実社会に追いつかないうえ、家庭そのものの多様化も加速し、様ざまな問題が派生しているので、理想論でしかないことを思い知らされた。さらに受験競争のしわ寄せが、家庭科の授業そのものを駆逐しているという。

そして進歩的な女性たちの生き方、保守的な女性たちの生き方の双方のはざまに落ち込んでしまった。とくに結婚しない長女、結婚しても共働きで家事放棄の長男の家庭を目の当たりにすると、「娘はキャリアウーマン、嫁は専業主婦」という願望がのぞき、自己矛盾に陥ってしまった。

今も昔も、子育てには何かとお金が必要。しかし昔はなかったインターネットやテレビなどで、大人も子ども、常に物欲を刺激される。また考えもしなかったインターネットやテレビなどで、いろいろの出現で、物心両面の思わぬ事態に直面させられる。しかし、両親ともフルタイムの仕事をするのが珍しくなくなり、保育所や学童保育も、以前よりは充実してきているようだ。

とはいえ、健康で文化的で快適な生活を維持するために、どうしても必要な掃除・洗濯・料理・家庭教育といった労働まで面倒をみてくれるわけではない。個人に任せられたままである。疲れ果てている当事者は、双方で家事を押しつけ合う。昔と違って物が豊富になったのと過剰包装で、ゴミがたくさん出る生活である。ゴミはまた分別しなければならず、集積所に指定された日に持参しなければなら

らない。これを怠れば、あつというまに台所も居間も、およそ人間の住むところではなくなる。やがて、それを苦にすることもなくなつて、ゴミをかき分けながら平然と生活していくことになる。

政府の少子化対策はお題目だけで、文部科学省も、厚生労働省も、経済産業省も、「子育てしにくい状況を加速しているのでは」と、疑いたくなる。専業主婦か家事補助者が居ないかぎり、家事は停滞してしまうのは火をみるより明らかだ。最近のテレビドラマでも、家のなかを片付けられない家庭がよく取りあげられているので、けつして珍しいことではないのかもしれない。

そこで、ほとほと見かねた失業状態の老専業主婦が、その価値観を振りかざし、しゃしゃり出る。頭の片隅ではお節介と知りつつ、「体が動くうち」と、周囲や自分に言い聞かせ、手伝いに掛ける。しかしその代償は小言となり、現代の嫁姑戦争の様相を来たしかねない。ここでも理想と現実のギャップに遭遇している。従妹から「放っておくことよ」と、忠告を受けたが、悲しいかな、私にはできない。無償労働を承知で、今日も家事をしに出掛ける。

もちろん摩擦を恐れず対話も継続していかなければならないと思っている。手伝った仕事を、きちんと記録して、イギリス人のように賃金を請求するのでもいいかもしれない。

こうしたケースが深く静かに日本社会に浸透している証拠が、「物は豊かなのに、何かといらついている人たちが多い現状ではないだろうか。」「家庭とは別ものの、荒廃した生活空間で生活しているからでは」と、思ってしまう。なんとか解決策はないものだろうか。

なにに――「家事労働を、さらに社会化し、起業として始めたらどうか？」

もう二〇年若かったらそうするだろう。しかし「企業として成り立つのだろうか」という不安もあ

る。家事労働専門家を雇うより、成人した子どもに甘い女親がいれば、それに越したことはない。こうして経済格差ばかりか、日常生活の質の格差にまで及び、深く静かに二極化は進行していくのであらうか。

(千葉県松戸市)

「平和への想い」と「やさしい視点」に共感 土屋 隆司

三十五周年おめでとうございます。

会社では、よく三〇周年説というのがありまして、「三〇年すると、つぶれる」ということが、よく言われます。事由は、世代代わりがあるために、事業がつぶれるということらしいです。その点「あごら」は、うまく乗り切れているようです。きつと、関わってきた仲間の志がすばらしいためであったからと思います。これから、困難を克服して、長く活動が続けてほしいと思います。

〈あごら〉に関わる仲間たちの、平和への熱い想いと、どこまでもやさしい視点が、多くの共感を誘い、今後も支えていこうとする者がいる、と考えられます。

どうか、「やさしさと共に平和へのメッセージ＋ユーモア」をもって、楽しい雑誌づくりを、お願いします。

大切なことは、生き抜くこと。

人生を楽しむこと。

問題があれば、問題を少なくするために、何ができるかを考え、実行すること。

(ベストでなくベターであれば良い)

この三点のなかに「あごら」の大きな指針が託されていることを思います。

つたない文章ですが、三十五周年に向けてのメッセージを同封します。

「大切なこと」というのは、僕にとつての意味です。

「あごら」という雑誌も、僕にとつての大切な体の一部みたいなものです。

それゆえ、僕にとつての指針と重ねてあつてほしい、意味で、この文章をしたためました。

人生を生き抜くこと → 継続する

人生を楽しむこと → 知恵と勇気を与えてくれ、楽しめる

ベター → 完全ではなくとも、できれば前進(進化)をとらえ、すすめる。

以上を、雑誌「あごら」に重ねています。

(大阪市住吉区)

自治体労働者として思う

菅野 真治

私の職場は、官製ワーキングプアのオンパレード

私が働いている山形県尾花沢市の職員もさまざまです。正規職員のほかに、臨時・パート・日々雇用アルバイト・嘱託・振興公社の派遣（委託？）そして、シルバー委託社員など、官製ワーキングプアのオンパレードです。

十一月の市職労大会でも発言しましたが、「一日五、九〇〇円、月二二日で十三万円。手取り一〇万円ちょっと。自立した生活ができない。ダブルワーク（バイト）をすると、総務課は、やめろと言う……親と同居しているから成り立っているのです。」（私の前の職場の青年の話です）

（正職の高卒は、月一四万八千円、一日六、七二七円、時給八四〇円、大卒で月一五九、七〇〇円、一日七、二五九円、時給九〇七円）

こんな職場の、尾花沢市に、未来も希望もないのです。（山形県の最低賃は、時給六二〇円、日給四、九六〇円）

ネットカフェ難民 ニート 引きこもり 格差・貧困社会

一九八五年に成立した労働者派遣法のせいで、非正規雇用者（パート・非常勤・アルバイト・嘱託・派遣・契約社員）が倍増。学校を卒業しても、就職先がなく、半分は非正規雇用者になるしか道がない現状です。フリーター（平均年収一〇六万円）や日雇い派遣にワーキングプア（働いているのに生活保護水準以下の収入）が、激増。派遣労働者は計三二二万人です。（二か月契約の）請負だと、社会保険・厚生年金・雇用保険などの「事業主負担分が節約できる」ということで、偽装請負も増えています。正規と、非正規労働者の比率は、八四年（四〇〇〇万人労働者85・15）、九九年（74・26派遣二八万人）、〇六年（五一〇〇万人 67・33で、非正規は一、一五九万人。圧倒的多数は女である。男も、五一七万人と増えています。）

労働者の三分の一が貧困ラインの年収二〇〇万円未満。（〇七年民間労働者で一、〇二三万人、三〇〇万円未満一、七四二万人）。さらに、独り暮らし高齢女性の過半数は年所得一五〇万円未満です。上位20%の高所得者と下位20%の格差は、八四年13%、九九年60・9%、〇二年168%、〇五年∞に近く、統計上現れないのです。

ジニ係数も、過去最悪の貧困格差（世界三位）。貧困率も先進國中、米国に次ぐ二位、と最悪です。九八年23・1%あった家計貯蓄率が〇五年3・1%に（全世帯の内22・9%が、貯金〇円）。生活保護世帯は、一〇七万世帯一四五万人であり、推定五〇〇万貧困世帯の20%しか認定されていないと言われています。

生活保護の申請さえ受け付けない、認定返上をせまる行政も、問題です。餓死する人が毎年六十数人です。経済苦の自殺も「餓死する前にせて人間らしく死のう」という、〈見えない形の餓死〉との見方もあり、自殺死は毎年三万人を超えています。

一方、大企業（資本金一〇億円以上）は、経常利益が、〇一年一五兆三千億円から〇六年には三二兆八千億円と倍増。内部留保も二一八兆円になっています。法人企業経常利益も、〇一年二八兆二億円だったのが、〇六事務年度では、全法人所得総額五七兆一億円と過去最高です。法人税率は以前は40%だったのが、〇六年現在、30%と、一六〇兆円も減税している不公平さです。

フリーライター赤木智弘さんは、「丸山真男をひっぱたきたい・31歳フリーター。希望は戦争」、「論座」〇七年一月号で、「反戦平和のスローガンこそが、我われを一生貧困の中に押しとどめる『持つ者』の傲慢だ」と問題提起をしています。さらに、「若者を見殺しにする国・私を戦争に向かわせるものは何か」（双風舎）では「①平和な社会をまもることが、今の社会の現状を維持することだとしたら、僕らにとってよいことは何もない。②貧困から餓死へ至らせる、戦争以上に圧倒的な「暴力」のなかにある社会が「平和な社会」日本か。③今ある平和な日常を守れと左翼は言うが、「貧困」は「自己責任」の結果とみなされる日本で、若者に平和な日常が訪れたことはあるのか。このままでは、耐えられない。④単純に戦争を望んでいるわけではないが、貧困に固定された人間が、何らかの平等を求めるとき出てくる発想の一つ。「餓死するくらいなら、〈名誉ある戦死〉をしたい。」と書いています。だから、格差を解消するには、戦争になってリセット（六〇年前は、誰しもが貧しく平等だった。不幸の平準化の戦争）させるしかないとの、「戦争待望論」を一部の若者は支持しているのです。また、中国・韓国・北朝鮮を敵視し、排他的になる右傾化する青年が増えているのです。

万国のプレカリアート（不安定なプロレタリアート）よ、団結（連帯）せよ

戦争待望論を支持するわけではないが、将来に希望がない若者の心情は、痛いほどわかります。憲法九条と共に、男女平等の二十四条、そして二十五条（健康で文化的な最低限度の生活）を、セツトで考えていかなければと考えています。

（尾花沢市 自治体労働者 五〇歳）

三十五年間の「かけがえのない友」として 栗山 満子

毎日新聞に「あごら」の紹介記事が小さく載っていたのを見つけて、とりあえず申し込んだような気がします。職場で、「男女差別をなくそう」と、大変でも展望をもって活動している時でした。

あれから三十五年になるのですね。保管しきれなくて、途中、かなり処分してしまいましたが、本棚には創刊号から3号、あとはとびとびに、特集はなるべくとっておきたいと思って、とってあります。初めの頃、政党色を感じる記事が気になったのですが、いろいろな方たちの意見が聞かれて、参考になりました。

その後、「政党とはかわらない」と言われたことが記憶にあります。

女性の視点で物事を見ていくことを貫いていらっしやることに敬意を持っております。時どき組まれる特集には、いつも、そのエネルギーを感じておりました。

職場にいた頃（もう二十年ほど前になりますが）は、もっと豊かな未来、「男女共に労働条件の良

い環境で働けるようになる」と、希望を持っていました。派遣社員の規定がどんどん拡大され、現状のひどさを見聞きするにつけ、何とも口惜しい思いです。

ここ四、五年、年金暮らしで、経済的にも苦しく、各団体の会費や誌代が大変になり、少しずつ整理してきました。「あごろ」もその対象で、何度か、「これで終わり」と思ったのですが、そのたびに魅力のある特集が出るものですから、つい続けてまいりました。

定期購読者を増やすことがなかなかできませんが、せめてまわりの人たちにと、内容を知らせたり、特集を広めたりしています。

これからも、何とか続けて、皆さまの思いを共有していければ、と思います。

(静岡市清水区)

「私と〈あごろ〉の出会い」——そして今 濱名 育代

一九九五年一月十七日、阪神淡路大震災で被災された方へ、すぐ行動された〈あごろ〉のメンバー。そして神戸新聞に、「募金を寄せて下さい。本の収益を募金とします」と掲載された205号「女たちは動いた」を読んだ時の感動！ 兵庫県に在住しながら募金しかできないはがゆい自分。親友の子どもさんが亡くなったことに、涙が出て止まらない日々でした。

私に何かできないかと、〈長田の子どもたちに南光町の自然を〉へ、ご協力をお願いを掲載して頂き、

〈南光ふれあい基金〉へ、九州などから募金して頂き、ありがたいの感謝でいっぱいでした。ボランティアに参加し、子どもたちとふれあい、「心に傷を負っている、その傷が、少しでもやわらげば」との思いでいっぱいでした。

震災から十三年たちましたが、友の傷は奥深く、一月十七日には、そつとそつと見守るだけです。「あごろ」の本を年間購読するようになり、近年の、女性の出来事や行動に、考えさせられることばかりです。最近では年金問題もそうですね。これから希望したい項目として「介護」も。

私の姑は、八年前、認知症になり、主人は単身赴任。子どもはいないので、姑と二人での生活。マニュアルどおりではない現実。義姉妹との介護でのトラブル、嫁の立場……。

その間に私の入院。姑は徘徊もあり、入所せざるを得なくなりました。「入所させる」ほうり出す「罪」と考える私。世間の目、いとおしいとまで思う母への気持ち。

そんな経験は、介護した者として、新聞、テレビなどで、いろいろ話されていますが、美化されているような気がします。

介護保険についても、知らない（内容を）人がいても、個人情報があるため、行政側も、情報を、個人、個人には、知らせていない。はがゆいばかりです。今後は、この問題についても、ぜひ掲載して頂ければと思っています。楽しみにしています。

（兵庫県佐用郡 兵庫県地球温暖化防止活動推進員）

あごら三十五年に想う——挫折感からの回復と旅立ち

山下 智恵子

ポルトガルから帰国すると、たくさんの郵便物が待っていた。その中に「あごら三十五年記念行事実行委員会」からのハガキがあった。

時差による睡眠障害と風邪と胃腸炎に苦しみつつも、何か書かねばと、ペンをとった。

「あごら」を知ったのは、三十代前半の子育て真っ最中の頃。仕事と育児・家事との両立に悩み、体をこわして退職した私は、挫折感と無力感におしひしがれていた。

そんな時、高校時代の同級生、高橋ますみさんが、「〈BOC〉」という女性の能力銀行で、こんな仕事があるけど……」といって電化製品のモニターの仕事をまわしてくれた。ささやかな収入だったが、自己評価が低下していた時期に、「女同志で支え合うことを目指しているグループ」を知ったことが、たとえようもなく嬉しく、ますみさんの友情も有り難く、励まされた。そして「あごら」本誌の読者となった。

やがて、ますみさんが「この地方でも私たちの手で〈あごら〉〈BOC〉を作ろうよ」と、呼びかけた。「そうだ、そうだ」と、私も〈東海BOC〉の呼びかけ第一回の会合から参加した。ここで、後に歴史学者となる浅野美和子さんと、はじめて出会う。

その後、四人の子育てをしながら、私の生活は、書くことの修業の場である文学の同人誌と、〈あごら東海〉〈東海BOC〉での活動が、生きる上での大きな支えとなつてゆく。

書き手として少しは認められた婦人公論新人賞の受賞。これも、〈あごら東海〉の仲間祝福され、自信を得た。

同人誌に発表した作品を、「BOC出版部から単行本にしたら」とすすめて下さったのが、一九七五年の国際婦人年世界会議の開かれたメキシコで斎藤千代さんに共鳴し、帰国後〈あごら〉で活躍したフェミニストカウンセラーの河野貴代美さんだった。一九七八年に、私の処女作『砂色の小さな蛇』が、こうして本になった。

さらに一九八五年に、〈BOC〉事務局の後藤多見さんのお骨折りで、長年調査し書きためたものが『幻の塔——ハウスキーパー熊沢光子の場合』になつて刊行された。これは後に、鶴見俊輔氏（月刊『論座』二〇〇七年四月号）や立花隆氏（『僕の地となり肉となった五〇〇冊』文藝春秋社刊）により評価されるという嬉しさをもたらしてくれた。

私と〈あごら〉、そして〈BOC〉の活動の三十五年をふりかえると、まさに女の生き方、平和と暮らしを考える指針であつた。心からの感謝を捧げたい。

（名古屋・作家）

〈あごろ〉と関わり続けて

登石 知子

私が「あごろ」を購読し始めたのは、北京世界女性会議の一九九五年からであるが、その前から〈あごろ〉を知っていた。「あごろ」が創刊されたのは一九七二年とのことだが、そのころは、リブ系やフェミニズム系の雑誌が創刊された時代だったと思う。私は、それらの雑誌が創刊されるたびに購入した記憶があるが、「あごろ」創刊号の次に購読したのは「8号」特集、子殺しを考える」である。

その頃、私は家庭裁判所の調査官として、少年たちや家族や親族の紛争にかかわっていた。「8号特集」子殺しを考える」を手にしたのは、働き始めてから十数年経ったときである。嬰兒殺（現在は保護責任者遺棄・致死罪）の少女を担当したこともあったし、性被害にあった少女たちや家族の間で悩む女性たちに接する毎日であった。その特集号を、若かった私は、どんな思いで読んだのだろう。思い出せない。

何年か前に、「あごろ」バックナンバーを整理していたときに、改めて「あごろ」8号を読んでみた。斎藤さんのレポートがあった。当の女性に話を聴こうとして会いに行ったが会ってもらえなかった、という内容である。どんなに辛く苦しい思いがあったのかと彼女の心のうちに思いを馳せる斎藤さん自身の苦しさ、そして話を聴こうとすることについてどうなのかと自分に問うものであった。なんと率直なレポートなのだろう。それはなかなか心を開いてくれない少年や女性に出会ったときの私の気持ちと共通していたが、私はそのことを率直に人に伝えることは、たぶんできていなかっただろう。

北京女性会議後、「あごら」を定期購読するようになり、BOCの出版物も手に取るようになった。「自立の心理学」コミュニケーションと自立」が面白かった。一九八二年一〇月から、ほぼ一年間にわたって、毎月一回ずつ重ねてきた勉強会の記録で、参加者の対談方式になっている。「女性の自立」といえば精神的自立と経済的自立というパターン化した既成の自立論ではなく、「自立によって必然的に深まる相互支持、協力のあり方を含んだ……より多くの人びとと分かち合える自立・共存の関係」(P4)をめざし、草の根のフェミニストたちによってスタートした勉強会である。一方的な講義ではなく、参加者がお互いに「自分も話し、他の人の話を傾聴」しながら、「自立」を中心に、コミュニケーションについて話し合っていく。同じ時間・空間を共有しながら気持ちをわかち合い考えていくのだ。私にとっては「自立」は若い頃から自分に問い続けてきたことだった。最初に読んだとき共感した参加者の話を探してみたが、見つからない。違う読み方をしていたのかもしれないが。

その話は、「〈家族〉(主に夫)に自分のすることを理解してもらおうと思っても、なかなかうまくいかない。だから理解してもらおうと努力はせず、自分の信ずる道を進んでいく。時間が経つと自然にわかってもらえるようになっていく。」というような内容だったと思う。また別な人の発言で今も頷けるのは、「結婚という形態で生活している自分にとって、夫とは一体ではないこと、お互い自分がアイデンティティーを持てる世界で別々に生きていく関係でありたい」ということだ。「その別々の世界を認め合えてこそ一緒に生活できる」というものだ。

「あごら」は行動する女性の雑誌である。毎号読むたびに「すごい女性たち」と感嘆ばかりしていた私だったが、それまでの自分を取り巻く状況から自然の流れで、DVサポートグループの立ち上げメンバーとなっていた。そして七年経った。非力さを思い知ったりもし、しんどいことのほうが多か

った。でも根っこで揺るぎなく支えてくれているのは〈あごろ〉の「ゆるやかな連帯」というフェミニズムであり、まさにゆるやかな連帯で活動を共にしてきた仲間であり、その後出会ったフェミニスト・カウンセリングである。

(北海道 NGO相談員)

〈あごろ〉のおかげで……

田畑 みどり

女のひと同士が、励ましあって力を尽くし、信頼しあい支えあい、苦楽を共にしながら、この社会に『人権尊重』の楔をひとつひとつ打ち付けていく〈あごろ〉。

いくつ齢を重ねても意気地なしの私にとって、〈あごろ〉は、ぶれることのない私の原点です。日々の生活に流されることの多いあせりを、〈あごろ〉は、しっかり受け止めてくれます。大所高所に立つて道筋を示してくれます。ありがたいこと！

初めて国立公民館で斎藤さんのお話をうかがったときから、三二年たちました。

これからも〈あごろ〉の灯が、この国の女のひとたちのために輝いていくことを願っております。

(千葉市稲毛区)

師を得、友を得、志を得た

森崎 民子

三十三歳で〈あごら九州〉に出会った。

そこでは、花の五十代から、まだまだ蕾の二十代の会員が、賑やかな笑いとともに、胸がすくようなことばで、自由と平等を熱く語っていた。我が意を得たりで、例会は快い空間であり時間であったが、すでにその十年前から、私はBBS運動に係わっていて、あごらでは「会員」というより、「お客さん」的な存在を抜けきれなかった。還暦を過ぎた今も、あれこれ首を突っ込んで、半端な生き方をしている。そのため、「あごら会員歴三十年」は、偽りではないが、恥ずかしい限りである。

師と仰いだ先輩、小島サカエさんを亡くしたのは昨秋。欠けた穴の大きさは如何ともしがたいけれど、福田光子さんの献身的なご尽力で〈あごら九州〉の毎月の例会は、中止も延期もなく、定例で続いている。常連で集まる会員が健在なのが、何よりうれしい。

加えて、〈あごら九州〉のメンバーは、自慢できる友ばかり。全国の〈あごら〉に育てられたのだろう。「思想は行動を共に」して、新たな活動に向かい、大空で飛翔する。あの人もこの人も、私の心の財産である。「ありがとう」を言えるこの記念号の企画に感謝したい。

最後になったが、〈あごら〉を世に問い、「あごら」を編集し続けた、新宿の斎藤千代さんを語らずして、この稿は終えられない。斎藤さん、あなたの珠玉の美文に酔いしれ、幾たび教えられたことか。それゆえ私は、〈あごら〉を名乗るとき、虎の威を借りる気分で胸を張る。

斎藤千代さん、志高きあなたは、夕鶴のつう。「あごら」の号数、318は、まさに金字塔。御齡八十坂なれば、どうぞ無理が過ぎませぬようにと、福岡の地で案じ祈るばかりです。

〈あごら〉三十五周年、心からおめでとうございます。

謝謝

(福岡市 あごら九州)

〈あごらメイト〉に励まされ続けて

飯島 愛子

斎藤千代さま、あごら事務局の皆様さま

このたびは三十五周年記念を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

今まで何度も、〈あごら〉の存続が危ぶまれ、その度に新たな決意を持って危機を乗り越えてこられたことを思うと、事務局の皆様はじめ、〈あごら〉の仲間たちの感慨は一入か^{ひとしほ}と存じます。

長年、愛読させて頂いていますが、いつも、〈あごらメイト〉の熱い思いにあふれた機関誌に、心から共感を覚え、元気を頂いています。最近の右傾化が進む中で、〈あごら〉の活動や、その仲間がますますかけ替えの無いものとなっている現在、インターネットのネットワーキングの強化などを含め、この輪が何とか大きく育ち、財政難も何とか解消できないものかと願ってやみません。

機関紙は、いつも時宜になつたテーマや記事が取り上げられていて、地方の各拠点での「持ち回り編集」や、女性の紹介記事からも感銘を受けています。

なお、最近の315号の記事で、「毎年、最低一回は〈沖縄特集号〉を出す」との勇断を知って、心から嬉しく思いました。斉藤千代さんのお言葉通り、沖縄に平和と平等が訪れない限り、私たちは安眠できるものではありませんし、桑江テル子さんが、「『教科書検定意見撤回』を求める『9・29県民大会』から何を学ぶか」の記事の最後に、「政治の流れ、日の丸・君が代法制化をはじめ、教育基本法改正、憲法改正までの動き、米軍再編という名の軍事強化などと思うとき、歴史改ざんは、沖縄の問題だけでなく、全国の平和勢力が立ち向かうべきテーマだ」と、おっしゃっていることは、正にそのとおりだと考えます。

〈あこら〉を糧に、日々の忙しきで大切なものを失わないように心を引き締めて生きてゆきたいと、切に思う今日この頃です。今後も支え支えられつつ〈あこらメイト〉との絆を深めてゆければ本望です。どうぞ宜しくお願い致します。

最後になりましたが、年の初めにあたり、皆さまのご健勝を心からお祈りいたします。

二〇〇八年一月三十一日

（東京都江戸川区 財団法人ジョイセフ（家族計画国際協力財団）シニア・アドバイザー）

「普通の人」に出会ったよろこび

押見 操子

私は新しいほうの会員です。

三年前から会員になりました。

きっかけは、中越地震でした。

女性史を研究していらつしやる新潟市の倉元さんに、「書いてみない」と誘われたことです。
軽い気持ちで書きました。

それまで〈あごろ〉のことを知りませんでした。

会員になって、そのまじめさに、良心的編集に、びっくりしました。

「ああ、普通の人たちがここにいる。」

それが正直な感想です。

もう無いだろうと思っていた地震（中越沖地震）がまたあり、原稿を載せていただきました。

稀有のことだと思っています。

（新潟県柏崎市）

最近の「あごら」から印象に残ったこと 富永ルリ

最近の「あごら」で印象に残っている第一は、263号「この判決を許せますか——住友電工の裁判に怒る」と、293号「住友電工和解は すべての女性へのプレゼント」です。

「原告の請求を棄却する」——その理由を裁判長から聞きながら、原告の一人は、「自分が会社の人事部かあるいは労組の役員と交渉している時の雰囲気、その時の法廷があまりにも似ていた」と書いています。日本社会の男性の、女性に対する人権意識の貧しさを再認識させられて、読みながら怒りを覚えたものです。

そして293号は、大きな安堵と希望を与えてくれました。提訴から九年かけて和解金の支払と昇格の実施を勝ちとった記事を、感動して読みました。和解まで闘い続けた原告の方がたの勇気を忘れないようにしたいと思います。

派遣法の改定に伴い、パートや派遣を（特に女性の）働き方としてあたりまえのように受けとめてしまう二十代、三十代のひとたちの傾向に、危うさを感じます。教育の過程で労働法について学ぶ機会の少ないせいだとも言われます。「戦後確立した労働者の権利が、どのように闘い取られたか」——を伝えることの大切さを感じます。

「男女の差別がなく、家庭と仕事を両立させやすい企業が、二十一世紀の優良企業の大前提」——に近づく気配の見られない昨今の状況に、ただ、失望しているわけにはいけない、と思いました。

次に印象に残ったのは、253号と296号の「闇を照らす閃光」です。

長谷川テルさんについて今まで知りませんでした。あの時代にあらゆる誹謗・弾圧を受けながら、反戦を訴え続けたことに驚きました。人を信じ、国を愛して生きた彼女の信念の尊さと粘り強さを学びました。

最後に一つ。300号の表紙（片岡球子氏の「富士」）を見たときの感激は、忘れられません。

（北九州市門司区）

生きていく力

平野 俊子

今年の年賀状には、「入院から三年が経過しました。病氣と仲よく？しながら、私は仕事を続けています。皆さんから元氣をもらい、感謝の毎日です。身内には孫の七歳と五歳の男の子。私七二歳。周りが山ばかりのふるさとに帰って来て、少し自然の自分を取り戻しました」と、友だちに書きました。二〇〇四年九月、肺ガンの告知を受けて、心身共に不安定の初期の頃に、小俣光子先生から、「戦後六〇年、節目の年です。体験されたことをお書きになりませんか」とのお便りをいただきました。一九九五年、中国遼寧省で開かれた国際服飾学会に参加した折、「中国は私の故郷です。」と私が話したことを小俣先生はよく覚えていてくださり、「あごろ」303号の「私にとっての戦後60年」という

テーマに、「60年前の回顧」という文を投稿させていただきました。

父の仕事で家族全員が旧満州に行き、戦後引き揚げて来るまでの話を書いたのですが、私が九歳・十歳の頃の出来事ですので、出港した港がどこかも覚えていないのを調べてくださるなど、ずいぶんと助けていただきながらの投稿でした。引き揚げて来るとき、日本に生きて帰ることすら、できるかどうかかわからない状況のなかで、日本の地を踏むことができた体験を書いたものです。

昭和十九年、日本のおじいちゃんの所に帰って銀飯をおなかいっぱい食べたいと、口癖のように言っていた四歳の弟は、骨と皮に痩せこけ、おなかだけは、パンパンに膨れあがっていました。また零歳の妹は栄養失調で、顎がはずれ、二人ともまもなく天国に行っていました。

「60年前の回顧」を書かせて頂いてから、今まで話さなかった戦争について、娘や孫たちとも、話をするができるようになりました。「私にとって大事な弟妹を奪ったあの戦争は何だったのか?」多くの人たちの人生を狂わせ、六二年もの時が過ぎた今でも、まだまだ心身共に癒えることは、ないのです。

悲惨で残酷だった時代に比べ、今の時代は、なんと幸せな時代なのでしょう。それなのに、いろいろの命の犠牲が報じられています。たった一つの命だから、できるだけ生き抜くことが大切です。

私は六十五歳で大学を退職して、その後、学生寮の寮母として、月二回（一泊して三〇時間）を、七年間続けさせてもらっています。その仕事の合間に抗ガン剤を投与し、闘病に打ち勝っています。抗ガン剤の副作用で髪の毛は抜け、手足のしびれ、突然襲う下痢、体の脱力感、やる気、思考力の減退の毎日です。「死んだ方がまし」と、ついつい口に出してしまします。

そんなとき（あごろ）の斎藤さんに言われた「ガンになったから、ガンガン生きる」「ガンさん、

ありがとうございます」の言葉を思い出し、その言葉に勇気をいただき、感謝の気持ちを一層強くしています。

「あごろ」の本を通して、ご縁のなかった方がたと、お手紙のやりとりや、お話をする機会も、たびたびありました。このような体験を次の世代の人たちに引き継いで行くことが、私たち体験者の、しっかりやらなければならない使命だと考えます。

〈あごろ〉が三五年を迎えられます由、こういう機会に「生」について書かせていただいたことに、自分自身の生きて行く力を改めて考え直しています。生きていることに、日々感謝し、応援を送ってくださる皆さまに感謝して、病気に打ち勝って前向きに日々を過ごしていきたいと思っています。

ありがとうございます。

〈あごろ〉三十五年を祝すとともに、今後ますます発展されますことを願ってやみません。

(福岡県田川郡 元・東筑紫短期大学教員)

「あごろ」に導かれて読んだカストロに関する二冊の本

桑田 喜美子

「あごろ」は創刊三十五年とのこと、尊敬の念を覚えます。安保騒動が立ち消え、全共闘時代の熱気も冷めた頃から、女性たちに、ずっと「物言い」の広場を提供し続けていらしたのですね。

三十〜四十年前、二十代・三十代を過ごした者にとつて、革命、進歩は、まだ魅力的な言葉でした。周恩来、ホーチミン、カストロは、理想の政治家だったのです。しかし、実際には彼らに関する読書すらしない日々を過ごしていました。

それからおよそ四十年、子育て・親たちの介護・仕事等を全て終え、漸く自由時間に恵まれるようになった時、「カストロのキューバに行こう」ということになりました。そしてそのころ偶然目にしたのが、滝島典子さんが贈ってくださった「あごろ」304号の書評でした。田中三郎著『フィデル・カストロ——世界の無限の悲惨を背負う人——』（同時代社、二〇〇五年）が魅力的に紹介されていたので、さっそく購入、夢中で読みました。

著者は、一九九六年から四年間、大使としてキューバに滞在した人です。日本国大使が、六〇年以上も反米を貫いてきたカストロ政権下のキューバをどのように見たかに興味を持ったのですが、驚いたことにカストロ絶賛に満ちていたのです。全く知らなかったカストロの尊敬する先人であるホセ・マルティの高い理想と詩についてや、キューバ国民の悲惨に対するカストロの戦いなど、深く教えられました。

しかし、この八〇〇ページ以上に及ぶ大著は、一言でいうと顕彰本のようなものです。これだけでは十分ではないと感じました。もう一冊くらい読まなくては、と思い、図書館で見つけたのがレイセスター・コルトマン著『カストロ』（岡部広治監訳、大月書店、二〇〇五年）という、同じくらいのポリュムの本です。著書はちょうど田中さんとはほぼ同時期、英国大使としてキューバに赴任していた人です。これも、さっそく借りて読みました。田中さんの本とは全く異なった冷静な筆致です。カストロの足跡と外交・内政を極力客観的であろうとする視点から書かれています。したがって、個人的な風評や、

さまざまな政策の失敗も、克明に描かれています。

*

この二冊の本の内容を心に抱いて、キューバを訪れたのは、二〇〇六年の初冬でした。どうしてもカストロ議長存命中にキューバを訪れたかった私たち——「ヘミングウェイ大好き」の友人と「憧れの人はチェ・ゲバラ」の私という婆さん二人——は、五日間ハバナの街を自分たちの足で歩き回ったのです。ほんの一部を垣間見ただけだったのですが、明るく素敵な街でした。人びとは陽気ですが、したたかです。治安の良い街は、どこも美しく、楽しい音楽にあふれています。ただ、見たこともないような古い連結バスに、貧しげな人びとが鈴なりですし、「通貨の二重性に庶民は苦しんでいる」ということも耳にしました。

しかし小規模な学校が街中あちこちにあり、無料で教育を受けているそうです。子どもたちは目を輝かせていて活発です。そして付き添う先生方の誇らしげな自信に満ちた微笑が、印象的でした。

また、立派な新しいパステルカラーのビルだと見ると、たいいてい病院です。マイケル・ムーア監督の映画『シッコ病気の俗語』（二〇〇七年公開）にも、キューバの充実した医療制度が出てきました。国民の医療費は、ほとんど無料だそうです。田中さんの著作に出てくるように、キューバから医者を全世界で必要とされるところに派遣するだけでなく、アメリカを含む外国から、貧しい医学生を受け入れて教育して、本国に帰しているそうです（『朝日新聞』2007・7・26）。

つい先週、アメリカの大統領は、テレビで「キューバの独裁政権も終わりに近い」と言っていました。が、アメリカとの関係で、いかにキューバが長年苦しめられてきたことか。

カストロ政権打倒を狙うアメリカの大規模軍事侵略に対しては文字どおり自衛のための武力行使により、辛うじて勝利したこと、その後の経済制裁による国民生活の極度の疲弊は、ソ連の崩壊に伴う困窮、産業政策の度重なる失敗とともに、二冊の本に詳しく書かれています。

短いハバナ滞在の後、アメリカ上空を飛び越え、カナダ経由で帰国しました。

飛行時間が長いので、小さな本を一冊読むことができました。

マックス・ウェーバーの古典『職業としての政治』（脇圭平訳、岩波文庫、二〇〇五年）です。

権力という危ない力を行使する政治家には特別な倫理観が要求されるが、その資格と覚悟について、一九一九年に、ウェーバーがミュンヘンの学生団体を対象に行なった公開講演の記録です。

その中に出てくる「国家指導者は合理的思想の実現者であり、党派の闘争者であり、権力を追及する。そして彼の名誉は、全責任を一身に負うことである。ある一人の人間のために心から献身的に働くという満足感を与えるカリスマ的要素を要する。徹頭徹尾冷静で、社会的名誉を求めない。燃える情熱と冷静な判断力をしっかり魂の中で結びつける。万事について、少なくとも志の上では聖人のように生きなくてはならない。現実の世の中がいかに愚かしく卑俗であっても、断じて挫けない、どんな事態に直面しようとも、それにもかかわらず！と言いきる自信のある人間だけが政治への天職を持つ。」というような政治家の理念型は、二冊の本とハバナの街から学んだカストロの姿を髣髴させたのです！カストロに対する尊敬の念が深く心に残ったばかりでなく、「一市民が政治家を考える、政治に参加することを考えるきっかけ」ともなりました。さすが、「あごら」のおかげと感謝しております。

二〇〇八年二月六日

（東京都世田谷区）

〈あごら〉と出会う

中村 道子

それは不思議な会合でした。前夜に、女学校同期の作家、中村智子さんからの電話で、時間と場所が告げられ、私は何とか都合をつけて出席したのでした。ほとんど名も顔も知らない同年輩の七、八人。戦争末期、学徒勤労動員を経験した人たちの集まりでした。

この会を経て後、私の生き方が今の形に決定してしまったのです。この日〈あごら〉を知り、斎藤千代さんと、はじめてお会いしました。

話し合いの結果、女子学徒勤労動員の実態を記録集にまとめることが決まりました。

その会の名称について、様々な意見の出たあと、「そんな意味不明な、あいまいな名称はだめ」静かに毅然と斎藤さんが命名されたその会の名は、〈戦時下勤労動員少女の会〉。日本全土にわたる調査を経て、三年後の一九九六年、その本はBOC出版によって上梓されました。

意味不明、あいまいな表現を排された、会の命名の姿勢は〈あごら〉そのものだったということを、その後「あごら」を読むたびに感じています。

日常が忙しい私にとって、わずかですが、〈あごらメイト〉との楽しい思い出があります。

沖縄での世界女性サミットに、〈あごら〉の仲間たちと参加した折の、喜びと充実感を忘れることができません。あの時は、松井やよりさんも、澤田和子さんもお元気でしたし、斎藤千代さんも私も、

どんなことにでも立ち向かえる元氣と勇氣を持っていました。同行の方たちは皆、心から〈あごろ〉を愛し、〈あごろ〉に鍛えられた言動の持ち主たちでした。あのような会合がしばしばあつて、日本じゅう各地の〈あごろメイト〉と、親しく意見をたたかわせたい、と思うことしきりでした。

あごろ二十五周年。様ざまの分野で日本女性を代表する方がたとお会いし、お話を伺うことができた、激しくも充実した会。三十周年、静かな情熱の漂う美しい会でした。そして、去年、三十五年を迎えた今、〈あごろ〉も、斎藤さんも、私も、ずいぶん年をとりました。以前は、泉の湧くように、思いを言葉にし、文字にできていたのに、数年前から私の泉は涸れはじめました。

仕事は人の一生に似ていて、「勇氣はあるけど体力がなく、残っている元氣には経済力が伴わない」そんな状態に陥りつつある〈あごろ〉のためにできることを、みんなで考える時が来ているように思います。

ある日、300号の表紙を飾ってくださった片岡球子さんに御礼をお届けするため、斎藤さん、事務局の小俣さん、私とで、藤沢のお宅をお訪ねしました。お目にかかることは、できなかったのですが……。

晩年に至ってもなお、いささかの衰えも見せず、みずみずしい作品を描かれた片岡球子さん（残念にも、一月に亡くされました）のお元氣を見習い、もうしばらく努力したいと思っています。

（東京都世田谷区 服飾デザイナー）

〈あごら〉と出会う

滝島 典子

アクロポリスの丘を歩く

一九八九（平成元）年四月二〇日、私はギリシャアクロポリスの丘を歩いていた。

足もとには可愛いポピーの赤い花が咲き、パルティノン神殿の柱の間から、まださめやらぬアテネの街が一望され、学問の神として梟を祀っているアクロポリス博物館が近くにあった。

ソクラテスが幽閉された石牢にはオリーブが繁り、古代オリンピック場や、アゴラ広場を歩き、後日、怪獣のような名前の〈AGORA〉と出会ったのでした。

「人と人が出会う広場」

古代ギリシャの情報と物資の交換の場、AGORAから、大衆によるデモクラシーが生まれましたが、女性と奴隷は参加できませんでした。

斎藤千代さんの呼びかけで、私たちは、出生、人種、障害などなどの差別と女性差別を排して、広い立場で討論できる、人権運動にかかわる〈あごら〉の会員になったのでした。

一九九一（平成三）年一〇月一五日、〈戦時下勤労動員少女の会〉（名付親、斎藤千代）発会。

太平洋戦争中、学業を捨て、軍需工場で働かされた当時の記録を、時代の証しとして残した私たち。

また、これから残そうとしている仲間呼びかけ、開戦五〇周年に、この体験を今後に生かすための集まりを、新宿区婦人センター（現、女性情報センター ウイズ新宿）で持ちました。

婦人情報センターの教室では、斎藤千代さんが湾岸戦争のスライドのビデオを放映していました。
①私が見たイラク ②イラクで見たこと考えたこと——後日、千代さんは、この見聞を、『見えない戦争』として出版されたのです。

一九九六年十二月八日、新宿区婦人センターに於いて、第一回〈戦時下勤労働員少女の会〉開催。
全国から約二百名が集まり、盛会。

アンケートもかねて日本全国に呼びかけた「少女たちの勤労働員の記録」は、一九九六年三月七日、東京女性財団の助成を得て、多くの方の協力により出版されました。代表・坂口郁、中村道子、滝島典子、堀内政子の四名が運営に当たりました。

これは、第二回平和ジャーナリスト基金奨励賞を受け、一九九七年六月、アメリカペンシルバニア大学、ワシントン大学の図書館よりの注文も受け、納めてあります。

あごら三〇周年へのメッセージ（三〇周年記念集会の会場での発言）

処暑すぎて〈あごら〉寿ぐ三〇年

我ら戦中派にとって忘れじの八月。

暦の上の処暑は二三日でした。

朝夕は涼風が立ち、蟬の声も平和な社の杜（府中大国魂神社）に聞かれる今日八月二五日に記念の集いを設定された斎藤千代さん、そして、「あごら」編集部の皆さまのお心配りを感謝しつつ、〈あごら〉との出合いを語り、メッセージとさせていただきます。

（中略）

不戦の灯を絶やすことなく四二年、277号（特別号）を加えて300号の「あごら」に結晶された実績を讃えます。

〈あごら〉 万歳!!

このマイクは、国会から駆けつけられた福島みずほさんにバトンタッチされ、名司会の芦谷美鈴さん、パネリストの増田れい子さん、福田光子さん、高橋ますみさん、小川美沙子さん、澤田和子さんやニューヨークから見えた竹ノ内まりさんなど、終始熱い思いを秘めて、和やかに、中村道子さんの花束贈呈をもって盛会裡に締めくくられました。

〈あごら〉三十五周年に向けて

私は、「あごら」全巻を特製の白塗りの書棚に収め、ギリシャの写真、エーゲ海の小石、貝殻類を並べて、毎日、朝夕の挨拶をかわしています。

ただ今、この原稿を書き終わり、314号「ありがとう 澤田和子さん」を前に、黙祷を捧げています。

長い交誼を持たれた先輩の方がたの弔文を拝読、感無量です。

二〇〇五年九月四～五日、奈良での〈全国女性史交流会〉に於いて「長谷川テル」を熱い思いで語られたお元氣な澤田和子さん。懇親会場でのにやかな和子さんの記念写真を封筒に収めて、ご家族と東京の千代さんにお送りするところです。 合掌

(二〇〇八年一月二八日記)

(東京都・府中市)

瀕死の〈あごろ〉を、なぜ続ける

斎藤 千代

一九七二年二月十七日。刷り上がった「あごろ」創刊号一二〇〇部を、軽トラックにのせて、新宿郵便局・本局に向かった。

運転手席に斜めに射し込む夕陽を眺めながら、「この雑誌が必要でなくなる日を目指す」と、自分に言い聞かせたことを、三十六年後の今年、二月十七日の夕陽に、思い出した。

思えば三十六年も経つのに、「あごろ」は、今も続いている。ほんとうに今も必要なのだろうか。

目的とした「女性差別の解消」は、当時、予想もしなかったスピードで、次つぎに進み、職場だけでなく、家庭の中での差別まで、あらかた解消した。当時の状況を思えば、奇跡としか思えない。

「三十六年前の決意」に立ち返って考えると、「あごら」はもう、ほとんど無用になった、と言つても過言ではないだろう。

いま、〈あごら〉は、経済的大ピンチで、毎月の発行費どころか、オフィスの維持さえ困難になった。「やめどき」ということです——という、厳しい声も、自分の内側から聞こえてくる。

しかし、そう言われると、なぜか、いとしい。多分、自分自身の老いと重ねて、「役立たずになつたから死ぬ」は、ね……」と、心のどこかで思つてしまうのだろう。オンボロ家屋でも一応雨露をしのいでいれば、「解体を急がなくても」と思う気持ちに似ているのかもしれない。そんな思ひは、心のどこかに残つている美意識に照らすと、「気恥ずかしい」というほかないのだが……。

春夏秋冬、全国各地から、さまざまな珍味が送られてくる。

「続刊ご苦労さま」の添え書きに、「〈あごら〉の人つて、どうしてこんなにやさしいの」と、不覚にも涙する日々。

「ぬるま湯」と言われるかもしれないが、北海道から沖縄まで、三十五年かけて築かれた人と人とのつながりが、〈あごら〉を、そして私自身を、生かし続けてくださっているのだろう。

*

畏友、福田光子さんによると、〈明治の女学雑誌〉〈大正の青踏〉、〈昭和のあごら〉ということになる。これは、もちろん身びいきだが、継続の長さで言えば、そのようにも言えるのかもしれない。

「あごら」の翌年誕生した「女エロス」は、その名称も内容も、まさに世界のリブの流れにマッチした豊かな雑誌だったが、桜のように人びとを酔わせて、いさぎよく散った。

散るべきときに散らないと、老残の恥をさらすことになる。——という個人的な美意識に立てば、

心は「散りどき」に収斂^{れん}するが、すこし引いて考えると、女性差別の、より深い根源である、偏見、暴力、そして「戦争への道」は、依然として根強く、根深く、社会の底にある。

大義名分を一ミリも持たない、「米国によるイラク侵襲」も、世界は制止できなかった。そして、いま日本は、インド洋上で米軍の軍艦に〈給油〉するだけでなく、日本列島を米軍の基地にし続けて、「正当性のない戦争」の支援を続けている。とりわけ基地が集中している沖縄と横須賀では、米軍兵士の非行が絶えない。

「先の大戦の反省」が、「今日の不戦の実行」に、ほとんど活かされていない状況を傍観できない少数派の「ゴマメの菌ざしり」は、もしかして、いま、最も必要な行動の一つではないだろうか。

*

「あごろ」を出し始めた翌年も、翌々年も、〈あごろ〉を警官が訪れることは、稀ではなかった。土曜の午後、一人で校正をしていると、音もなくドアが開き、一人の警官が入って来た。

「何の御用で……」と、問いたい気持ちは山々だったが、私は一礼して、隣の席に、警官を招じ入れた。緑茶をいれてすすめ、無言のまま校正を続け、校正紙を、次から次へと警官に回した。

退屈な校正紙に、へきえきしたのだろう。三、四時間で、警官は立ち去った。

何を根拠にそう定義されたのか不明だったが、「〈あごろ〉は新左翼の先兵」という流言が流布していたようである。光栄なことだが、現実を受けた負荷は、軽いものではなかった。

そのなかで自分を支えたのは、「〈差別撤廃〉を主張するだけで、その深い原因となっている「この日本」に異議申し立てをしないかぎり、問題の根は絶えない。それでは、あの戦争でむなしく落命した、アジアと日本の人びとが哀しすぎる」という、必死の思いだった。〈あごろ〉は、それゆえに、〈女

性差別」だけでなく、「戦争への道となる、あらゆる差別」に抵抗しつづけた。

振り返ってみると、その一方、「あごろ」は「リブではない」という非難も多かった。

一九六〇年代の後半から、「リブ」——女性解放運動の先兵としての女性たちの活動には目を見張るものが多かった。私自身が、いわゆる「運動」を始めたのも、六〇年安保が契機だった。それでも、「想い」を表現する方法は、百人百様であつていい、と、私は思っていた。これも多分、「個」を完全に抹消された「戦時下の生活」のなかで、未成年だった心の奥に築かれたものだったろう。

それだけに、どんなに考えても納得できないことは、徹底的に追求した。

湾岸戦争の現実を確認したい一心で、現地、イラクを訪れた私のルポを、「女エロス」の舟本恵美さんが、「これこそリブ」と激賞してくださったときは、しんそ嬉しかった。私は、「一人で旅したのではない。あの戦争に疑問を持つ人びとと共に」の思いで、思わずからだが動き、走り回っただけだったが、「思い」を「行動」に結実させたエネルギーは、「リブ」だったのだらう。

そのルポを掲載した「あごろ」163号の印刷が不鮮明だったとき、広島の方がたが、和文タイプで打ち直して配ってくださった。「そんな読者が、この世にいる」という感動があつたから、どんな財政難の中でも、私は「あごろ」をやめようとは思えなかったのだと思う。

*

そしていま、「あごろ」は、未曾有の財政的危機の中にある。

「あごろ」発行費を支えていた（BOC）の主な収入源になっていた仕事で、発注元のリストラで、ほとんどゼロになって以来、自分の私物の売れるかぎりのものは売り尽くして支えてきたが、底をつ

いた。貯金もゼロになった。希望的な観測は、なにひとつないなかで、それでも私は「あこら」を投げ出せずにいる。

「日本は、こんなにも悪い国だったのか」と、あつけにとられるような悪質な事件の続出。利権に傾き続ける日本の政治を目のあたりにする毎日のなかで、「小さな灯だからこそ消せない。消したくない。」と思うのは、間違っているのだろうか。

「間違っている」と、心の底から大きな声が聞こえて来ないのは、たぶん、「あの戦争」に、徹底的に反対しながら、その戦争の中で、完膚無きほど傷ついた、両親はじめたくさんの、アジアの、日本人びとの「取り返しのつかない悲嘆」が、今も心の底から消えないからだろう。

(東京都新宿区 あこら事務局)

「へあぐら」三十五年に想う」Ⅱの原稿をどうぞ

この号をお読みになって、「私も書きたい」と思われた方も、いらっしや
ると思います。長さも、文体も、ご自由。

六月十日までお待ちします。

「あぐら」編集部へ、どうぞ。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-6 あぐら編集部

FAX 03-3354-9014 メール XLV 05467@nifty.com

国際的連帯で、「軍隊の駐留」を問い続ける 桑江 テル子

「あこら」愛読者の皆さまは、「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」を、覚えておられるでしょうか。

このネットワークは、一九九五年九月、三米兵による少女強かん事件をきっかけに結成された沖縄の（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会）（共同代表は高里鈴代、糸数慶子。会員は、約百人）が母体。

九七年二月に（アメリカ・ピース・キャラバン）を組んで米国四州を訪れたとき、サンフランシスコの女性たちから、「米軍が駐留するフィリピンや韓国の女性たちも含めて、基地と女性問題を話し合いたい」と提

起され、まず沖縄で、第一回目（九七年）の国際会議が開催されました。

初回は、韓国・フィリピン・沖縄・日本本土・アメリカから参加。テーマは、「軍隊・人権・女性とこども」でした。

以後、九八年（ワシントン）、九年（オランダ）、二〇〇〇年（沖縄）、二〇〇二年（韓国）、二〇〇四年（フィリピン）、そして今回二〇〇七年（米国・サンフランシスコ）で開催されてきました。

＊

二〇〇七年は、九月十一日はさんで、四か国（韓国・フィリピン・

プエルトリコ・アメリカ・沖縄ほか）、八地域で、それぞれ八〇人が「軍事主義に抗して、いのちの文化を創造する」をテーマに、四つの分科会を持ちました。

第一分科会は、「人身売買・軍隊の女性に対する暴力」です。その中では、米兵家庭のDVの問題、性犯罪をとりまく社会状況、人身売買、基地周辺の性産業、移民先で受ける暴力など、共通の基地被害が報告され、〈問題解決へ共に進む抵抗運動〉が確認されました。

第二分科会は「女性の健康・基地からの有毒物・環境浄化」。

沖縄から



9.29 沖縄県民集会「教科書検定撤回にむけて」で、ウーマンピースリボンを持って

第三分科会は「軍拡と軍の再構成に抗して」。

第四分科会は「日常の軍事化に対する経済的・社会的・文化的抵抗と回復」です。

沖縄から参加した高里鈴代さんなど十二名が、このほど報告集をまとめ、発刊しました。

(お問い合わせは、098-864-1539)

2007年 参加した女(うない)たち

砂川おり
法の観点から沖縄を変えたいと渡米。環境の専門家

高良沙哉
元気ものでしっかりものと思いきや涙もろい一面発見!

長谷三知子
シアトルから私たちのために通訳者として駆けつけ、支えてくれました

宮野座綾乃
速いアメリカの地で一人ががんばる沖縄の星々時々の辛口発言もまた最高 (^.^) b

真栄城和代
さすが宮野湾市役所広報担当。カメラを握らせたらプロカメラウーマン

秋林こずえ
通訳者としてだけでなく、精神面でも助けていただきました

堀川弘美
大分からの参加。よく食べる姿は感動もの。別名：ひろみJr

玉城直美
いつのまにかサブリーダーと呼ばれてました。メンバー一同お世話になりました

福村陽子
サンフランシスコでの受け入れを縁の下から支えてくれた沖縄女性

宮城奈津子
最も若き参加者。とってもしつかりもの

高里鈴代
優しく強い。穏やかでたくましい。ほんとに素敵なリーダーです。

本永貴子
言葉の壁も何のその! 誰とでもすぐ分かり合える不思議な力の持ち主

源啓美
いつでもどこでも録音機材を片手に取材していた記録の達人

いま、そこにある支援金、義捐金

押見 操子

今日の会議は、三月二三日に迫ったイベントの打ち合わせである。しかし、皆さん忙しいのか、柏崎市役所の方三名、ほか七名だ。かく言う私も、七時からの打ち合わせに、はるかに遅刻。立派なこととは言えない。

場所は柏崎市民プラザのスタジオ102。といってもダンスをしているわけではない。机を出して打ち合わせをしているのだが、なんとなくしっくりいかない。

基調講演者が何時に来る、どこで食事、何人で打ち合わせ、その後、交流会。その辺の声かけは終わっている。

その後、Y代表が、とてもぶつち

やけた話を始めた。「実は今、自分たちは中越沖地震の新潟県復興基金からの助成をうけ、〈復興支援ネットワーク〉として活動しようとしているが、それぞれが、みな思いを共有しなければならず、金銭的な支出をしなければならぬ場面に至って、コンセンサスが得られていない。事業家として、立ち上げは無理だと思ふ。」というのである。なにを今さら、という部分もあるが「確かにそれはそうだ」という声も、心の中では聞こえた。

そして本当にたくさんの方がたに助けていただいた。ありがたい。そんなにたくさん、他人の痛みに、同調してくださる方がたが、いらつしやる。日本も捨てたものではない。「あごら」の読者の皆さんも、中越地震、中越沖地震に、支援金、義捐金を下さった方もいらつしやるのではなからうか。感謝申し上げる。今日は、その支援金、義捐金について報告してみたいと思う。

*

話は、地震の前に戻る。ちょうど、一年前、かしわざき男女共同参画推進市民会議運営委員会の後、Hさんに、「いろんな人がいるから、来て

「ごらんよ」と、声をかけられた。毎月第一火曜日に集まって話をするのだという。その名は「みるみるつながる市民ネットワーク」。

「先月のイベントでは、お宅の学長がバネラーを勤めたし、まんざら無関係ではられないんじゃないの」と言われたような気がした。

「みるみるつながる市民ネットワーク」——このネーミングが、私の心を捉えた。

男女共同参画社会を目指して「ネットワーク」することは、ある意味で必須の事項なのだが、ずっと出来ないでいる。図書館協議会でも、何か中途半端で、志に、ブレイキが、かかる。気の迷いもあり、四月の第一火曜日に会に出た。一〇人ほどの集まりで、まちづくりの話をしていた。メンバーは、おもちゃドクターの

方、「ちよこつとクラブ」の方、「トライネット」(障害児を持つ親の集まりの一つ)の方など、男女半々で、上下関係もない気楽な会合だった。

事務局は社会福祉協議会のMさん。図書館協議会で顔見知りであった。市民支援課の人がいたので、柏崎市はNPOを育て、「協働」がしたいのかと思った。

*

私はネットワークにこだわりがあった。ネットワークがうまく働けば、「柏崎はイベントが多すぎて、支えるほうはつらいし、効果が今ひとつだ」という有様も、「何とかできるのではないか」と思っていたのだ。

「柏崎はイベントが多い」という意見に賛成だ。「柏崎は」と言ったが、地方都市は、結構そんなところがあると思う。市民の活力というわけな

のだろうが、あれこれ各種団体があり、さまざまに活動している。

自己発生的なもののばかりではなく、「地域に必要だ」として行政の肝いりでつくっているものもある。それはそれでかまわない。

それぞれに仲間たちがいて、幸せに暮らすことに何の異存もない。しかし、活動の成果を示すためにイベントをするときには、ちよつとした工夫をしても、よいのではないか。

「同種のイベントにかけるお金を合計したり、会場を融通したりして、よいものが、できるのではないか。それぞれの団体にとっても都合がよいのではないか」と考えていたのだ。

その後、日を改めて宴会があった。ためしに出たのに、ご案内が来てしまつて、「あれ、メンバーになったのか」と思った。それとも、こうい

う案なつながりが「みるみるつながる」なのだろうかと思っていると、中越沖地震が起こったのだ。

*

地震の後はそれぞれではなく、定例の会には出られなかった。しかし、九月か十月の例会には出てみた。(えんま通り復興の商店街振興会)のメンバーが来られて、毎月一六日にする復興イベントの話をしていた。えんま通り商店街は、被害がひどい。なくなられた方もあった。えんま通りに賑わいを取り戻したい。えんま市(いち)の賑わいを取り戻したいというのが趣旨だった。

納得したようにも感じた。話を持ち込んだ人の立場では、市民の意向を聞くヒヤリングをしている意味もあるな、と感心した。

十二月の例会前に、M事務局長から、「県の復興基金からの補助金を取り、市民の復興支援事業を行いたい」という手紙が来て、びつくりした。「補助金事業の引き受け手となるなんて、冗談ではない」と、私は反対のFAXを送った。

ネットワークはネットワークとして、ある意味、ふわふわと自由に存在するのである。自分の属している団体のオーナーでもあるまいし、所属団体の全権を委任されているわけでもないのに、所属団体を拘束するような決定を、するわけにはいかない。

しかし、原則的に事業は承認され、

〈えんま通り商店街〉の一角で、〈中越復興市民会議〉の人や新潟大学の人などを交えた宴会があつたりして、話は進んでいった。

*

二月になると、いよいよ案がまともり始めた。M事務局長の作った協議資料によって、どうしてこうなっただかを見ていこう。

そもそも〈みるみるつながる市民ネットワーク〉は、平成一五年に、柏崎市が「柏崎NPOの育成と協働の推進に関する指針」をきっかけに、一市民の立場から連携と協働をすることでもちづくりをする目的で平成一七年にできた。(その頃、私は、NPOって、なんだか行政にいいように利用されるようで胡散臭いなど思っていた。)

二年後の三月に、えんま通り商店

トーマス・リート街の方と縁ができたことから、地震のあと、イベントの手伝いを買って出た。例会でも、「市民の目線で見ると、行政の支援が頑張っているけど、ちょっとね」といった意見が出ていた。

地震の日から時間が過ぎ、温度差が感じられ始めると、「自助だけの復興再建」では、現実の問題として、あまりにも課題が多い。

では、座して公助を待つのか。

被災の市民が最も必要な生活支援に、自分たちが関わろう。「被災者個人ではできないこと。行政や社会福祉協議会ではできないこと」があり、その中間組織が必要だ。そのためには、「中越地震復興支援」で中心的に取り組んできた中越復興市民会議の経験と情報を見本にし、指導助言を受け、県の復興基金補助事業

をとり、中越沖地震生活再建支援対策事業、復興支援ネットワークを立ち上げようというのである。

〈みるみるつながる市民ネットワーク〉自身と、事業事務局は、分離することになった。しかし、主管として、運営委員にあがるメンバーが多い。構成組織は産・官・学に声をかけてみる。事業は三年を目標にする。

*

復興基金事務局に提出する書類の様式が配られた。大学という仕事から、補助金の業務は、したことがある。しかし、一般市民として、補助金を申請する話は、「行政マンじゃないまいし」と、なんだか、任でない気がした。

しかし、それは正しくない。「他人の痛みを自らのものとする方がた」

の、たくさんの善意が集まった、〈支援金義捐金〉なのである。あだやおるそかに使ってはならない。そのために被災市民が本当に必要な支援事業に使いたいのだと申請するもの、なるべくたくさんの方が考え、見守らなければならない。そう考えて、皆さんの支援金、義捐金を使わせていただきます。そう考えることにした。その考えを忘れてはいけないし、常にそのことを発信し続けるべきなのである。

私自身は地震をきっかけに、「もしかして、柏崎市の大きなネットワークができるかもしれない」と思うようになってきた。理想論だが、もしかしたら「暮らしやすい柏崎」を、いろいろ目指す団体が、お互いに影響しあいながら、上手なハーモニーが奏でられるのではないか。きびし

共同作業をしつつ。

*

そして、今日三月一四日、「四月一日から仮でも発足したい」と思っているM事務局長と、「趣旨書を配りつつ資金を集め、資金のめどが付いてからの出発を考えた」Y代表が、ぶつかった。原因は、ある程度わかつている。

ネットワーク事務所の整備と運営費は半額補助、復興支援活動費は全額補助である。

補助限度額は年、五〇〇万円。たとえば、えんま通りに事務所を構えて、専従の人を雇う。電話、ガス、水道、電気は必要だ。月五〇万円かかる。それだけで年に六〇〇万円。

半額補助で、三〇〇万円を、メンバーが賄うでしょう。メンバーが何人居るのか、はつきりは、わからない。

いが、三〇人なら年会費一〇万円である。うちらなんか玄関の戸がベニヤ板だというのに。復興支援活動費は二〇〇万円。それでなにができるのだろうか。

重点事業は、たくさん考えられている。全額補助だが、限度額は、一〇〇万円。後払いの場合、最初にかかる費用を支えなければならない。

貧者の一灯的な団体である。腹をくくってかからなければならぬ。メンバーに、「時間もお金もかかる」ことをしつかり納得させなければ、始められない。「誰かが何とかしてくれるかもしれない」では、成り立たないのである。

早く始めて実施の過程で支援を集めたほうがよいのか、資金をさきに集めたほうがよいのか、まず議論の取っ掛かりはこのあたりであろうか。

*

しんどいけれども、おもしろい。今はこの局面だ。

*

私はひそかに心配していることがある。本当にものすごくうまく行きすぎて、どんどん進んで言ってしまうたら……。

震災復興は、ある意味で「錦の御旗」である。連携が思わぬ方向に進んでいつてしまったら。ばらばらのほうが、「市民の活力がある状態」なのかもしれない。一つが駄目でも、他は無傷である。

反対に、まるつきり駄目かもしれない。無気力がはびこってしまうかもしれない。経済情勢が不透明なのだ。市の財政も苦しくなるだろうし。心配の種は尽きないのである。

(二〇〇八年三月二〇日)

窓

「志」ある医療をキューバに見た！ 星野 弥生

二〇〇六年十一月に、キューバ友好円卓会議でキューバから若い女性医師をよび、「キューバの医療システムと国際人道支援」について話してもらう機会を持ったことは、今から思うと、実に先見の明だったといえるだろう（「あ

ごら」309号参照）。その後、マイケルムーア監督の「シッコ」が上映され、「先進国」でのブラックユーモアのごとき、人間を無視した「遅れた医療」の対極としてのキューバの医療が広く注目されはじめた。教育と同じく無料の医療。アメリカからの患者にもタダ同然で施される心の通った医療……。おまけに、この「貧しい」国が、災害や貧困で苦しむ第三世界の国々に、医師をどんどん派遣し、そうした国から学生を受け入れて医者育てる……。

GDPと乳幼児の死亡率の関係を記したスウェーデンで作成されたチャートがあるが、おおむねGDPの高い国が

死亡率が少ない、という関連を示す中で、唯一の例外が、キューバ。GDPは、他の第三世界の国ぐにのそれだが、乳幼児の死亡率は、群を抜いて低く、アメリカをも下回るほどだ。

こうした事実は、医療を必要としている人からますます遠ざかっていく日本の医療システムにうんざりしている私たちには、十分に刺激的な話だ。そんな空気も手伝ってか、二月に円卓会議が呼び掛けた「キューバ医療を見学する旅」には、予想をはるかに上回る三五人の参加者があり、一週間にはわたって、普通ではなかなか耳や目にするこのできないキューバの医療を知る機会を持つことができた。

ICAP（キューバ諸国民友好協会）が私たちの要望に応じて練り上げてくれたスケジュールはぎっしりで、参加者が二手に分かれて別の機関・施設を見学することもあつ

た。私自身は、全体の通訳を務めて、体系的にメモを取ることができなかったので、きちんとした「報告書」が今後できることを期待しつつ、今回はラフで個人的な印象記にとどめたいと思う。

医療先進国、と聞けば、「最新テクノロジーを駆使した、立派で、清潔な、明るくまっ白な病院」を、ひとまず思い浮かべるかも知れない。日本は、というと、「地域に根ざして長い間住民のケアに当たってきた古い病院が次つぎと閉鎖され、ピッカピカの大病院に統合されていく。」というのが私の住む東京・世田谷での現状だ。特に小児病院が次つぎとつぶされ、産婦人科や小児科が病院から消え、最も必要とされる部分が切り捨てられていく。キューバの医療施設は、決して立派ではなく、あの五〇年代のアメリカ車を、壊れても修理して大事に走らせているのと同様、古い機械や道具が、そのまま使われる。しかし、医師一人あたりの住民の数は一六三人。手の届くところに、ちゃんと医師がいてくれるのだ。

「保健省」の専門家から、キューバの医療システム全般についてのレクチャーを受けたあと、キューバの医療のコアをなすポリクリニコとコンスルトリオを訪問した。ここは、

「医療って、もともとこういうものだったはずだけど……」と、私たちに改めて思い起こさせてくれた。

ファミリードクターが配置されているのがコンスルトリオとよばれる地域の診療所。人びとが住むアパートの一隅にある診療所は、「まちの保健室」といった感じで、最小限のプライマリーケアのための設備しかない。でも週に一度、地域のお年寄りを家庭訪問したり、いつでも手の届くところに医師と看護婦がいてくれる安心感は、なにものにも代え難い。

コンスルトリオの上の機関として、ポリクリニコ（総合診療所）がある。ここには歯科医もいて、たまたま治療中の仮歯が外れてしまった私は、歯科の椅子に座って応急処置を受けるといって、前代未聞の医療体験することになった。幼い頃に通ったまちの歯医者さんの雰囲気は漂う中、医師がなんと、頼もしく見えたことか！

訪問先は、高齢化の波を受けて、ますます需要の高まる老人医療センター、伝統的なハーブを使ったり、東洋医療を取り入れたりして大きな効果を上げている伝統医療研究所、セクシユアリティ、多様な性、エイズなどの課題に積極的に取り組む全国性教育センター、多くのワクチンを、

世界に先駆けて開発しているフィンライ研究所、マクロバ
イオティックを実践する実験農場とレストラン、通ってく
る八〇歳以上の老人たちがとても生き生きとしていた老人
サークル、医学生に基礎科学教育をほどこす医学校、その
他、精神保健センター、リハビリセンター、総合病院、と、
大変欲張りなスタディツアーだったが、最も印象深かった
「ラテンアメリカ医科大学」を紹介したい。

*

キューバが、貧しいにもかかわらず医師を海外に派遣し
て、国際貢献を実践していることは、すでに述べた。近隣
諸国は、しょっちゅうハリケーンに見舞われ、そのたびに
キューバの医師が飛んでいく。また第三世界には、最小限
の医療サービスも受けられない何百万の医療を必要として
いる貧しい人たちがいる。

でもそういう国で、大学教育を受ける、それも医学を学
ぼう、などというのは、とても無理だ。ならばと、キュー
バで彼らを受け入れ、医師に育て上げて祖国に戻って医療
にあたらせようと、一九九九年に「ラテンアメリカ医科大
学」を、この国は創設してしまっただ。三〇か国から毎
年一五〇〇人を受け入れ、卒業生の数は、すでに六〇〇〇

人にもなる。中南米・カリブ諸国、アフリカが、学生の主
な出身地だが、アメリカ合衆国で、貧しいために教育を受
けることのできない黒人の子弟なども、いる。

ちょうど授業を終えて出てきた若い学生たちに会った。
「どこから来たの?」と聞くと、みんなの答えが異なっていた。
ブラジル、ホンジュラス、エルサルバドル、ボリビア、
コロンビア、パナマ、メキシコ……。誰もが「勉強は楽し
くて、楽しくて、ここにいて、とても幸せ。」と笑顔を見せ、
国に戻って医者になることの夢を語る。

持っているわずかなものを、まわりの兄弟たちに分け与
える、という、キューバの人道的なポリシーに、心から感謝
をしている。そんな若者たちに出会えて、私たちも、ハッ
ピーな気持ちになった。

*

もう一つ、素晴らしい人に出会ったことを、最後に書い
ておきたい。

アレイダ・ゲバラさん。あのチェ・ゲバラの娘さんだ。
父親と同じく、彼女も医師、しかも小児科医なのだ。

実は、アレイダさんは、五月に來日、二週間滞在するこ
とになっている。東京で彼女の大きな講演会を企画して

いるキューバ友好円卓会議がお願いして、会見の場を設定してもらった。

「あの人の娘」である以前に、私は「キューバ人民の娘」なのよ」というアレイダさんは、小児病院のアレルギー専門医として、ふつうに働いている。子どもの話になると、目がますます輝く。

そして、「パパがヒロシマに行ったとき、私たちに送ってきた絵はがきに、こう書いてあったの。『平和のためによりよい闘いをするには、この地に来ることが必要です』——だから、私はまず広島に行かなくてはならない。」と初来日の夢を語った。アレイダさんとの再会も、もうすぐだ。

私たちがキューバを後にした日、「カストロ辞任」のニュースが世界中を駆けめぐった。「独裁者の終わり」、「民主化への希望」などと、アメリカ中心のメディアは騒ぎ立てるが、当のキューバは、いたって冷静。もちろん、フィデルの体調は、誰もが心配していることなのだが。「貧しいけれども志のある医療。」「それを信頼する国民。」「もつと貧しい国ぐにへの支援と連帯。」「それがあれば、フィデルなしでもOK! 私には、そんなふうに思えるのだ。」

(キューバ友好円卓会議)

アレイダ・ゲバラさん全国公演スケジュール

★5月15日(木) 広島講演会

18:30~20:30 入場無料

場所：広島平和記念資料館メモリアルホール

住所：広島市中区中島町1-2

お問い合わせ：NPO法人ANT-Hiroshima

Tel：082(502)6304 Fax：082(502)6305

通し3,000円 (2,500円)

場所：大阪府立青少年会館

住所：大阪市中央区森ノ宮中央2-13-33

お問い合わせ：VIVER CUBA×JAPAN FIESTA実行委員会

Tel：078(802)5120 Fax：078(802)5127

info@cuba-japan.com

★5月18日(日) 東京講演会

13:00~19:00

14:00~(90)映画「コマンダンテ」上映

前売り 2,000円 当日 2,500円

場所：JICA地球ひろば

住所：渋谷区広尾4-2-24

お問い合わせ：NPO法人アテナ・ジャパン

Tel&Fax：03(5420)0902

info@atenajapan.com

★5月22日(木) 神戸講演会

14:00~16:00

1,000円 (前売り800円)

場所：原田の森ギャラリー

住所：神戸市灘区原田通3-8-30

お問い合わせ：サラ・シャンティ

Tel：078(802)5120 Fax：078(802)5127

★5月24日(土) 沖縄講演会

14:00~16:00

場所：パレット市民劇場

住所：那覇市久茂地1-1-1

お問い合わせ：アレイダ・ゲバラさん招聘

実行委員会 Tel：098(865)2155

★5月20日(火) 大阪講演会

13:30~21:10

1部(13:30~16:30) 2部(17:30~21:10)

1部のみ1,000円 (前売り800円)

2部のみ2,500円 (前売り2,000円)

5/17

(土)

初来日!

アレイダ・ゲバラさんを迎えて

キューバ友好フォーラム開催!



「日本の土着の文化や伝統医療に興味があります」と語るアレイダさん
(08年2月ハバナの自宅にて)

アレイダ・ゲバラ

ALEIDA GUEVARA
小児科医・アレルギー専門医

ウーゴ・チャベスとの共著に『チャベス ラテンアメリカは世界を変える!』(伊高浩昭訳/作品社/2100円)がある。



キューバの地域予防医療の最前線「ファミリードクター」の診療所前で、医師と看護師のみなさん。
(08年2月ハバナ)

フォーラムにご支援を!

今年はキューバ革命から50年目、キューバ革命の英雄チェ・ゲバラの生誕80年にあたります。

この記念すべき年に、チェ・ゲバラの長女アレイダ・ゲバラさんが、「アレイダ・ゲバラさん招聘実行委員会」の招きで、この5月に初来日することになりました。約2週間滞在し、日本各地で講演をしたりイベントに参加されたりします。

チェ・ゲバラは医師でしたが、アレイダさんも父と同じく医師(小児科医)として、ハバナの小児病院に勤務するかたわら、キューバが推進している開発途上国への医療支援活動に従事するため、ラテンアメリカやアフリカの国々をたびたび訪れています。こうしたキューバの医療を通じた国際的人道支援活動や、キューバ国内の先進的な医療が、今や世界的な注目を浴びています。

そこで私たちキューバ友好円卓会議は、アレイダさんを招いて、父チェ・ゲバラに対する想いやキューバ医療の最新実情、小児科医としての活動などについてうかがうために、「キューバ友好フォーラム」を開催することになりました。チェ・ゲバラの人間像やキューバの先進医療を知るにはまたない機会です。

一人でも多くの方にご参加いただきたいと願っています。会場も800人収容の大会場です。PRにご協力いただき、お誘いあわせのうえご参加いただきますよう、よろしくお願い致します。

なお、このフォーラムはボランティアによって運営されますが、アレイダさん招聘には多額の費用を必要とします。フォーラムを成功させるためには、みなさんからの財政的な支援も必要です。

これを機に、キューバとの友好をめざす市民団体「キューバ友好円卓会議」にご入会いただき、ご支援いただければ、こんなうれしいことはありません。重ねてご協力をお願い致します。

☆キューバ友好フォーラム☆

アレイダさんが語る

父チェ・ゲバラのこと
キューバ医療のこと

アレイダさんと語る

阿部知子さん

(衆議院議員・小児科医)

子どもたちの未来

キューバと日本…理解と友好を
深めるために



日時 2008年5月17日(土)午後1時開場

午後1時30分~4時30分

会場 明治大学リハビリタタワー 101教室(800人)

【会場へのアクセス】●JR御茶ノ水駅御茶ノ水口から徒歩3分

●丸の内線御茶ノ水駅・千代田線新御茶ノ水駅B1出口 徒歩6分

●都営新宿線・三田線・半蔵門線神保町駅A5出口 徒歩8分

資料代 1500円(円卓会議会員 500円)

主催 キューバ友好円卓会議、明治大学軍縮平和研究所

後援 キューバ大使館、ピースボート、キューバに自転車を
送る会、キューバに鍼を送る会、キューバ連帯の会

●年会費

☆団体:1万円 ☆個人:3千円

☆カンパも受け付けています。(おいくらでも)

●お問い合わせ・参加申し込み

キューバ友好円卓会議

〒157-0073 東京都世田谷区砧8-15-14-104

TEL & FAX 03-3415-9292

e-mail cuba_entakujp@yahoo.co.jp

郵便振替口座 00100-9-499950

加入者名: キューバ友好円卓会議

〈連載〉台所の科学力！

足もとから科学しよう

第2話 ダイオキシンと科学

「ラップ」は、何でできているのか
ご存じですか

松崎早苗

ダイオキシンは、日本でも一九七〇年代初めに、ゴミの焼却から発生することがわかって大騒ぎになりましたが、それを分析した、愛媛大学農学部（当時）の立川涼教授は、周囲からひどく非難されたということです。誰も嫌なことは、知りたくないからでしょう。ベトナムで米軍が大量に撒いた枯れ葉剤に不純物として入っていて、それを浴びたために、多くの先天異常の子どもが生まれ、ベトナム、ドクちゃんの映像が世界中の人びとに衝撃を与えていたのですから、自分たちの裏庭からダイオキシンが見つかったと知らされて、ぞっとしたことでしょう。

有機物と合成有機化合物

「ダイオキシン」と一言でいいますが、結構複雑なものです。ダイオキシンは有機塩素化合物の一つです。「有機」には、二通りの受け取り方があります。有機農産物に象徴される天然自然物というプラスイメージと、有機合成化学物質（有機化合物）という、人工的でマイナスイメージです。化学に踏み込まなければ「有機的」とは「生き物のように連携して協働する組織」のイメージです。というわけで、文字

面を解釈すれば、「機が有ること」で、これに対する言葉は「無機的」です。「機」は「氣」に通じ、生きていること、すなわち、生物を意味します。

生物のからだは何から出来ているかを科学的に表現すれば、炭化水素から出来ています。炭素と水素から成る化学物質です。これらの化学物質を扱う学問分野が「有機化学」ですが、この分野は、石炭と石油に含まれる化学物質から、さらにいろいろな別の化学物質を合成する化学反応の学問分野です。それに対して、金属とか鉱物に象徴される化学が、「無機化学」です。

石炭の主成分は炭（すみ）ですが、完全に炭化しているわけではないので炭化水素類が残っています。石油は真っ黒な液状の炭化水素類です。

なぜ炭化水素かといえば、石炭は太古の植物が、石油は海の生物が、地殻に閉じ込められた後、微生物等の働きで分解されて出来たものだからです。由来が生物だから、炭化水素なのです。

しかし、私たちのからだにとってみれば、「体内で慣れ親しんできて、うまく扱えるものか」「そうでないのか」という大きな違いがあります。

からだ中の化学反応（生化学反応）というものは不思議なもので、道は多数あるものの、道筋はきまっているのです。人工的に反応を起こさせる場合は「混ぜ合わせて熱を加え、良く振る」ことになるので、メチャクチャいろいろなものが出来てしまいます。

思いどおりの物質を効率よく得るのは大変です。必ず、「精製」しなければなりません。不純物が十分取り除けないこともあり得ますし、精製過程でまた別の薬剤を使いますから、それが残留することにもなります。

炭化水素は生命の基本

さて、さまざまな元素、原子の中で、炭素は、たいそう特殊です。その特殊性が生命を生んだ理由であると、推測されます。

水素原子の大きさは1.2オングストロームあるいは12ナノメートル（ 1.2×10^{-9} メートル）、炭素も同じ単位で1.3から1.4と小さいので、生物のからだになるためには非常に多数の原子同士が結合しなければなりません。

また、生物のような高等機能をもつには多様な仕組みが

必要ですから、結合のバラエティーが求められます。それを満たすように、炭素原子同士の結合は一本の手、二本の手、三本の手と、三種類の結合が出来るようになっていきます。

化学結合を考えると、炭素原子は、原子核が中心にある三角錐とみなします。二個の炭素原子が結合するには、二つの三角錐同士は、頂点と頂点、辺と辺、面と面の三種類で、くっつきあうことができるのです。

頂点と頂点が結ばれたものを一重結合、辺と辺の場合を二重結合、面と面の場合を三重結合と呼びます。これが真に正しい表現とは言えないかもしれませんが、イメージしやすいでしょう。

こういうことから、炭化水素類は立体的で複雑な形が無限にできます。炭素二個だけでも、エタン、エチレン、アセチレンの三種類ができます。これが炭素三個、四個、五個、六個となると、直鎖につながるもののほかに、折れ曲がるもの、環状になるものなどが出てきますから複雑になります。

塩素は反応性が極めて高い

炭素には、水素が結合しているのが基本です。その水素

を他の原子に置き換えることができます（置換という）。とくに塩素原子、その類縁であるフッ素、臭素、ヨウ素（ハロゲンという）は、簡単に水素と置換します。それが有機塩素化合物、有機ハロゲン化合物です。塩素は食塩という無機化合物でいれば、固体なら結晶で、水溶液ならナトリウムイオンと塩素イオンになっていて問題ないのですが、薄い食塩水を電気分解すると、水素ガスと塩素ガスができ、こうなると、とんでもなく反応性があります。それらはすぐに結合して塩酸（塩化水素）という無機化合物になります。

塩酸は、服にかければ直ちに穴があきますし、皮膚につけば大やけどをします。塩素ガスは第一次世界大戦の化学兵器でしたし、アウシュビッツで使われた毒ガスはホスゲンという無機塩素化合物でした。反応性の高い塩素を利用すると、非常に多彩な化学物質を合成することができます。化学者たちは塩素化学に一時期夢中になりました。その成果が、いま、われわれの荷物になっているのです。PCB、2,4-D、2,4,5-T、ダイオキシンだけでなく、塩ビや、消毒剤、農薬などです。

食塩が安全なのに、どうして塩素はそんなに劇毒なのか

と不思議に思われるかもしれませんが、化学物質は、その存在形態で、同じ名前でもまったく別物になります。

反応性の高い状態はラジカルといわれます。イオンとはぜんぜん違う化学状態です。私にも分かりにくく説明しにくいのですが、イオンは穏やかでラジカルは激しいのです。過激派を「ラジカル」と言うのを思い出してください。近年、体内で悪さをするのは「発生期の酸素」だという説が流布されていますが、たぶんラジカル反応でしょう。

出来立てはやはやの酸素は、裸の原子状態で、すぐに周りを酸化してしまいます。塩素の原子状態が酸素ラジカルを作って、殺菌などの反応性が生じます。

ダイオキシンの世に出たのは？

ダイオキシンを工業的に合成したことは、あったでしょうが？ それは不明です。有機化合物を塩素置換する反応は、ごく当たり前に行われたでしょう。その過程で、不純物の発生や、事故による非意図的に有毒物質が出たと想像できます。

その猛毒は早い時期に認識されたと想われます。PCBという有機塩素化合物がありますが、絶縁体用の工業製品

として非常にすぐれていましたが、労働者が病気になるって争議になりました。そういうときにダイオキシンの猛毒性は認識されたはずですよ。

しかし、こういう事件の常で、真実は闇の中に長い間閉じ込められてしまっています。それが表に出たのはベトナムの悲劇からです。2、4-D、2、4、5-Tなどの混合物である化学兵器（枯れ葉剤、オレンジ剤）でベトナムドクちゃんが生まりました。オレンジ剤にはダイオキシンが不純物として含まれていて、それを撒けば奇形が生まれるなどのひどいことがおこると、米軍は知っていました。オレンジ剤を扱う米軍兵士にも知らせていなかったのです。

第二次世界大戦中、連合国側は毒ガスとしてフェノキシ系の化学物質の合成を目指していました。敵国の森林、田畑の作物を枯らすためです。もちろん化学兵器として使う前に効果を確かめたことは明白でしょう。（公式文書がないから従軍慰安婦も沖縄の集団自決も命令はなかったと主張する人と同じような人物は、この件でも居るでしょうけど。）ベトナムで世にでたダイオキシン入り枯れ葉剤は、停戦後には平和利用、すなわち農薬になりました。フェノキシ系の化学物質とは、六角形のベンゼン環を酸素で結合して

塩素置換した物質です。2,4-Dは、2,4,5-Tほどダイオキシンの多くない、というので、日本でも除草剤として堂々と使われました。この二種類以外にも多彩な形の塩素系除草剤が使われましたので、日本の田んぼの泥にはダイオキシンが多く残っています。

これは一九六〇年代から一九七〇年代のできごとです。つぎにダイオキシンがデビュウするのは一九八〇年代に入ってから、ゴミ焼却灰に不可避免に入ってしまうことが分かったためです。

日本では一九八三年に分析結果が発覚して、一九八五年に排煙基準ができました。それが緩い基準だったために、一九九五年に、三度、ダイオキシン問題がブームのように騒ぎになりました。そして、ようやく「ダイオキシン特別措置法」という法律ができて、焼却技術の向上や基準の厳格化が行われました。しかし、これもまだまだ緩く、すみずみまで監視ができないので、また一〇年経つと、失敗の結果が顕わになってくることでしょう。

ダイオキシンの複雑な形

六角形をしたベンゼン分子に他の元素がくっついていたりして名前が変わっていくときは、ベンゼンの部分を、フェニルと呼びます。フェノキシとは(フェニル+オキシ)ベンゼン環に酸素(オキシジェン)が付いていることを意味します。2,4-Dや2,4,5-Tを合成するときの出発物質はフェノール(ベンゼン環にアルコール基OHのついたもの)で、これに塩素を二個、三個と付けるとできます。製造においては、フェノール(ベンゼン環にOHがついた分子)と塩素(クロールという記号はCl)がたっぷり入っている反応容器の温度をうまくコントロールしないと、ベンゼン環についている水素と塩素を入れ替えるだけでなく、フェノールについている水素を飛ばしてしまい、別の分子ができてしまいます。これが猛毒のダイオキシンです。

いわゆるダイオキシンの正式化学名はポリクロロ・ジベンゾ・パラ・ダイオキシンです(二つのフェニル基が二つの酸素で結ばれてできた分子に塩素がたくさんくっついていう意味)。コントロールを間違えると、反応器の中で二つのフェノールから水素二個と酸素一個がとれた上でくっつきあった分子ができ、辺りにたくさんある塩素原子が、水素と入れ替わってしまうという反応が起きます。

もつとも恐れられているダイオキシンは、2、3、7、8-テトラクロロダイオキシンですが、その他に塩素の付き方が様ざまのダイオキシンの不純物として混じってしまうのが避けられないのです。塩素を二つ付けるより三つ付けるときに出来やすいようです。

コントロールを間違えた結果の事故がイタリアのセボンで一九七六年に起こり、その人体被害は長くつづき、微細な環境ホルモンの影響は現在でも調査研究されているという有様です。反応が終了したあとに主成分を取りだした残りの液にはダイオキシンが入っていて、化学会社の廃液が捨てられたラブカナル（米国）で住民被害が起きたのは有名な話です。

毒性の表し方

ダイオキシンのという化学物質について、大体の輪郭がつかめましたでしょうか？

まだ述べていないことがあります。それは塩素の数と置換場所がいろいろなために、ダイオキシン類は七〇種類にもなることです。そのほかに、ジベンゾフランというもの、

PCBというものが同様の毒性があるということから、ひっくるめてダイオキシン類といえます。それらを合計すれば一二〇種類ばかりになります。頭が痛くなりますね。毒性のことや環境基準のことを考えると、「人類はどうしてこんな面倒くさいことを始めてしまったのだろう？」と思います。とても管理できないのではないかと、頭を抱えてしまいます。

つぎは、その汚染濃度の表し方です。現在、日本では、いくつかの規制値があります。たとえば、ゴミ焼却場の煙突排気中の濃度は0.1ナノグラムTEQ/立方メートル、環境大気中の濃度は0.6ピコグラムTEQ/立方メートル、一日の摂取量は4ピコグラムTEQ/体重1キログラムという規制値が主なものです。このグラム数の後に付けられているTEQは、毒性当量というもので、上に挙げたもつとも恐れられているダイオキシンの2、3、7、8-テトラクロロダイオキシン(TCDD)の毒性を1として表したものです。

TCDDより毒性の弱いダイオキシン類が100種類ちかくあります。なぜそんなに多数のダイオキシンがあるかと疑問でしょう。基本形はベンゼン環二つが酸素原子二つをはさんでつながっています。するとベンゼン環の五つの

水素が塩素と置換することができます。計一〇箇所の置換が可能で、計算上は塩素一個から塩素一〇個までがあつちについたりこちについたりしますから数が増えてしまいます。その上、研究が進展して上述したダイオキシシン基本形以外に二つのベンゼン環のくつつき方には、酸素一個以外に直接結び合うジベンゾフランというものと一本の手でつなぐPCBがあつて、これらも形によつてダイオキシシンと同じ毒性を示すことが分かりました。それらの一つ一つのグラム数を出すと大変なことになるので、まとめて一つの値で表すことにしています（同じ作用原理で生物に影響を与える毒性についての新しい考え方に基づいています）。一〇〇種類ちかくの一つ一つの毒性が強い弱いかは常時研究されていますので、数年経つと、その結果を反映して（国際的に）係数をきめ直しますから、少し値が違つてきます。そのことは研究者と国際機関に任せるとしても、ほかにも問題があります。それは、ナノグラム（10億万分の1グラム）とかピコグラム（千分の1ナノグラム）という非常に僅かな量を、本当に正しく測定できるのだろうかという問題です。空気、土壌、水、食品、血液などの試料の中に含まれている僅かなダイオキシシン量を測定するのは大変なこ

とです。試料はそれ自身複雑な化学物質からなっている上に、測りたい物質としても様ざまなものが含まれていますから、その中から、目的のダイオキシシン類だけを選び分けるのも大変ですし、測定器が働いてくれる量まで濃縮することも容易ではありません。その過程で失われることや逆に汚染が入り込むことがあります。それが防げたとして、測定した物質が確かに目的物だというためには、同位元素を使った標準物質と比較します。

放射線同位元素という言葉をご存じと思いますが、原子核の質量だけが異なるものを同位元素といい、水素でしたら通常は一という質量ですが二という水素（重水素）もあるように、すべての元素について同位体があり得ます。天然の元素も僅かながら同位体を含んでいますので、それを集めるのですが、その技術はまさに原子力技術です。ウラン濃縮技術とは、このことですし、標準物質を作る目的で様ざまな元素に放射線を当てて、人為的に同位体をつくり出すことも行われます。

日本はおそらくほとんど欧米の原子力先進国から買っています。ダイオキシシン国際会議では、こういう会社が研究者を豪勢な食事に接待しています。国内には三〇近い測定

会社がありますが、その測定技術を評価する（いわゆるQC）作業が国あるいは業界に求められます。測定する量が多かりに僅かなので真値は不明で、測定者が出してくる値が、一定の範囲内に集約してくるのを見て、「確からしい」と納得するほかないので、そうした作業を定期的に権威者が行います。じつに大変なことです。

科学ですべてを決めることはできない

規制値を決めれば政治的には大きな効果（良くも悪くも）がありますが、その背景にある科学的・技術的問題は、たいへん複雑だということがお分かりになりますでしょうか。科学的・技術的完全解決を待っているは何事も決まらないという事実、これこそが政治決着の必要性を示していますし、庶民に判断力が求められるゆえんです。

一般庶民としてはとても心苦しいことです。産業発展のために環境を汚染され、その汚染を測定するために更に先進産業のお世話になる。そうしないと私たちの安全が得られない、というか、安全であるか否かの判断さえできないという、いやな状況なのです。とてもとても許し難い状

況なのですが、これを〈発展〉と呼び、誰もが喜んで受け入れてきたのです。これは産業だけが悪いのではないことだけは、はっきりしています。

たとえば、食品用のラップフィルムは必要ですか？

サランラップやクレラップの名前で親しまれてきたラップフィルムは、塩化ビニリデンです。塩素は、塩ビの二倍入っていて、重さの半分以上は塩素です。これをゴミ焼却場で焼けばダイオキシンができます。

様々な技術でダイオキシンを少なくするようにしていますが、塩ビと塩化ビニリデンの使用をやめれば、高価な焼却炉は不要になります。

台所での作業を見てみると、余りにも無造作にラップフィルムを使っているのが、「あなた、それ何から出来ているか知っているの？」と聞きたくなります。瀬戸物の蓋を載せれば済むことです。しかし、野菜の茄子ですら、トレイに入れてラップで包んで店先に並べる時代になってしまいましたからね。ラップで包まないと「おしつけ」とでも思っているのでしょう。こういう横並び精神って、怖いですね。

ナメられた東京都と新宿区

一月十四日夜八時すぎ、新宿御苑に、六〇人の自衛隊員と、特殊アンテナや無線装置を積んだ特殊車輛六台が入り、御苑が迎撃ミサイルの基地にふさわしいかを調査した。

翌日、テレビのニュースに驚いた新宿区長と幹部職員が、防衛省に抗議したが、「国防に関することの連絡は困難。調査結果も公表しない」との回答。イージス艦で世論騒然とするなかで、都も区も公然と無視された。

格下げされた新宿区の男女共同参画部門

これまで総務部の中に置かれた、「課」ではなく、担当副参事を置き、「男女共同参画・平和担当」となっていた部門が、「子ども家庭部」の中の「男女共同参画課」に格下げ。「女は家庭に帰れということか」「平和が消えたのはなぜか」と、区議会では猛反撃。その結果、「子ども家庭部」

の下に「男女共同参画課」を新設。平和事業は、総務部総務課の担当になった。

「男女共同参画」とは、「子ども家庭」の概念より大きい「人権」問題。新宿区は、全国でも希有な女性区長を当選させているだけに、残念。

「集団自決は軍が関与」と大阪地裁判決

「大江健三郎著『沖縄ノート』や家永三郎『太平洋戦争』に記載された「沖縄戦の集団自決は軍の命令」は、事実と異なる名誉毀損」と、大江、家永氏や岩波書店を訴えていた裁判（原告＝座間味島・元海上挺進隊第一戦隊長・梅澤裕（91）と渡嘉敷島・元第三戦隊長、故赤松嘉次、弟・赤松秀一（75）に、大阪地裁（深見敏正裁判長）は三月二十八日、原告の訴えをしりぞけ、大江、家永、岩波側の勝訴となった。

パトリオット3 霞ヶ浦へ強行配備

ミサイル防衛のための地対空誘導弾パトリオット3が、三月二十九日午前三時五〇分に、航空自衛隊霞ヶ浦分屯基地（茨城県土浦市）に強行搬入された。昨年三月の入間（埼玉）、十一月の習志野（千葉）、今年一月の横須賀（神奈川）に続く配備だが、発射機やレーダーなど関連装置を積んだ大型トレーラー七台が、前日、名古屋市の工場を出発、深夜到着したもの。

基地前には（パトリオットミサイルいらない！霞ヶ浦基地実行委）をはじめ多数の市民団体、労組、市民などが集まり、「一発五億円のパトリオットは、要らない」「核軍拡の引き金、ミサイル防衛に反対！」「と、寒風の深夜、右翼の示威行動や警察の過剰警備のなか、抵抗を続けた。

「君が代」強制に抵抗の根津さん、免職を阻止

東京都教育委員会は、三月三十一日、〇七年度の卒業式での君が代不起立・退席を理由に、二〇名の懲戒処分を発令したが、すでに停職六か月の処分を受け、免職を危惧されていた根津公子・南大沢養護学校教諭の免職は、阻止できた。

力士急死対策委、六か月で解散

時津風部屋の新人力士が、力士をやめようとしたため、親方はじめ兄弟子たちが厳しいお仕置きを加えて死亡させた事件で発足した〈再発防止検討委員会〉は、事件の背景を探るため、〇七年十二月以来、全五三部屋の視察を行なっていたが、四月十四日「視察完了」を報告。再発防止策と、相撲協会を所管する文科省に報告して解散する。

希望に満ちて力士になった新弟子が、しごきに耐えかねて退職を申し出たばかりに、激しい仕置きを加えられ惨殺された事件は、角界の体質を変える、またとない機会とされたが、十分な視察も、申し合いも、行われたとは言えず、相撲ファンからは失意の声。

高校生就職率、五年連続で増加

〇八年春の高卒予定者の〇七年十二月末就職内定率は、八三・八％で、前年比二・三ポイント増。五年連続の上昇となった（文科省発表）。

今春卒業の国公立立高校約一〇九万三千人中、就職希

望者は、約二万四千人（二九・六％）。うち内定は、約一七万九千人（八三・六％）。男子は前年同期比一・九％増の八八・〇％。女子は二・九％増の七八・四％。年々好転しているとは言え、女子の就職率は低い。

出生率、二年ぶりに減少

○六年、六年ぶりに急激に回復した出生率は、○七年は一・二万九三七人で、前年より一、三四一人減。婚姻数も、前年比一万八九〇件減の七三万七一二七件に。

政府「保育所新待機児童ゼロ、保育所定員百万増作戦」を発表

○七年四月の待機児童は約一万七千人。政府は一七七年までの一〇年間に、受入児童数（現在二〇二万人）を一〇〇万人増の三〇〇万人とし、学童保育（小一〜小三）も、六八万人から二一三万人（二四五万人増）とする数値目標を発表。

出生率増加の具体策として、保育所拡充、「保育ママ」の制度化で、三歳未満児の受給率を現在の二〇％から三八

％に引き上げると公表。その費用、年間一・五〜二・四兆円の財源は「消費税引上げ」と、発表。

男性国家公務員の育休取得率は三割弱

政府は、○五年一月、男性国家公務員の育休（最大五日間）を創設したが、人事部の「育児参加のための特別休暇使用実態調査」によると、○六年に子が出生した男性国家公務員（七七〇二人）の育休利用率は二九・八％にとどまった。

子育て支援充実には消費税アップを

増加する一方の育休対策に、労組からも経営者からも、「消費税を財源に」の声。「費用負担を企業に追わせるのは、酷」と。

大阪で〈好きやねんドーンセンターの会〉発足

女性知事に代わって登場した橋下大阪知事は、就任記者会見でドーンセンター（府立女性総合センター）の廃止・

売却・事業縮小の検討を開始。女性たちは〈好きやねんドーンセンターの会〉を結成。三月二〇日、知事にドーンセンターの存続と男女共同参画政策推進の要望書を提出。街頭での署名集めも展開。

藤沢市長選で女性候補敗北

革新系が一致して推していた、元市議、柳谷亮子さん(62)は、元県議の男性候補に次々点で敗れた。

企業のトップに、女性続々進出

世界六〇か国で語学学校を展開するベルリッツ・インターナショナルのCEO(最高経営責任者)に、日本IBMの元専務、内永ゆか子さん(61)、資生堂の副社長には、同社取締役の岩田喜美枝さん(64)が就任。アサヒビール社外取締役には、昭和女子大学長、板東真理子さんが兼任。

韓国の女性部族省、女性省に縮小して統廃合を撤回

ハンナラ党が統廃合を求めていた韓国の「女性部族省」は、多数の女性たちの猛運動で、統廃合は撤回。「女性省」の名で、若干縮小はされるものの、存続することになった。

「年寄り死ね」か 「後期高齢者医療制度」にショック

「長寿医療制度」の名で、四月にスタートした「後期高齢者医療制度」。七五歳以上は、年金から毎月数千円が天引きされるとあって、政権党を揺るがしかねないほどのショックを庶民に与えている。

この制度は、「七五歳以上が加入する、独立した公的医療保険」。国民健康保険や、健康保険組合から移行した、約一、三〇〇万人の医療費を、高齢者本人に負担させ、税金と他の医療保険からの支出を軽減する仕組み。

厚労省は、「高齢者は高血圧や糖尿病などの慢性病をいくつもかかえ、別々の病院に通うことも多いので、〈担当医〉が患者の同意を得て、定期的に診療計画をつくった場合に、定額月六千円(患者負担は六百円)の報酬を支払う仕組み」をつくったが、担当医は患者一人につき一人。他の病院や

診療所は、症状急変の場合以外は、「検査や画像診断、簡単な処置については、医療費を請求できず、担当医も、検査などは何度してもしくなくても、定額の月額支給」が原則。

このため、一人の医師が患者を囲い込む心配も生まれた。

「複数の診療科の医師が老人を支える仕組み」がこわれることも懸念されるため、秋田や茨城の県医師会は、「外来診療の制限になりかねず、〈複数の医師で老人を支える仕組み〉が流れる恐れもある」と、会員医師に「担当医」にならないよう呼びかけ、担当医の研修会の開催も中止。「患者本位」から「医療費抑制」に転換した、と、反対。

四月十四日現在で、11県、20市・地区の医師会が、担当医の定額報酬を「算定しない」か「慎重に対処する」ことを求めている。

高齢になると、内科、眼科、整形外科など複数の診療を受けることが多く、それぞれ専門医に診てもらうのが普通。一般の高齢者からの反発も大きい。

「後期高齢者」という呼び方も、「あの世の一步手前」という印象。「高齢者の医療費を高齢者本人にだけ負担させれば財政的に破綻するのは明瞭。道路など、ほかにムダな使い道があるのでは」という指摘も多い。「次の国政選挙

に〈老人党〉が立てば圧勝」の声も。

聖火リレーに抗議のデモ

北京オリンピックへの聖火リレーに、チベット問題に共感する各国ボランテアが抗議デモ。各国で大混乱。

混迷続く米国大統領選

民主党大統領候補として女性の能力をアピールするクリントンさんと、アフリカ系のオバマ氏が指名レースで混戦。どちらが最終的な勝利を得ても、もしも民主党が勝てば、米国初の女性大統領か有色系大統領誕生のチャンスとなり、世界の流れにも影響する。

日本経団連、G8ビジネスサミットを開催

七月の洞爺湖サミットを前に、日本経団連は、四月一七日、東京都内で、世界主要八か国の経済団体代表らによるG8ビジネスサミットを開催。

ポスト京都議定書の枠組について、「すべての主要排出国の参加」や「セクター別アプローチの進展」を盛り込むよう求める共同声明をまとめ、福田首相に手渡した。

税収不足に三つの疑問

民主党は、税金の使途として、道路特定財源の一般財源化と、〇八年度からのガソリン税引下げを追求しているが、「税収をどう埋めるのか」「地方の交付金の財源は何か」「環境税は導入するのか」が、三つの疑問。民主党からの名案も、ゼロ。

名古屋高裁「戦闘地域への空輸」は「憲法九条違反」と判断

自衛隊イラク派遣差し止めを求める集団訴訟の控訴審で、四月十七日、名古屋高裁、青山邦夫裁判長は、「航空自衛隊がバグダードに多国籍軍を空輸しているのは憲法九条一項に違反する活動を含んでいる」との判断を示した。

訴訟は原告敗訴となったが、9条をめぐる裁判で違憲判

断が出たのは、七三年の「長沼ナイキ訴訟」で自衛隊を違憲としたのと、五九年の砂川事件「一番で「米軍駐留は憲法上認められない」とした二件だけだっただけに、「平和的生存権」についても言及し、「9条に違反するような国の行為を強制される場合には、その違憲行為の差し止め請求や損害賠償請求などにより裁判所に救済を求めることができる場合がある」とし、平和的生存権の具体的権利性を明示した意味は大きい。

しかし、今回のイラク派遣では「原告らの平和的生存権が侵害されたとまでは認められない」として、一人一万元の損害賠償は認めず、原告側の控訴を棄却した。

福田首相は「判決は国が勝訴」と明言したが、政府の根拠を覆したこの判決は、米国の「正義なきイラク侵襲」への、日本国民の疑問に答えるもの。政府の説明責任が問われる。

NHKも民法も「アナログ表示」で地デジ移行をPR

二〇一一年に予定されるアナログ放送停止に備え、今夏から「アナログ」のスーパーが流される。地デジ受信機世帯は二八%にとどまっているが、すでに、興味深い番組が

地デジで積極的に流されており、視聴者の貧富格差は、進む一方。

田辺聖子さん、ジュニア文学賞を創設

「書くことのおもしろさを若者に伝えたい」と、田辺聖子さんが「田辺聖子ジュニア文学賞」を創設した。

対象は中学・高校生。小説、エッセイ、短歌、俳句、川柳、読書体験記の六分野で入選作を決め、部門別の最優秀作から「田辺聖子賞」を、聖子さんご自身が、中・高各一編、選ぶ。

母体は、田辺さんの母校、大阪樟蔭女子大の田辺聖子文学館。「感情豊かな若い時期に、書く勇氣を持った子を、励ましたい」と田辺さん。

小説は二〇枚以内、エッセイと読書体験記は五枚以内、一人一編。短歌・俳句・川柳は一人三点まで。個人賞のほか学校単位で応募する「学校賞」もある。十月二七日消印有効。
〒577・8550 東大阪市菱屋西4・2・26大阪樟蔭女子大内「田辺聖子文学館・ジュニア文学賞事務局」
(06・6723・8132)へ。

危険なガソリンの買いだめ

値下がりしたガソリン。再値上げの可能性もあり、買いだめに走る人もいるが、ガソリンは、零下40度でも火がつき、引火しやすく、多量の可燃性ガスが発生しやすい。床にこぼれるとたちまち気化。そこに火がつくと一瞬で部屋中に火が走り、爆発する。静電気でも火災が起きる——と、消防関係から厳しい警告。

ハロゲンヒーターにご注意

エスケージャパン製ハロゲンヒーターに、発煙・発火事故が発生。同社は「十四万四千台を無償で点検・交換する」と発表。0120-816-107へ電話を。

来春卒の大学生、三四%が就職内定

四月一八日、リクルートが、内定率は理系四四・九%、文系二九・六%と発表。調査日は四月一日～五日。対象は関東・東海・関西の大学生。インターネットで実施、回答

は一、三四六人。

上映中止の「靖国」、右翼は、賛否両論

四月一八日、東京・新宿、ライブハウス「ロフトボックスワン」での、右翼系団体の試写会の結果、「賊作」、「靖国を理解していない」の一方、「労作」「反日とは思えない」の声も。「映画館が屈したのは残念」では一致。

国交省 淀川ダムに「待った!」

ダム推進の国土交通省が建設をすすめている淀川水源の四つのダムに、国交省の諮問機関から「ダム建設より、堤防の補強をすべき」との意見書が出た。

根拠の一つは、ダムの建設費が高いこと。四つのダムで三、八〇〇億円。計画より八二〇億円もふくらんだうえ、治水効果をあまり期待できないこと、ダムの造成よりも、危険な堤防の造り替えのほうが急務とわかったため。

国交省がダム建設にこだわるのは、始めた以上は、というメンツと、注ぎ込んだ金額のためだが、流域委員会の声

こそ重視すべきでは。

女性と高齢者にチャンス！ 政府、三年間で二二〇万人の雇用創出を提唱

少子高齢化の中で働き手を増やすことは、経済成長維持のポイント。政府は四月二三日、三年間の数値目標として、「若者の正社員化と女性・高齢者で二二〇万人の雇用創出」を打ち出した。

フリーターを試験的に雇う企業に助成金を支給、若者向けの「ジョブカード制度」を高齢者にも広げ、働く女性や高齢者に不利な税制や年金制度の改革、保育の拡充、「保育ママ」資格要件の緩和などだが、サラリーマンの無職の妻を優遇している「第三号被保険者制度」だけでも、改革への道はけわしい。

民主党、日雇い派遣禁止法案を提出

民主党は、ワーキングプアの温床となっている「日雇い派遣」を全面禁止する「労働者派遣法改正案」を、国会に

提出した。

雇用期間二か月以下の労働者派遣を全面禁止する一方、派遣業者の罰則を、現行三百万円以下から、最高三億円に引き揚げる。一方、派遣労働者への賃金や社会保険料の支払いは、派遣業者と派遣先企業の連帯責任とした。

〔惜別〕

高岩 仁さん 日本の侵略の歴史を告発した記録映画「教えられなかった戦争」シリーズを撮り、全国各地での自主上映で普及した、記録映画作家・高岩仁さんが、一月二十九日に亡くなられた。享年七十二歳。

福岡県生まれ、東京写真短期大卒。東映の撮影部員を経てフリーカメラマンに。公害問題や労働運動、在日韓国朝鮮人の活動など、さまざまな社会問題を記録映画という手法で伝えた。

九〇年からは「教えられなかった戦争」シリーズ（「マレー半島編」「フィリピン編」「沖縄編」「中国編」）を撮り続けた。明治以降のアジア侵略の歴史を「社会構造」から解明しようと試み、その背景にある資本家のもくろみまで

も鋭く描いたこのシリーズは、一般紙で取り上げられることはなく、映画館での上映も無理。このため、映画の制作にかける資金の調達に、苦勞され、最後は、自宅を担保に。それでもなお志を貫いた。

お別れの会の横浜市北斎場には、韓国や沖縄からも参列者があつて、高岩さんの広い人脈と人徳をあらためて痛感した。

おつれあいの純子さんによれば、〇六年春、ガンが発覚、闘病生活に入ったが、「必ず回復する。そして仕事をする」と、資料集め、取材にも出かけていらしたという。「ベツドの周囲は朝鮮編の資料で埋まっていた」と。

韓国からかけつけたドキュメンタリー監督・金美禮さんが、未完になった、朝鮮編の完成を気にかければ、「春になったら済州島にご一緒するお約束であった」と声をつまらせた。生きる道に迷う若者の学びの場である「のむぎ」のメンバーによる平和太鼓が会場に響き、出棺のときは愛唱歌「インターナショナル」で見送った。

改憲の動きに危機感を持ち、「誰が戦争を必要としているのかを考えて平和運動を続けなければならない」と言い続けられた高岩さん。まだまだ活躍してほしかった。（光）

会と催し



国際女性デー——ボーヴォワール生誕 一〇〇周年記念 日仏シンポジウム

今年は、ボーヴォワールの生誕百周年。フランスでは、彼女が生まれた一月九日前後に、各地でさまざまなイベントが開催された。日仏女性研究学会も、日仏会館フランス事務所との共催で、『第二の性』の著者の生誕百周年を記念して、三月八日の国際女性デーに、日仏シンポジウム、「ジェンダーの新しい地平を拓く」を、東京恵比寿の日仏会館で開催した。

「人は女に生まれない、女になるのだ。」という、ボーヴォワールの言葉が、先進諸国の女性たちに与えたインパクトは、はかり知れない。七〇年代の先進諸国で展開された女性解放の理論と運動の出発点に立ち戻り、女性解放、そしてジェンダー平等が、どこまでできたかを検証し、今後、何を目指し、どんな方向へ向かうべきかを探るのが、このシンポジウムの目的だった。

パネリストの報告に先立ち、女性解放運動との出会いの中で、闘うフェミニストに変貌していくボーヴォワールを描いたデルフィーヌ・カモリ監督の「フェミニスト、シモーヌ・ド・ボーヴォワール」と、〈阻止連〉協力の下で制作された山上千恵子監督の「女たちは元氣です!」「八二年優性保護法改悪阻止の記録」(監督の了解を得て、日仏女性研究学会が、一五分の記録に編集し直したもの)の、二本の短編が上映され、七〇年代から八〇年代初めにかけて、自由と解放をもとめて闘っていた日仏の女性たちの熱気が、映像を通して、会場にみなぎった。

〈日仏女性研究学会〉の石田久仁子の司会による第一部「理論と実践」の最初の報告者は、自らも七〇年代の女性解放運動に参加し、現在パリ第九大学で教鞭をとるフランソワーズ・ピックさん。「理論と実践の間で——シモーヌ・ド・ボーヴォワールと「フェミニズム論争」をテーマに、『第二の性』を、フェミニズム史の中に位置づけとらえ直し、この本がボーヴォワール以後のフェミニズムに、どれほど

大きな理論的貢献をもたらしたのか、またフランスの七〇年代から今日に至るまでの運動と理論が、どう交差し、現在展開しているか、についての報告がなされた。

次いで首都大学東京の江原由美子さんが、運動と理論の両面から、フェミニズムを次世代にどう継承させていくかという問いを軸にして、「現代日本における女性学・ジェンダー研究の理論的展開——一九七〇年代から今日まで」と題する報告を行なった。江原さんは最後に、女性学やジェンダー研究の成功が、逆に呼び水となったこの数年来のジェンダーフリーバッシングにも触れ、こうしたバックラッシュ勢力が、ごく最近まで権力の中核にいたこと、男女平等は当たり前だと考える若い世代が、そうした現象に無関心なことに、警鐘を鳴らした。

同じく石田が司会をした第二部「平等の新しい定義をめぐって」では、九〇年代のパリテ運動をリードし、現在、国連CEDAW副委員長を務めるフランソワーズ・ガスパールさんが、まず「パリテ——男女平等のための新しい思想」について発表した。

ガスパールさんは、七〇年代末から八〇年代半ばにかけて下院議員を二期、欧州議会議員を一期務め、パリ北東の

ドリュエー市長の経験もあり、政治家としての活動歴も長い方である。だから、女性蔑視の文化が、どれほどフランスの政界を支配しており、参政権という権利の平等だけでは、政治の男女平等は実現しないことを、身を以て知っている。彼女がパリテ、つまり政治代表における男女の同数制を提唱するのは、そのためである。「パリテは、あらたな地平を拓くが、「パリテ」だけですべてが解決できるわけではない。」というのが彼女の報告の結論だった。

それに続く東洋大学の棚沢直子さんの報告「どのように『第二の性』から新しい平等の考えを読みとるか?」では、依存者とならざるを得ない乳幼児、高齢期を含む世代間関係を組み入れた、従来の個人の概念の問い直しを含む、あらたな平等の考え方の可能性が模索された。その中で、棚沢さんは、「女性研究は、少なくともジェンダー関係と世代関係という、ふたつの軸からされるべきだ」と主張した。日仏女性研究学会の中嶋公子さんの司会によるラウンドテーブルでは、上記の四つの報告を踏まえて、現実、日仏共に「ジェンダー平等にはほど遠い状況であること」を、確認した後に、日本でパリテは可能か、ジェンダー関係の平等を問うフランスのフェミニズム理論は世代間関係を問

えるか等の多様な問いが提起された。フランス側からは、フランスもすべてがうまくいっているわけではなく現実には多くの問題を抱えているという説明があった。短い時間だったが、率直に意見交換ができたことは、よかったと思う。

(日仏女性研究学会 石田久仁子)

〈9条の会〉講演会

—小田実さんの志を受けついで—

「平和憲法を守るという一点で手をつなごう」と設立された〈9条の会〉の呼びかけ人で、昨年七月に七五歳で亡くなられた作家の小田実さんを追悼する「9条の会講演会—小田実さんの志を受けついで—」が、同会主催で、三月八日東京渋谷区のC・C・レモンホールで開かれ、約二、三〇〇人が参加した。

作家の大江健三郎さん、評論家の加藤周一さん、哲学者・鶴見俊輔さん、三木武夫記念館館長・三木睦子さん、劇作家・井上ひさしさん、憲法学者・奥平康弘さん、作家の澤地久枝さんら、呼びかけ人の方がたが、故人の足跡をたどり、憲法への思いを語った。

小田さんは、ベトナム反戦などの平和運動をはじめ、自らも被災した阪神淡路大震災では生活再建支援の市民立法運動に取り組んだ。

大江健三郎さんは、『HIROSHIMA』を題材に小説家としての小田さんを論じ、鶴見俊輔さんは「小田さんを世界の思想史の中に置いてみたい」として、小田さんの思想を「批判的常識哲学」と評した。

加藤周一さんは、「小田さんは、戦争が、なし崩しに始まり、拡大していくものだ。戦争をどこで、いつ止めるか、その転換点を鋭く見抜いていた」「小田さんの遺志を受け継ぐということは、解釈改憲の継続を許さないことだ」と述べた。

九〇歳ながらかくしゃくとした三木睦子さんは、「憲法9条というのはまったくよくできた憲法」と強調。「謙虚で平和で楽しい日本にしてほしい」と期待を語った。

「良心的軍事拒否国家」という小田さんの考えを紹介した井上ひさしさんは、第二次大戦中に中立国が人道的な役割を果たした例を示し、「日本には、すばらしい憲法があり、これを国際関係に活かすこと」を提起。

奥平康弘さんは、小田さんも原告となっていた自衛隊の

イラク派遣違憲訴訟について言及。「憲法が人びとの生活や運動の灯台的な役割を果たしている」としながら、「司法という枠での海外派兵への違憲性を問うことの難しさ」を指摘した。大阪地裁の敗訴を「奥平さん、この判決はおかしいよな！間違っているよな！」と問いかけてきた小田さんに、簡単な返事は送ったものの、昨年じっくり話し合おうとしたが叶わなかったことの無念さを述べた。

最後に登壇した澤地久枝さんは「日本に市民という言葉を定着させたのは小田さん」と、市民運動家としての足跡を評価。「憲法の原点に戻りたい」という一点で集まった〈9条の会〉が、中曽根元首相ら改憲派の「新憲法制定議員同盟」から抵抗勢力として注目されるまでになったことをあげ、「私たちと対等に向きあえる関係になりたければ、議員をおやめになったほうがいい」と会場の笑いを誘った。

この日は小田さんが「人生の同行者」と呼んだパートナーの玄順恵^{ヒラズンヒュ}さんも姿を見せた。「小田は、ギリシャのデモクラシー、〈小さい力を合わせ知恵をもって社会をつくる人びとの力〉を信じていた」「それに『自由と平等』『平和主義』を加えたのが日本だ。それが9条だ」と、いつも言っていた。「一人でこつこつとやってこられたのは『9条

の会』のみなさまの熱い支援があったから」と感謝した。所用で参加できなかった哲学者の梅原猛さんは「私は戦後一貫して平和憲法を守れという態度をとっている。それは平和憲法、特に9条には人類の未来の理想が含まれているから」「改憲論者の多くは、日本をもう一度一九世紀の国家主義思想に戻そう、とするもので、そうである限り、私は一生、改憲の動きに反対を続けていこうと思っている」とメッセージで訴えた。

講演会の休憩時に呼びかけ人会議が開かれ、「小田さんは、今も私たちとともにいる」として、今後も九名の氏名・写真を配した〈9条の会〉のポスターやリーフレットなどに変えないこと、憲法セミナーを今年六月と秋に開催することなどが発表された。(小俣光子)

9条実現意見広告を成功させよう！ 「格差・貧困・戦争と憲法」

〈第七期市民意見広告運動事務局〉と〈市民の意見30の会・東京〉共催で、ジャーナリストの堤未果さんと憲法学者の奥平康弘さんを招いた講演会が、三月二三日、東京しごと

センターで開催され、一五〇人の参加がありました。

堤さんは、ベストセラーとなった著書『ルポ 貧困大国アメリカ』（岩波新書）をベースに、戦争国家アメリカが貧困を利用して戦争を続行し、それがまた新たな貧困を生む構造について語りました。日本における9条改憲反対運動でも、もっと生存権についての視点が必要ではないかとの指摘もありました。

また会場からの質問に答えてメディアが政権にとって都合なことを報道しない現状について、「メディアが一番怖いのは権力ではなく、視聴者、購読者のはず。我われが、よい報道（たとえば、NHKの番組「ワーキングプア」のような）に対しては、もっと評価する、育てる姿勢が必要では」との発言もありました。講演の最後にイラクへ派遣されたアメリカ軍兵士の詩が朗読され、綿密な取材に基づく堤さんの話に、会場は圧倒されました。

奥平康弘さんは、イージス艦事故についてふれ、「舞鶴を母港にする『あたご』が、あの日、なんの目的で、どこから横須賀沖に來たのかをメディアはほとんど話題にせず、事故の直前に行なわれたハワイ沖でのミサイルの迎撃実験に『あたご』が参加していたかどうかについての追及もない。

自衛隊の規律の緩みなどに問題を矮小化している」と指摘。

また、これまで日本政府が「9条を持つ国としてその精神を活かす政治をおこなわず、そのことを外交で主張せずに来た怠慢」にも言及しました。

壇上には〈キルトで9条を作る会〉の日高桂子さんが作成した日本国憲法がアップリケされた大きなキルトが飾られました。そのキルトの絵葉書が、来場者に配られ、「この葉書を使って一人でも多くの方に声をかけ賛同者をふやしてほしい」と、五月三日の意見広告の成功を呼びかけるアピールがなされました。

〔追記〕意見広告「非武装・不戦の憲法を変えさせるな」は賛同金の目標を達成し、本年五月三日（憲法記念日）に読売新聞全国版、東京新聞、西日本新聞に掲載されます。当日、日比谷公園にて掲載紙のコピーを五〇〇部ほど配る予定であります。（市民意見広告運動事務局 北原博子）

〈NPO現代の理論・社会フォーラム〉 第一回「沖縄研究会」に参加して

前号で紹介した〈NPO現代の理論・社会フォーラム〉

主催の第一回沖縄研究会「強制集団死の歴史認識を問う」(三月二五日、於専修大学)に参加した。以下は、そのあらましである。

報告者の渡名喜守太氏(沖縄国際大学非常勤講師・平和学)は、まず「集団自決」という用語の見直しを提起した。この言葉は、もともと文部省に「教科書の記述に入れるよう」に要求されてから普及したものであり、住民の自発的な「ある種の価値観に殉ずる死」という、自死を美化するニュアンスが付与されている。したがって、沖縄住民の集団死は、事実を明確に表わす日本軍による「強制集団死」と言い直されるべき、と自説を解説。次いで、強制集団死を「共同体の同調圧力による自発的な殉国死であった」と歪曲する流れを、一九七三年の曾野綾子『ある神話の背景』、一九八八年の家永教科書裁判、二〇〇〇年の宮城晴美『母の残したものの』、二〇〇三年の有事三法成立を契機とする小林よしのり「沖縄戦神話の背景」、曾野の慶良間諸島再取材、二〇〇五年の自由主義史観研究会による「沖縄プロジェクト」の立ち上げ、大江・岩波裁判、と、順を追って説明し、必要な批判を加えた。

さらに氏は、「こうした強制集団死を殉国美談化する動

きが目指すものは、死の原因を共同体の圧力や家族愛に帰着させることで日本軍の責任をあいまいにすること、および強制集団死の実像を追及するマスメディアと住民とを分断させること、それを通じて沖縄の反日感情を払拭させることである」と指摘し、これらが、日本全体の有事体制確立を目指す運動と連動している点を強調した。

最後に氏は、強制集団死の書き換えが繰り返し問題とされるのは、この問題を「加害者の処罰」というところまで追及してこなかったからだとの見解を示し、沖縄戦の状況は、実質的には準戒厳状態(合囲状態)とみなせるので、そうした場合の軍司令官や戦隊長の越権行為、および住民虐殺行為を禁じた陸軍刑法もしくはハーグ条約などの戦時国際法により、加害者として上官責任を問うことは、できないか、との問題を提起した。

研究会には二十名ほどが参加し、渡名喜氏の報告の後、活発な質疑応答や議論が交わされた。イージス艦事件と、その後の情報操作の記憶が新しかったせいか、「改憲を議論む勢力は(軍隊は国民を守るためにあるのではない)」という事実が露わになることを、もつとも恐れている。それが沖縄戦での集団強制死への軍閥与を何とか否定しようと

する動機にもなっているのではないか」という意見は、納得できるものだった。

加害者の処罰を追及する課題については、「従軍慰安婦」問題と違って、まだ検討すべき問題は多々あるが、運動のひとつの在り方として今後とも研究会で議論を続けることになった。

(牧 梶郎)

基地をけとばせ!

防衛省を五五〇人が「人間の鎖」で抗議

——へり基地反対協など三者が呼びかけ

去る四月六日(日)午後二時四五分、防衛省前で、合図のホラ貝とドラが鳴った。

ブオオ、ブオオ、ブオオ。ジャン、ジャン、ジャン。五五〇人の参加者は、手をつないで「人間の鎖」を実現した。

「基地は、いらな〜い!」。

「基地をけとばせ〜!」。

「安保や外交は国の専管事項」だって? 沖縄県民だって、岩国市民だって、国民だ。それとも国民ではないのか?

安保も外交も、直接関係者である住民・国民を除外するような「専管事項」では、ありえない。沖縄でも岩国でも神奈川でも、県民・市民には異論があるぞ。再編交付金をちらつかせる防衛省のやり方は許せない——。

この日の行動を呼びかけたのは、〈辺野古のへり基地反対協(安次富浩・共同代表ら)〉、〈沖縄平和市民連絡会(高里鈴代・共同代表ら)〉、〈辺野古へ基地建設を許さない実行委員会(一坪反戦・関東ブロックなどで構成)〉の三団体。この行動には、多数の団体・個人から多額の賛同金が集まり、この時だけで一四万七千円もカンパが集まった。すべて「米軍再編はストップすべきだ」、「基地負担は、ちっとも、軽減していかない」という怒りが結晶したものだ。

午後二時四五分から三回にわたって人間の鎖はつながった。ウェーブが起き、一方から他方へ、次つぎに流れた。

防衛省に向かってつないだ「鎖」は、今度は向きを変えて防衛省の外側にいる全国各地の仲間に向けて、再びつながれた。それは「みんなが力を合わせて、米軍には、米国へ基地を持って帰ってもらうようにさせよう!」という気迫が、参加者にみなぎった瞬間だった。

午後三時過ぎ、各地反基地団体の訴えにつづいて山内徳

信議員(社民党)が「沖繩の自然も住民も、防衛省の思う通りにはさせませんよ!」と強いアピール。

最初には吹かれたホラ貝は、かつては合戦を促すものだった。戦争にも軍国主義にもわれわれは反対だが、国民・住民の頭越しに軍事基地を新設したり移設したりすることには抵抗する権利がある。たとえそれが閣議決定であろうと、日米合意であろうと、われわれには、その不正義を止める行動をとることができる。ホラ貝は、その行動開始の合図だった。

それに、閣議決定といっても、政府首脳が一方的に決めただけだ。国民に意見を求めることもしていない。日米合意といったって、政府当局者が勝手に決めて地元を強制しているだけだ。両国で批准された条約でもない。日本語の正文もなく、英文からの仮訳だけだ。だからそのどちらにも、国民は拘束されるいわれがない。

沖繩には米軍基地の七五%が集中している。この上さらに米軍基地を名護市・辺野古に新設だって? それは許されない。普天間基地所属海兵隊八、〇〇〇人のグアム移設費用七、一〇〇億円は、なんと日本側負担だって? これも許されない。

第一、グアムに移設するのだったら、どうして辺野古に移設するのか? それでは、米軍は「グアムも辺野古も、両方いいただき」だ! こんなことを許してしまつて、果たしていいのか?

この後、午後六時から各地の反基地交流集会(参加者一五〇人)が行われた。

*安次富さんは防衛省に向かって、「戦争絶滅受合法案」の存在を明らかにした。同法案はデンマーク陸軍大将フリッツ・ホルム起草によるもので、「戦争行為の開始又は宣戦布告の効力生じたる後」は、国家元首や総理大臣や、その親族らを戦争の「最前線に送り、敵の砲火の下に実戦に従わしむべし」とするもの。長谷川如是閑によつて一九二九年、雑誌『我等』で紹介されたという。

(沖繩・一坪反戦地主会関東ブロック/吉田)

沖繩・岩国・神奈川——全国交流集会で状況報告

辺野古「アセス是一年遅れ」に

沖繩をだます「沖繩の悲願」

移駐容認の市長は、僅差で当選(岩国)

孤立させられそうになりながらも、粘り強く各地で反基

地運動を続けているメンバーが、去る四月六日午後、防衛省「人間の鎖」行動の後に文京区民センターで開かれた「基地建設を許さない交流集会」に参加した。集会の主催は、「人間の鎖」を呼びかけたヘリ基地反対協などの三団体。

米軍再編に協力しない自治体には交付金を払わない——。卑劣なやり方だが、辛い立場に置かれた自治体・住民の中には、やむなく基地容認をさせられるところも出ています。相模原市は、唯一、反対姿勢を崩さず交付金を受けないでいる自治体だ。

そこでどうする？ 互いにはよく知らないで必死の反対運動を続けてきたメンバーは、自分らの状況を紹介しあつた。

ヘリ基地反対協・代表委員の安次富さんは、「沖縄県のアセス審査会への傍聴行動を積み上げ、沖縄防衛局に米国へ「アセス実施一年遅れを通告」させるところまでは、できた。しかし海上保安庁から呼び出されて「あまり激しすぎる。なんとかありませんか？」と言われていた。しかしおとなしくやっているだけではだめ。来年はみなさんの力を借りて、ゴア元副大統領を沖縄に呼びたい」などと語った。

沖縄平和市民連絡会の高里さん（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表）は、「沖縄の悲願」に

応えて普天間のグアム移設、辺野古移設というのが、それは沖縄をだます言葉。米軍による事件・事故は、米軍駐留そのものによって起きる構造的なものであって、個人的なものではありえない。『新たな基地は作らせないこと』がどうしても必要です。」と強調。

岩国の田村さん（住民投票の成果を活かす岩国市民の会）は、「井原前市長が厚木からの艦載機移駐に反対したため、交付金だけでなく新庁舎建設補助金も凍結された。移駐容認の福田市長が僅差で当選したが、負けは負け。新市長になつたら、新市庁舎補助金三五億円は一週間で交付された。

新市長は、短いフリーズで、「移駐に反対すれば『市立病院もなくなる』が、賛成すれば学校施設耐震化も五年でできるし医療費や保育料は軽減できる、など、あらゆる宣伝をやった。しかし一年後に新市長をリコールしたい三千人の新政治団体も、すでに立ち上げている。また昨年十月に米兵四人が広島でレイプしたが、『日本の警察が起訴しないものを米軍が四人を軍法会議にかける。』というのは、現状の地位協定の姿を映すものだ」と発言した。

次に「原子力空母の母港化に反対し、基地のない神奈川をめざす県央共闘会議」から、檜鼻事務局長が、「着々と

進められるロード・マップ。これをどう阻止するか？ 県

央共闘は二〇〇二年に作られた自治体ぐるみの運動体。岩国と結び、その『パッケージ』を崩す闘いだ。厚木の艦載機は『岩国に行ってもらいたい』という人もいる。そこで井原・岩国市長にきてもらったら、『岩国には来てもらいたくない』どちらも同じ闘い』と発言。

座間への米軍第一軍団移設に反対している〈バスストップから基地ストップの会〉からは、牛島さんが、相模原で行われた「完全武装で市民に銃口を向けた訓練は、たとえ『週に一回』であつても許されないこと。皆さんも抗議をと、訴えた。

〈すべての基地に『No!』を・ファイト神奈川〉の木元さんは「横須賀市に対して空母のためのしゅんせつ工事差し止めの提訴をしている。また横須賀市に対しては、空母配備の是非を問う市民投票条例制定要求の署名運動をしている。署名目標は六万人」。

〈横田行動実行委員会〉の井上さんは、「そもそも首都・東京に米軍基地を置き続けるのは日米関係の象徴。横田周辺六自治体は『静か』だ。立川新市長も、何も言えない。今はなんと、三人でピラまきしている」現状を報告した。

〈平和フォーラム〉の八木さんは、「米国大使館に抗議に行き、中に入れてもらえた。話は聞いてもらえた。だが『協定を変えてくれとか、基地をなくしてくれとは言われていません』。外務省はまったくそれを伝えていない」と、悔しそうに報告。

〈全労協〉の中岡さんは、「希望は戦争」と言った若者がいる。希望があるとすれば、少なくともそうした若者が声を出し始めていることだ。昼間の〈人間の鎖〉の行動に、〈全労協〉の若者も参加した」と痛苦の発言。

また、〈日本平和委員会〉の佐藤さんは「米軍基地についてのペンタゴン実情報告」は、まったく知らないでいた。基地をなくさなければ安保廃棄もできない。ベネズエラに明日、代表一八人を派遣する」と発言した。

この後、山内議員の発言と辻元議員からのメッセージがあり、「理不尽な状況を、各地で闘う人びとと連携すること、変えていくことができる」と確信します」という集会アピールを採択した。

*米軍の性犯罪が、二〇〇六年は、前年比二四%増の二、九四七件だったという米国防総省の報告。

(沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック 吉田)

あぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐら

【316号】

はじめまして。私はいわゆる団塊の世代に属するおとこのひとりです。

先日、文京区民センターで小選挙区制廃止をめざす集会があり、その折に初めて『あぐら』を知り、316号を買いました。こんなに多くのひとの声が掲載されている編集に感心し、現実にしつかり立ち向かっている姿勢に敬意を覚えます。またソフトな印象が好ましく、安らいだ思いです。

さて316号表紙裏にあった、しま・ようこさんの詩「じわじわと」を読んだ、強い感慨を覚えました。主観的に述べて恐縮ですが、どうも何か胸につかえるものが拭えませんでしたので、非礼を省みずお手紙します。

「じわじわと」を二、三度読んだら、

何となく不安な気分に襲われました。「わたし」は夢の中で醒めている、あるいはじっと身動きせず何か来るものを待っている、と言った印象でした。いくつも輻輳するイメージが多義的な単語で表現されているので、単純な一焦点に収まらず、印象が一定せず浮遊状態でゆらゆらと生きている。それこそ言葉の力でしよう、内包の豊かさを感じました。

「日暮れ」「見限る」「身を切る包丁」「最後になつた暦」「目を閉じる」わたしは少なくとも明るく響かず、じわじわと「闇」の方へ閉じているか、そこへ向かっている。詩は、書かれたら作者の手を離れて、それを受け取った者に多様な波紋を及ぼします（言わずも

がなですが）。この詩から私が受け取

ったものを書き尽くす能力はありませんが、見えないものが生まれ出て来る予兆が、それと相反して（終末へ？）向かつて閉じて行く不安が立ち昇って、同時に起き、どちらも歓迎されないような不可解な核心が潜んでいるように思いました。最近には心に触れる詩に遭遇せず、自分の感性も尽きたかと、いささか散文的にさびしかったので、一編の詩を、これほど足を止めて読み返したのは何年ぶりか、とても嬉しい出会いでした。感謝します。

ただ、この詩が、さり気なく語り、しかもなお力強い潜勢力で訴える「不確かなもの」が、現身の「わたし」にそのまま直結するものではないことを願っています。

ビクトル・ユゴーはあまり読みませんが、「貧しい人びと」は、しっかりと読んでみます。本棚には、ヴァージニア・ウルフを積んでありますが、わかりにくい文章で捗りません。強大な権力や騒音が優勢な現実で、フェミニズムが

困難である限りは、男の不幸も終わらないでしょう。なすべきことは目前にありますから挫けず行こうと思います。しま・ようこさんと皆さんのご健勝を祈ります。二〇〇八年四月二十三日

(川崎市 伊藤英雄)

〔317号〕

あこら317号を読みました。わたしも「沖繩のホンネ」を聞く、それだけでなく、こたえる、ということをしごく大事なことだと思っています。そして、それがとても難しいということも。そのため、沖繩も含み「マイノ

リティ女性」というコトバと問題提起に、どう日本社会が、日本女性が真摯にむきあうか、自分ひとりでは難しいけれど、ひとびととまじめに語り合うなかで答えを探したい、と考えるようになりました。

都内で催している「立ち上がりつながらるマイノリティ女性—アイヌ女性・部落女性・在日朝鮮人女性によるアンケート調査報告と提言」(反差別国際運動日本委員会発行)の読書会で、317号を紹介しました。すぐにはできなくても、わたしたちもまた、答えるために準備をしていこうと思っています。

(橋本 育)

〔編集後記〕

◆あこら誌と並行して、三年間携わってきたわが街、府中の女性史も此の度発刊され、次世代に継ぐべき、「戦争は

二度と起こしてはならない」の不戦の祈りをこめて綴り終わった。男女共同参画都市宣言もあいまって、行政への呼びかけが効を奏した。呼びかけが大切。三十五周年記念の呼びかけに今後とも尽力して行く所存です。(滝島典子)

◆人びとが〈あこら〉に集うように、この号はできたと思います。

この困難の時に、多くの方がたに希望をもたらしますように。(中村道子)

◆毎日毎日届く、感動的なメッセージ。〈あこら〉の方は、なんとやさしい方ばかり……と励まされた一か月でした。創刊号を、「スピリチュアル・プーケ」と評してくださった方がいらしたことを、三十六年ぶりに思い出しました。

(斎藤千代)

〔三二八号の編集協力者〕

荻原有希／小俣光子／斎藤千代／
斎藤 涼／滝島典子／中村道子

〈あごら〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……

心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。

どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

〈BOC〉の登録もどうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOC＝バンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。

各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごら〉会員のの方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル

電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014

Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごら 318号(新宿発) あごら35年に想う

●編集 あごら新宿 ●発行 2008年4月20日 ●印刷 藤田印刷(株)

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,000円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部



9784893061737



1920036010004

ISBN978-4-89306-173-7

C0036¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

2008年も〈あごら〉をよろしく

平和と平等を追求する
『あごら』近刊シリーズ

「沖縄特集号」を読んで

9条世界会議に参加して

あごら101〜200号一覧

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集
校正・デザイン・レイアウト
各国語翻訳その他

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 FAX3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版